

洗馬燒  
和兵衛窯跡  
発掘調査報告書

1996

塩尻市教育委員会

洗馬燒  
和兵衛窯跡  
発掘調査報告書

1996

塩尻市教育委員会



洗馬燒和兵衛窯跡遺景(東から)



和兵衛窯跡(東から)

卷頭図版 2



窯跡（真上から）



窯跡全景（真上から）



調査前の窯跡近景

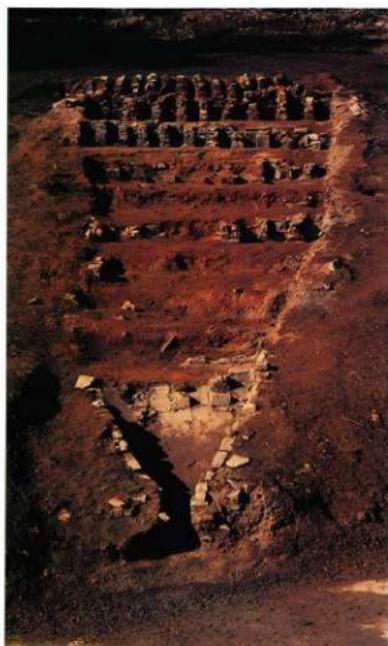


窯跡全景

図 版 2



1号窑跡



2号窑跡



2号窑跡 6室～通道



2号窑跡 焚口

図 版 3



調査区全景(平成4年度調査)



工房跡

粘土野め  
遺物出土状況





粘土貯め  
遺物出土状況



粘土出土状況



粘土貯め完成

図版5



1号土坑埋土  
遺物出土状況

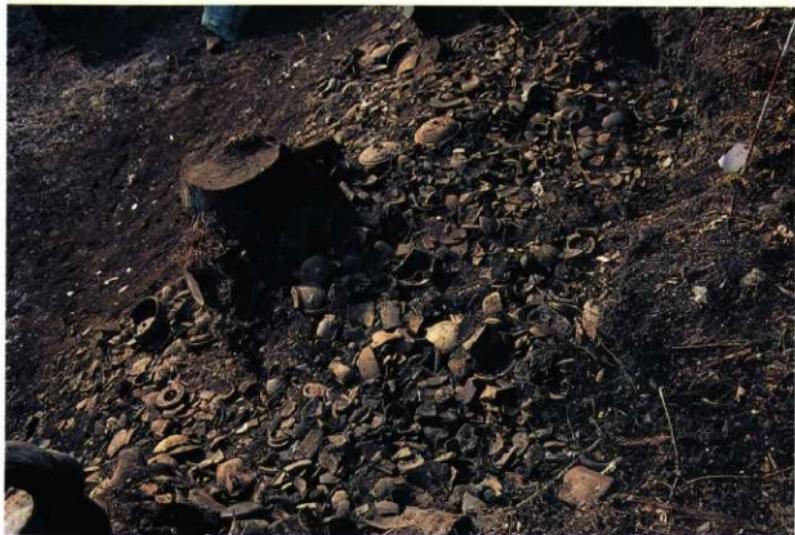


2号窯焚口と1号土坑



白色器出土状況

図 版 6



灰原遺物出土状況



灰原堆積状況



第2号窯廬木簡出土樹板

3



4



6



7



8



9

工房跡出土遺物

図版 8



10



11



12



13~24



25~45



49



51



52

工房跡出土遺物



53



58



62-66



60



61(1)



61(2)



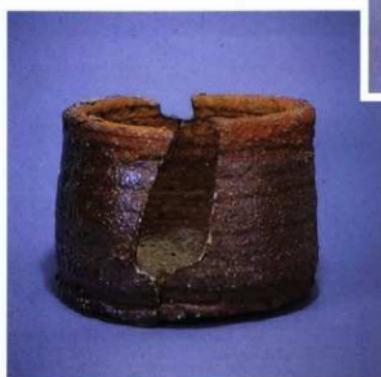
68-69



70-73

工房跡出土遺物

図版 10



工房址出土遺物



3号土坑出土遺物



104



110



111



113



114



115



119



123

図 版 12



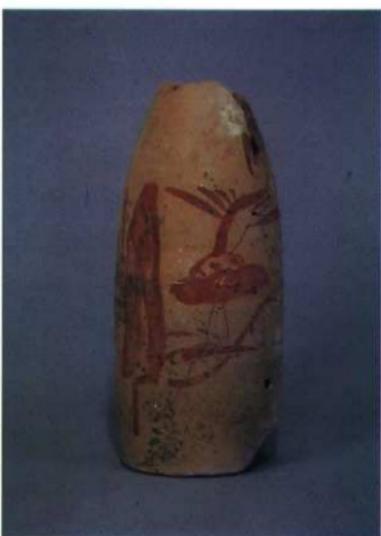
124



125



126



127

3号土坑出土遺物



139-136



149



150



151



156



154



157

6号土坑出土遺物

図版 14



158



162



164



167



169



172~180



182~189

灰原出土遺物



190



204



212



221



222



224

図 版 16



250



249



251



256



257

灰原出土遺物



259



267



272



276



277(1)

灰原出土遺物



277(2)

図版 18



278(1)



278(2)



280



292-293



291-290



294-293



295



299-300

灰原出土遺物



301・302・304・305



315・303



309～312



317



340・339



333(1)



333(2)

灰原出土遺物

図版 20



341(1)



341(2)



342・344・346・347



349(1)



349(2)



350



352



349(3)

灰原出土遺物



351(1)



351(2)



353(1)



353(2)



358(1)



358(2)



359・360・362

灰原出土 遺物



354

# 序

和兵衛窯跡のある塩尻市洗馬地区は、江戸時代末期から明治にかけて窯業が盛んに行われた所で、その製品は「洗馬焼」として今に伝えられています。このたび県営畑地帯総合土地改良事業がこの地域に入り、農道を開設していたところ多くの陶器類が発見されました。事業予定地内には登窯の存在が予想されたため、長野県教育委員会と塩尻市教育委員会は事業施工者である長野県松本地方事務所と請負業者を交え協議を行った結果、埋蔵文化財の保護を図るために発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は平成4年度と5年度の2回にわたって行われ、冬期の調査ではありましたか、参加者の皆様のご尽力と地元の方々の深い御理解にも恵まれて作業は順調に進み、無事終了することができました。その結果、江戸時代末期の連房式登窯2基をはじめ、付属施設である工房跡や土坑などを発見し、また貴重な遺物も数多く得ることができました。これらは、洗馬焼の始まりや当時の様子を解明する上で大きな前進をもたらしたと言えましょう。

終りにあたり、本調査に御理解、御協力を下さいました地元関係者、地権者の皆様方をはじめ、献身的に発掘調査に携わっていただいた参加者の皆様に衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成8年3月

塩尻市教育委員会

教育長 平出友伯

## 例 言

1. 本書は、平成4年度畠地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区に伴う和兵衛窯跡（長野県塩尻市大字洗馬所在）の発掘調査報告書である。
2. 現場での調査は、平成4年12月22日から平成5年1月19日までと平成5年11月12日から平成6年3月12日までの2回にわたって実施した。遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、平出博物館において平成5年1月から平成8年3月まで行った。分担は次のとおりである。  
遺構…整理 トレース・小口 遺物…洗浄 註記・一ノ瀬 大和 古賀 土器復元・市川 一ノ瀬 古賀  
遺物…実測 トレース・小林 山本 小口 写真・小口
3. 本書の執筆は、第I章～第III章3節を小口、第III章4節～第VI章-4を小林が、第IV章-5を中島章二が担当した。
4. 調査にあたり、次の方々の御指導・御協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略)  
藤沢良祐 平林 彰 竹内晴長 樋口昇一 中野勝俊 中野良男 征矢野利幸 寺沢順三 塚原雅敏  
下平達郎 熊谷 茂 中島章二 上條卯太郎 伊藤一男 古牧 學 塚原昭治 長興寺 長野県松  
本地方事務所 土地改良第二課
5. 本調査の出土品・諸記録は平出博物館で保管している。なお、今回の調査の出土品に注記した遺跡番号は平成4年度が「63」、5年度が「68」である。

# 目 次

## 序

### 例 言

第I章 調査状況	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3
第4節 遺跡の状況と面積	5
第II章 遺跡周辺の環境	6
第III章 調査結果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 調査区の設定	8
第3節 遺構	8
1. 第1号窯跡	8
2. 第2号窯跡	14
3. 工房跡	15
4. 土坑	18
5. 灰原	23
第4節 遺物	23
1. 第1号窯跡	23
2. 第2号窯跡	23
3. 工房跡	24
4. 土坑	28
5. 灰原	32
第IV章 考察	93
1. 遺構の場所と変遷	93
2. 窯体構造について	94
3. 製品の特徴と変遷	96
4. 関連する古文書と和兵衛窯	102
5. 洗馬窯の創業とその窯場	105
第V章 調査のまとめ	108
参考文書「諸入用扣帳」	115
写真図版	

# 第一章 調査状況

## 第1節 調査に至る経過

平成4年11月17日、塩尻市立西部中学校教諭、桐原邦夫氏から市内洗馬元町の道路工事現場で陶器の破片などが散乱しているという内容の電話が平出博物館にもたらされた。連絡を受けた小口は現地に赴き遺跡の状況を確認すると、新発見の遺跡であること、工事が進行しており破壊の恐れがあることが判明した。翌11月18日、県教育委員会文化課百瀬新治主事、松本地方事務所、市農林課、市教委立会いのもとで現地協議を行った。その結果、発掘調査が終了するまで工事を中止することに決定した。これに基づき発掘調査は12月21日～平成5年1月19日まで実施した。

平成4年12月19日 塩尻市教育委員会から遺跡発見の通知を提出。

12月19日 埋蔵文化財・洗馬焼窯跡発掘調査の通知を提出。

12月21日～平成5年1月19日 現場における発掘調査を実施。

1月22日 埋蔵文化財の取得届けを提出。

1月22日 発掘調査終了届の提出。

月 日 埋蔵物の文化財認定について通知。

平成5年11月9日 埋蔵文化財・洗馬焼窯跡発掘調査の通知を提出。

11月12日～平成6年3月12日 現場における発掘調査を実施。

3月22日 埋蔵文化財の取得届けを提出。

3月22日 発掘調査終了届の提出。

3月31日 埋蔵物の文化財認定について通知。

### 発掘調査計画書（一部のみ掲載）

1. 発掘調査地：塩尻市大字洗馬元町2104-2、3390

2. 遺跡名：洗馬焼 和兵衛窯跡

3. 発掘調査の目的及び概要：県営畠地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区・支線12号工事に先立ち、100m以上を発掘調査して記録保存を図る。遺跡における発掘作業は平成7年3月25日までに終了する。調査報告書は平成8年3月25日までに刊行するものとする。

4. 調査の作業日数：発掘作業40日・整理作業148日・合計188日

平成4年度 発掘作業10日・整理作業10日・合計20日

平成5年度 発掘作業30日・整理作業50日・合計80日

平成6年度 発掘作業0日・整理作業50日・合計50日

平成7年度 発掘作業0日・整理作業38日・合計38日

5. 調査に要する費用：14,950,000円

平成4年度 1,000,000円

平成5年度 6,650,000円

平成6年度 1,000,000円

平成7年度 6,300,000円

6. 調査報告書作成部数：300部

7. 発掘調査の主体者及び委託先：塩尻市教育委員会

## 第2節 調査体制

団長 平出友伯 (塩尻市教育長)

担当者 小口達志 (長野県考古学会員、市教育委員会)

調査員 小林康男 (日本考古学協会員、市教育委員会)

小松 学 (長野県考古学会員、市教育委員会)

市川二三男 (長野県考古学会員)

山本紀之

参加者 市川隆一 内川初雄 小沢甲子郎 大槻とめ 大槻ひと江 北沢喜子雄  
熊谷千江子 黒沢広光 小林平市 小松美喜男 小松千元 小松幸美  
小松義丸 三溝 昭 三溝英子 清水年男 征矢野公子 田村志づか  
高橋阿や子 高橋島億 高山一恵 寺沢俊子 中村房男 藤松謙一  
丸山恵子 宮崎秀賢 山口仲司 由上はるみ 一ノ瀬 文 一ノ瀬保美  
大和廣 古賀馨子

事務局 市教委総合文化センター所長 武井範治 (平成4・5年度)

タ タ 小野克夫 (平成6年度)

タ タ 横山哲宜 (平成7年度)

タ 文化教養課長 松崎宏征 (平成4・5・6年度)

タ タ 武居和雄 (平成7年度)

タ 文化教養担当副主幹 大和清 (平成4・5年度)

タ 平出博物館長 小林康男

タ 平出博物館学芸員 小口達志

タ タ 小松 学

## 第3節 調査日誌

### 平成4年度

- 12月21日(月) 晴 本日から作業開始。峯畠遺跡の発掘現場から機材を搬入する。調査区を含めた周辺の地形測量を行う。表面にある陶器や匣鉢の破片を取り上げ、振り下げを開始する。
- 12月22日(火) 晴 調査区に $2 \times 2$ mのグリッドを設定し、ジョレンによる振り下げを行う。10・11グリッドからレンガ積みの階段状遺構が検出される。県文化課百瀬新治氏、松本市教委熊谷康治氏、高桑俊雄氏来跡。
- 12月23日(水) 曇一時雪 引き続き振り下げを行うが、表土を取り除くとほぼ全域で遺物が出土しはじめ、物原が良好な状態で遺存していることが明らかとなる。道路下の斜面には余り遺物は見られない。昨日、検出されたレンガ積みの階段状遺構に粘土、焼土が確認できる。
- 12月24日(木) 曇一時雪 引き続き振り下げを行う。6-1グリッドから石積みの遺構が検出される。  
樋口昇一氏来跡。
- 12月25日(金) 晴 道路下に調査箇所を移し、昨日検出された石積み遺構の周辺を振り下げる。レンガ積みの階段状遺構を含む10グリッドのセクション図化。
- 12月26日(土) 石積み遺構中の石の隙間から三角ピンがまとまって出土。焼成されておらず、未使用のものを残したと考えられる。12-4グリッドからこね鉢の破片が集積した状態で出土する。写真撮影後、取り上げて振り下げたところロームに振り込まれた土坑を検出し、第1号とする。石積み遺構を含む7グリッドのセクション図化。今冬一番の冷え込みで-8.5°Cを記録する。
- 12月27日(日) 晴 10・11-2・3グリッドで検出された窓跡の焚口がほぼ振り上がる。
- 12月28日(月) 晴 小松克己氏、矢彦富三氏、中島章二氏、樋口昇一氏、市教委、市農林課で現地協議を行い、現状保存の方向で進めることとする。
- 12月28日(月)～12月31日(水) 年末休み

### 平成5年度

- 1月1日(木)～1月5日(火) 年始休み
- 1月5日(火) 晴 地方事務所、松本土建、市農林課南山課長、中原、島、市教委松崎課長、大和、小林、小口の立会いもとで現地協議を行う。その結果、現状保存で道路を迂回することに決定した。
- 1月6日(水) 晴 作業を再開する。
- 1月7日(木) 雨 天中止。第1号土坑の断面を含む12グリッドのセクション図化。
- 1月8日(金) 晴 4・5-3・4グリッドで新たに登窓の一部を検出し、振り下げを開始する。1号土坑を振り下げたところ、底面から丸ガレ、棚板、粘土が出土する。
- 1月9日(土) 晴 濑戸市歴史民俗資料館の藤澤良祐氏を招き、現地指導を受ける。
- 1月10日(日) 曇／雨 引き続き振り下げ。1号土坑の平面図作成。雨天により午後の作業中止。
- 1月11日(月) 晴 前日の雨で、1号窓上部の灰原が崩れ落ち、多量の遺物が散乱していたため、調査に手間取ってしまった。10・11-2・3グリッドで検出された窓を2号とし、焚口の平面図を作成する。石積み遺構の振り下げを引き続き行う。
- 1月12日(火) 晴 石積み遺構の振り下げを続け、石積み隙から多くの陶器が出土する。また、平坦で堅緻な床面を検出したことによって、この遺構が窓跡に伴う工房址と推定された。工房址の石積みを平面

図化、写真撮影。

1月13日(水) 晴 工房址の南端で、石を積んだ長方形の造構が床下に構築されているのを検出し、掘り下げる。埋土からは灯明皿、蓋、土瓶、すり鉢、窯道具などが多量に出土する。また、底面近くには粘土の塊が検出され、粘土の貯蔵場であることが推定された。

1月14日(木) 曇 夜半からの雪で10cmほどの積雪となった。工房跡の石をはずし、掘り方を観察する。本日で作業員による作業を終了する。

1月19日(火) 晴 機材を撤収し、現場による作業を全て終了する。

1月22日(金) 晴 現地で窯跡に影響のないように工事の進め方について協議を行う。

平成5年度

11月11日(木) 雨 機材搬入。雨天にて作業中止。

11月12日(金) 曇 本日から作業開始。テント設営。調査区全体にグリッド設定した後、地表に出ている遺物を拾い集める。その後、灰原から掘り下げを開始する。

11月13日(土) 曇 引き続き掘り下げるが、1号窯の南から素焼きの破片が多量に出土した。

11月14日(日)・15日(月) 定休日

11月16日(火) 快晴 引き続き掘り下げる。灰原の堆積は厚いところで50~60cmに及んでいる。

11月17日(水) 晴 引き続き灰原掘り下げ。

11月18日(木) 曇／雨 引き続き灰原を掘り下げる。雨天にて午後の作業中止。

11月19日(金) 晴 引き続き、1号窯上部の灰原を掘り下げる。

11月20日(土) 雨天中止

11月21日(日)～24日(水) 定休日

11月25日(木) 晴 6~8~11グリッド掘り下げ。灰原から冬眠中の蛇11匹出現。今冬一番の冷え込み。

11月26日(金) 晴 1号窯上部に堆積した灰原のセクション図化。ベルトを外す。

11月27日(土) 晴 引き続きベルト掘り下げ。

11月28日(日)・29日(月) 定休日

11月30日(火) 晴 1号窯の上端から半裁した匣鉢を埋め込んだ列が検出される。

12月 1日(水) 雨／晴 灰原掘り下げ続く。2号窯の上部と考えられる煙道部を検出する。

12月 2日(木) 晴 灰原掘り下げ続く。

12月 3日(金) 晴／雨 灰原掘り下げ続く。雨天にて午後の作業中止。

12月 4日(土)～6日(月) 定休日

12月 7日(火) 曇／晴 灰原の掘り下げがほぼ終了し、2基の窯跡の検出面が現れる。

12月 8日(水) 晴 潤戸市歴史民俗資料館の藤澤良祐氏を現地に招き、窯跡の調査方法・手順などの指導を受け  
る。2号窯跡のセクションベルト設定。

12月 9日(木) 晴 1号窯跡セクションベルト設定後、下部から掘り下げを開始する。2号窯跡も並行して掘り  
下げを始める。

12月10日(金) 晴 引き続き2基の窯跡を掘り下げる。

12月11日(土) 雨／晴 掘り下げ続く。1号窯は残りがよく、焼成室の床面まではかなり深い。2号窯の捨間か  
ら2の間にかけては壁や狭間などが残っておらず、階段状の落ち込みを確認する程度である。

12月12日(日)・13日(月) 定休日

12月14日(火) 雨天中止

12月15日(水) 晴 1・2号窯掘り下げ続く。1号窯の4~5の間床面下に土坑を検出する。被熱した床面下には黒色土が充満して陶器の破片が混じった埋土があり、土坑の壁・底面はともに堅緻な造りであった。第6号土坑とする。

12月16日(木) 晴 1・2号窯、6号土坑掘り下げ。NHK取材のため来訪。

12月17日(金) 晴 引き続き掘り下げ。

12月18日(土) 晴 現地説明会を行う。見学者150人。

12月19日(日)・20日(月) 定休日

12月21日(火) 晴 前日の雪が残るが、年内終了に向けて作業を続ける。

12月22日(水) 晴/雪 3号土坑を掘り下げるが、白色の釉薬を特徴とする徳利の破片が多量に出土する。灰原から出土した陶器とは全く異なっている。ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。

12月23日(木)・24日(木) 定休日

12月25日(土) 晴 引き続き、3号土坑掘り下げ。1・2号窯精査した後に写真撮影。

12月26日(日) 定休日

12月27日(月) 晴 3号土坑完掘後、全体写真撮影。終了後、1号窯エレベーション図化。本日にて作業員による調査を終了する。

平成8年1月に平面図作成及び遺構観察を行い、すべての作業を終了する。

整理作業は平成5年1月~平成8年3月まで平出博物館において実施され、出土品、記録類の整理、報告書の図版作成、原稿執筆作業をもって終了となる。

発掘調査終了後、窯体保存のために砂による埋め戻しを行う。

平成7年3月31日には市の文化財に指定されることになった。

#### 第4節 遺跡の状況と面積

調査年	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	調査面積	発掘経費
4	塩尻市大字洗馬元町	畑地・荒地	近世登窯	1,000m <sup>2</sup>	270m <sup>2</sup>	250m <sup>2</sup>	1,000,000円
5	〃	山林・荒地	〃	—	—	240m <sup>2</sup>	6,650,000円
6					—	—	1,000,000円
7					—	—	6,300,000円

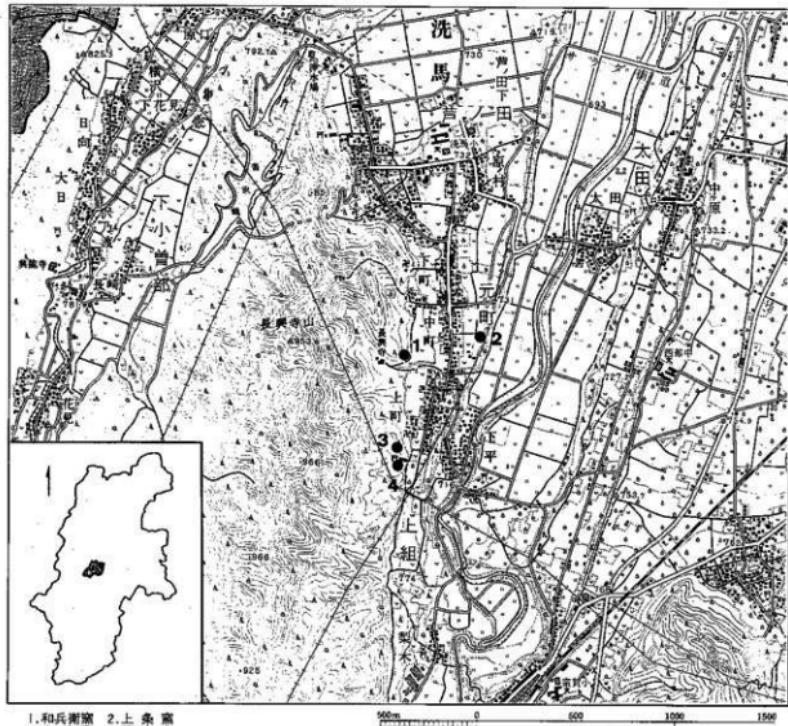
第1表 発掘調査経過表

月 日	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	主な遺構	主な遺物
	22	19	発掘	遺物整埋	近世登窯焚口部2基	工房址1基	土坑1基	近世登窯2基	土坑5基	—	—	—		
4													• 近世陶磁器類 • 窯道具	
5													• 近世陶磁器類 • 窯道具	
6													—	—
7													—	—

## 第二章 遺跡周辺の環境

和兵衛窯のある本洗馬は、奈良井川の左岸段丘上にあり、西側は長興寺山（953.6m）と妙義山（895.0m）が連なっている。集落は南から北へ上組・元町・芦ノ田と並び右岸の太田とともに本洗馬を構成している。西の山麓の平坦部に広がるこの地区は、原始から人々の痕跡が残されている。

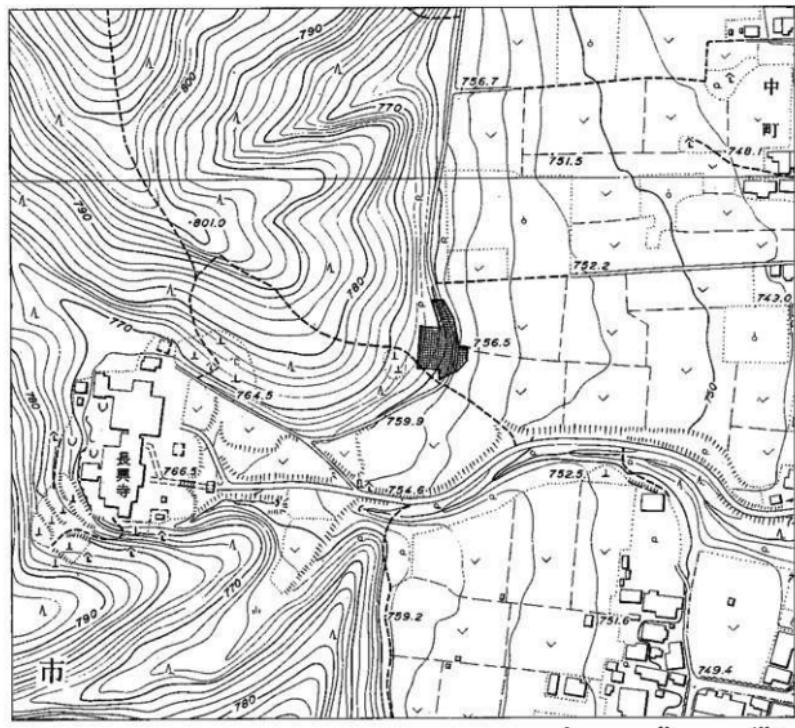
古くは、水利のよい芦ノ田が本洗馬の中心であったと考えられるが、中世に西洗馬から三村氏が移り、城下町を形成してから、その中心は元町の地に移ったとされている。三村氏は、城下町を設定するにあたって、家臣の屋敷は元町の西側に広くとり、東側は細かく屋敷割りをして庄屋の屋敷にしたとされ、付近一帯は農村でありながら、整然とした村落となっている。元町は、城下町として整備されるとともに市場が開設されて繁盛していたが、中山道が開設されると近郷の洗馬宿や本山宿の繁栄とともに市場が閉鎖され次第に衰退するようになった。和兵衛窯の南西側にある長興寺は、寺伝によれば大永7（1523）年に三村忠親が創建したとされ三村一族にかかるる寺である。



第1図 和兵衛窯跡位置図

元和4（1618）年から高遠領に属し、元禄以降は高遠領西五千石洗馬郷の中心地として発展したが、高遠藩の財政危機に関連して、琵琶橋事件や洗馬騒動が発生した。しかし、その一方で本洗馬は高遠城から遠く離れ、飛地としての自由な気風のもとに独自の文化を育んでいった。ことに天明から文化・文政期には多くの文人墨客がこの地を訪れ、それらの人々との啓発と感化により洗馬文化が発展した。中でも、菅江真澄は天明3（1783）年、奥州への旅の途中で本洗馬に来て1年余りを釜井庵で過ごし、「真澄遊覧記」の信濃之部をこの庵で著している。

江戸時代後期から大正初年にかけて本洗馬では焼物が盛んにおこなわれ、洗馬焼として有名であった。洗馬焼とは本洗馬で行われたいくつもの窯の総称であり、上条窯・山崎窯・信斎窯などがあり日用雑器が焼かれた。洗馬焼の初めは滋賀県信楽町生まれの中川松助と三重県生まれの大官某によって始めたとされるが、現在確認できる作品は長興寺に残された「安政六年二十世量海代瀬戸屋松助」の墨書銘がある臥牛像のみで詳細は不明である。また、奥田信斎の作品は信斎焼と呼ばれ、熔融釉を浸出させた線と色の美しい作品を今に伝えている。



第2図 調査地区図

## 第III章 調査結果

### 第1節 調査の概要

発掘調査は、農道開設工事に伴い平成4年と5年の2ヶ年で行われ、調査総面積は490m<sup>2</sup>である。調査の結果、近世の登窯2基、工房跡1基、土坑6基が検出され、ほぼ同時期の所産と推定される。登窯は2基ともに下方から上方に向かって横幅が大きくなる連房式登窯で、1号窯は胴木間以下、7室を有し、2号窯は同じく9室を有している。工房跡は2基の登窯が築かれた斜面の下方に掘り込んで造られており、3面の壁には土留めの疊が積まれている。土坑は、登窯の周囲と1号窯の床下から検出され、陶磁器類の破片や粘土塊が出土している。

遺物は陶磁器や窯道具の破片など数十万点に及ぶが、その多くは灰原からの出土である。特に1号窯の上部は、調査前から厚く堆積した灰原が確認でき、匣鉢・トチンなどの窯道具、陶器が多量に出土した。遺構に伴うものでは、2号窯、工房跡、3号土坑、6号土坑からの出土がある。2号窯はわずかに2点の製品が出土しているのみである。工房跡は壁際及び粘土貯蔵場から陶器・磁器・窯道具などが多く出土している。3号土坑からは多くの陶器・磁器が出土しているが、とりわけ本登窯で焼成されたとされる稚拙な磁器は本遺構のみにみられ、際立った特徴となっている。6号土坑は、1号窯の焼成室床面下から検出され、匣鉢・擂鉢などが主に出土している。

今回の調査は、江戸末期から明治・大正時代へと続く洗馬焼の初源を明らかにするだけではなく、近世の地方窯業の実態を解明するうえでも、貴重な資料を提供したと言えよう。

### 第2節 調査区の設定

平成4年の調査では、道路予定地全てを発掘対象として調査を進めた。南北に南から2m間隔で1~19グリッドを設定し、東西には東から1~13グリッドを設定した。

平成5年の調査では2基の窯体の全貌を明らかにするため、斜面の上方に向かって調査グリッドを伸ばした。その結果、調査対象となったグリッドは、南北が1~12、東西が8~13を数える。

### 第3節 遺構

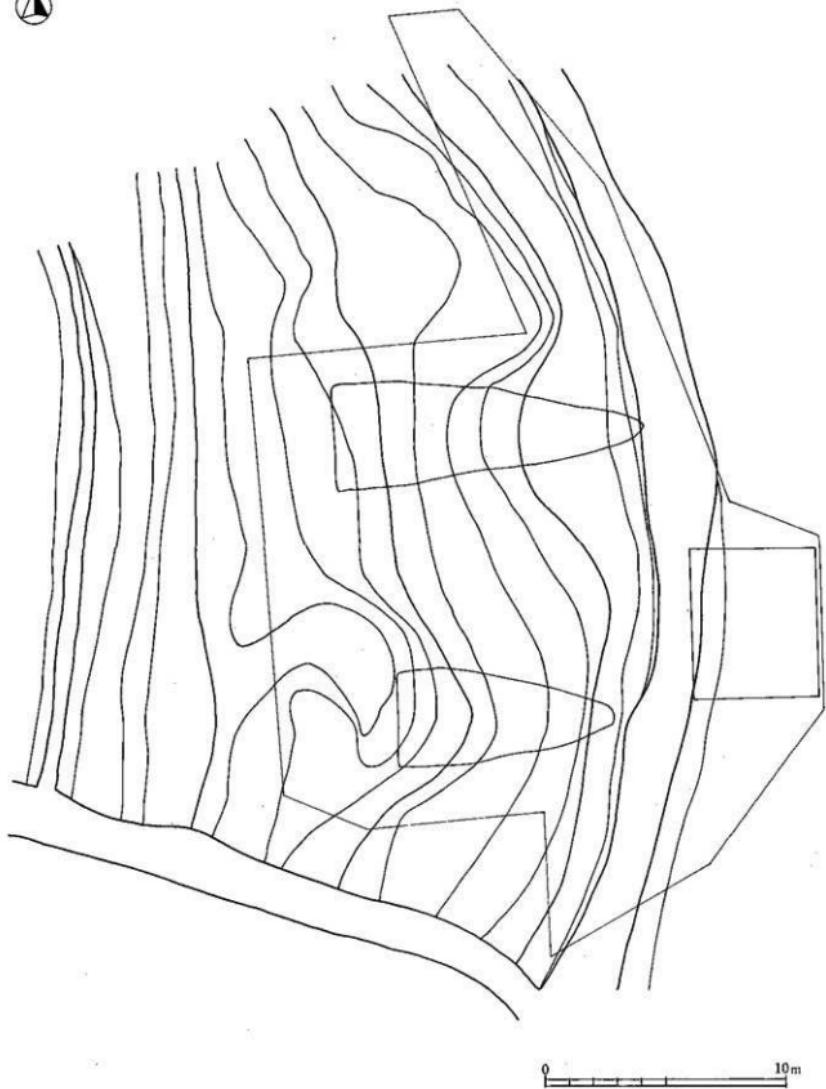
#### 1. 第1号窯跡(第5・6図)

本窯は、全長8.8m、最大幅4mを測る。形状は、上方に進むにつれ横幅が大きくなる連房式登窯で、焚口のある胴木間から上段には縦狭間で繋がる6段の焼成室がある。以下、焚口から順に窯体各部について記述する。

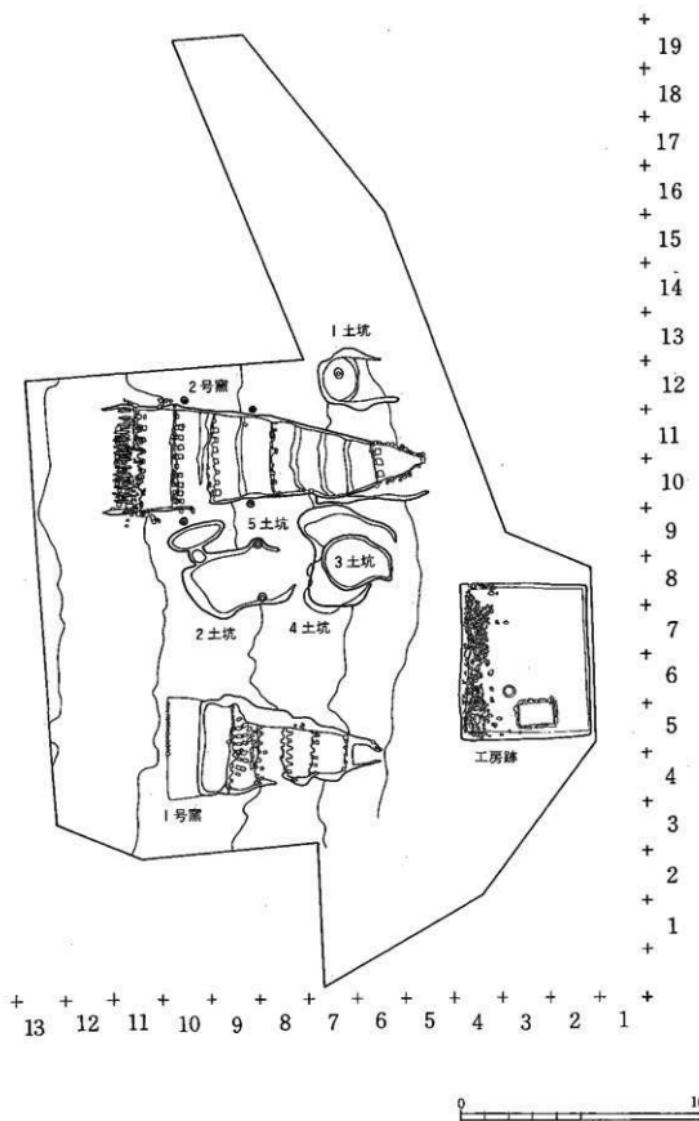
##### (1) 燃焼室(焚口・胴木間)

胴木間は、最大幅が0.9m、奥行が1.2mあり、床面は第1室に向かい緩やかに傾斜している。焚口は幅

Ⓐ



第3図 調査前地形図



第4図 和兵衛窯跡全体図

36cmあり、右側に箱グレが1個残存している。側壁は、厚さ25cmで、掘りグレを2～3段積み上げ粘土で堅く締め構築している。狭間穴は4個あり幅は15cm前後となっている。狭間柱は長さの異なる2本の円筒型クレをトチンで接合し積み上げて構築している。

(2) 第1室（捨間）

捨間は、最大幅1.7m、奥行1.02mの方形を呈している。床面は平坦で燃焼室との比高差は48cmを測る。側壁は右側のみに箱グレや棚板、匣鉢を積み上げ粘土を固めて構築している。側壁の幅は90cm、高さは60cmとしっかりした造りである。狭間穴は6個あり幅は15～18cmである。狭間奥は掘りグレを積み、狭間柱は箱グレが1段残っている。上部には輪ドチがあることから積み上げて構築していると考えられる。箱グレの長さは19～25cmの間でいくつかの大きさがある。

(3) 第2室（1の間）

第2室は、最大幅1.98m、奥行0.66mの方形を呈している。床面は平坦で第1室との比高差は36cmを測る。側壁は両側に箱グレや匣鉢を積み上げ粘土を固めて構築している。狭間穴は7個ある。狭間奥は掘りグレを積み、狭間柱は箱グレを積み上げることによって構築している。

(4) 第3室（2の間）

第3室は、最大幅2.1m、奥行0.78mの方形を呈している。床面は平坦で第2室との比高差は30cmを測る。側壁は右側に掘りグレや箱グレを積み上げ粘土を固めて構築している。左側の一部分は幅35cmほど開き出入口としている。狭間穴は7個確認できたが崩落が著しい。狭間柱は箱グレを積み上げて構築しているが、左半分にはその前部に箱グレが3個存在する。

(5) 第4室（3の間）

第4室は、右側の一部が欠損しているが最大幅は約2.8m、奥行0.9mの方形を呈する。床面は、倒壊した狭間柱を掘り上げていないため不明だが平坦であろう。床面の前部で第3室の狭間穴上部には箱グレが設置されている。第3室との比高差は約35cmを測る。側壁は崩壊しているため不明である。狭間穴は9個確認できたが10ないし11個あったと思われる。狭間柱は床面に倒壊しており、2段積み上げて構築している。接合には輪ドチと团子トチが使われている。

(6) 第5室（4の間）

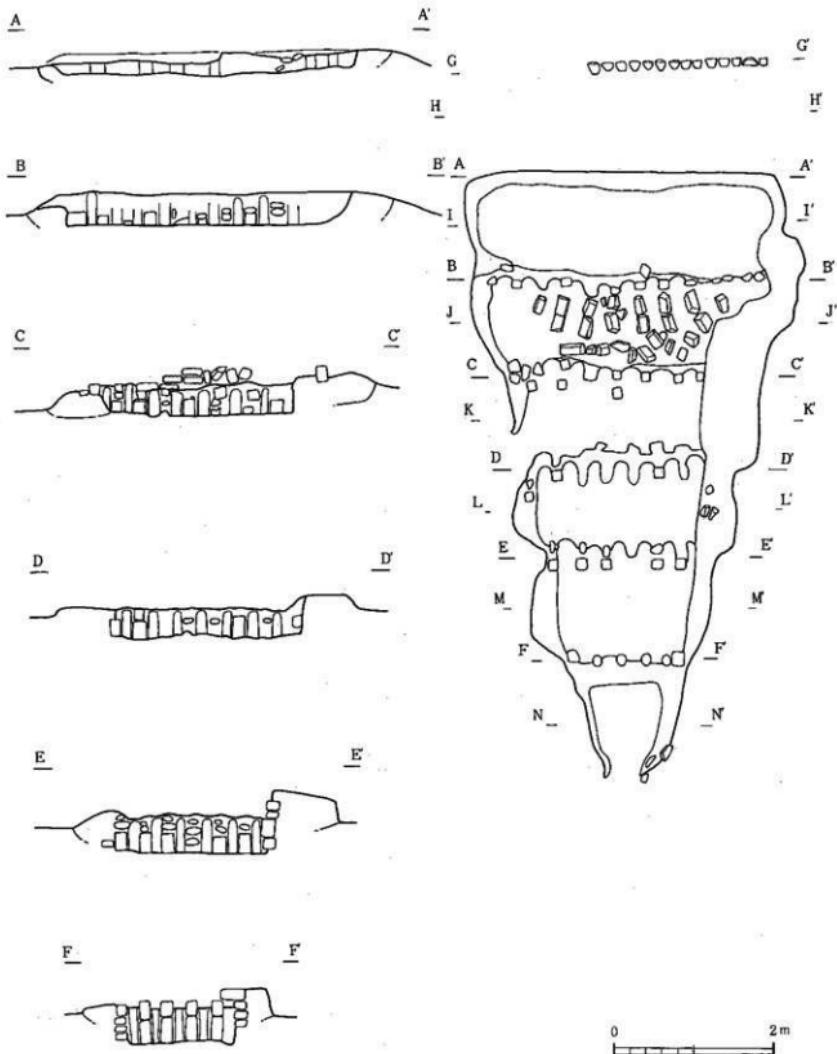
第5室は、最大幅3.6m、奥行1.02mの方形を呈するが、上面はほとんど削平されているため詳細は不明である。床面は平坦で、第4室との比高差は50cmを測る。側壁は粘土が残存している。狭間穴はかろうじて6個確認できるが12個前後あったと考えられる。

第4室の狭間穴から第5室の床面下にかけて土坑が発見されているが、後述することとする。

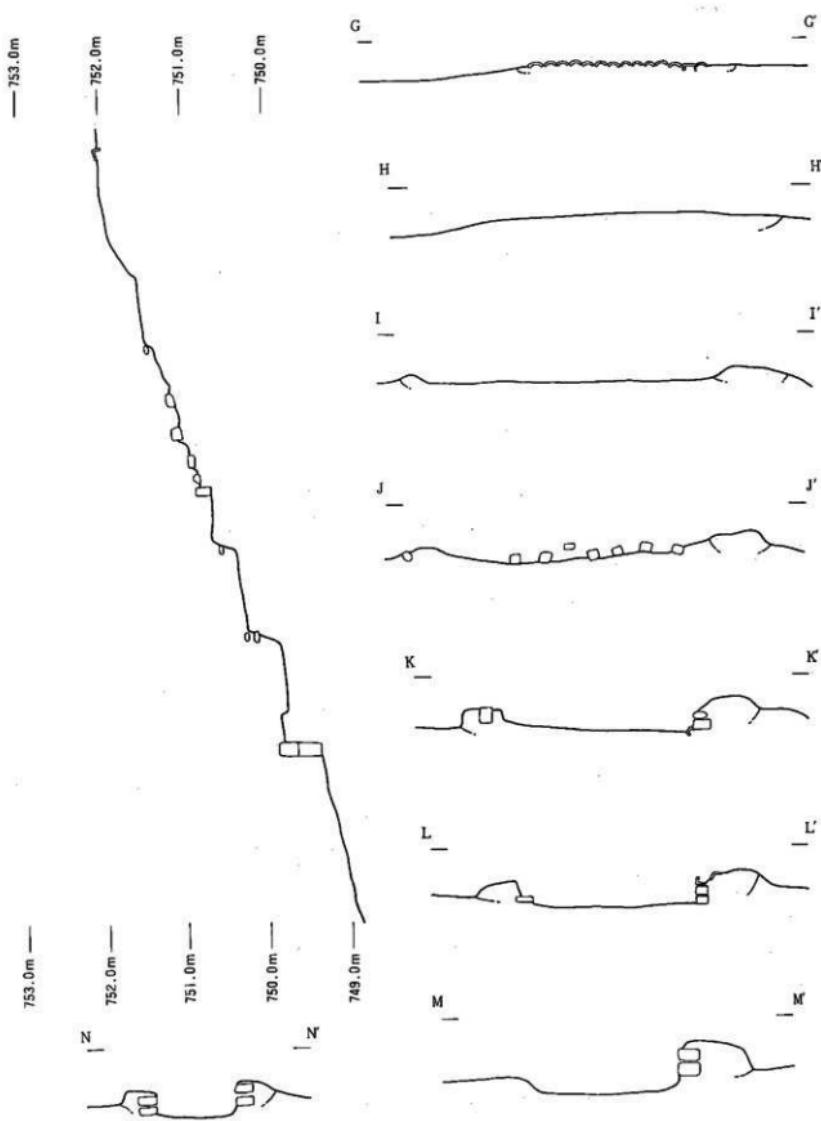
(7) 第6室（5の間）

第6室は、側壁が残存していないため範囲がはっきりしないが、被熱した床面の範囲から最大幅は4m弱、奥行1.2mである。床面は平坦で左側に向かいやや傾斜している。第5室との比高差は50cmを測る。

最上部には半蔵した14個の匣鉢が埋められ両脇は粘土で堅敏に固められている。



第5図 第1号窓跡実測図(i)



第6図 第1号窓跡実測図(2)

## 2. 第2号窯跡(第7・9図)

本窯は、1号窯から北へ7.8m離れた地点で検出された。1号窯同様に、等高線と直角に交わる方向で構築されている。全長13.2m、最大幅4.5mを測る連房式登窯で、焚口のある胴木間から上段に縦狭間で繋がる8段の焼成室と煙道部がある。1号窯跡と比べて幅はほぼ同じであるが、焼成室が2室多く全長で4.4m長い。以下、焚口から順に窯体各部について記述する。

### (1) 焼成室(焚口・胴木間)

胴木間は、最大幅1.4m、奥行1.8mを測る。床面は全面に粘土が敷かれ、第1室に向かいやや角度をもって傾斜している。焚口は幅25cmあり、底部に1枚の棚板を設置し、両脇には7枚の棚板を積み重ね粘土で固定している。側壁は、棚板や箱グレを1列で2～7個積み重ね、隙間に粘土を詰め込み構築している。狭間穴は4個あり幅は25cm前後となっている。狭間柱は2個の掘りグレを重ねた前面に箱グレを設置して構築している。

検出面において、胴木間の埋土上には30個ほどの掘りグレが散乱していた。

### (2) 第1室(捨間)

捨間は、最大幅2.1m、奥行0.95mの台形を呈している。床面は中央部で7cm前後の段差があり、焼成室との比高差は30cmを測る。側壁はわずかに粘土の痕跡がある程度で詳細は不明である。狭間穴、狭間柱は欠損しているため明らかでない。

左側の側壁部分からは「越中森」と刻印された棚板の破片が出土している。

### (3) 第2室(1の間)

第2室は、最大幅2.5m、奥行0.84mの台形を呈している。床面は平坦で第1室との比高差は33cmを測る。側壁、狭間穴は第1室同様欠損しているため不明である。

### (4) 第3室(2の間)

第3室は、最大幅2.4m、奥行0.9mを測る。床面は平坦で第2室との比高差は約33cmを測る。側壁は左側に掘りグレの破片がわずかに残存しているのみで不明。狭間穴は3個ほど痕跡が確認できたが6個は存在したと思われる。

### (5) 第4室(3の間)

第4室は、最大幅2.8m、奥行0.75mの方形を呈する。床面は平坦で第3室との比高差は33cmを測る。側壁は、狭間穴の脇でわずかに残存する部分で掘りグレや棚板を積み重ねている。狭間穴は7個あり、各幅は30cm前後で、他の焼成室の狭間穴よりやや広くなっている。狭間柱は掘りグレや棚板を積み上げて構築している。

### (6) 第5室(4の間)

第5室は、最大幅3.1m、奥行1.2mの方形を呈する。床面は平坦で第4室との比高差は33cmを測る。側壁は粘土がわずかに残るのみで不明である。狭間穴は5個ほど痕跡が確認できるが8個あったと推定される。狭間柱は残っていないが、右端に掘りグレが1個残存している。

#### (7) 第6室（5の間）

第6室は、最大幅3.5m、奥行0.72mの方形を呈する。床面は平坦で第5室との比高差は35cmを測る。側壁は粘土がわずかに残るのみである。狭間穴は9個あり、各幅は20~25cmである。狭間奥は握りグレなどを積み上げ構築している。狭間柱は残存しているものを見ると、箱グレの上に棚板を積み重ねている。

#### (8) 第7室（6の間）

第7室は、最大幅4m、奥行1.02mの方形を呈する。床面は平坦であるが、前部の1/3程が第6室に向かって崩れ落ちている。第6室との比高差は51cmを測る。側壁は棚板や握りグレを積み上げ粘土で固めて構築している。狭間穴は11個存在する。狭間奥は棚板、箱グレ、匣鉢の破片などを積み上げ、隙間には粘土を詰め込み構築している。狭間柱は箱グレを床面に埋め込み、その上に棚板を積み重ねて構築している。第7室の狭間柱の構築は、残存する他の燃焼室のものに比べて整然としている。

左側の側壁は、下方の一部が途切れている。

#### (9) 第8室（7の間）

第8室は、最大幅4.1m、奥行1.1mの方形を呈する。床面は平坦で、第7室との比高差は41cmを測る。側壁は握りグレ、箱グレ、棚板、匣鉢の破片などを乱雑に積み上げ、粘土で固めて構築している。狭間穴は10個ある。狭間奥は、握りグレ、箱グレ、棚板、匣鉢の破片などを乱雑に積み上げ、粘土で固定している。狭間柱も同様の構築である。

#### (10) 煙道部（コクド）

煙道部は、最大幅4.1m、奥行0.75mを割り、両側の粘土を固めた部分は更に上方に伸びている。第8室との比高差は70cmを測る。棚板、握りグレ、匣鉢の破片などを乱雑に積み上げ、煙道の仕切りとしている。

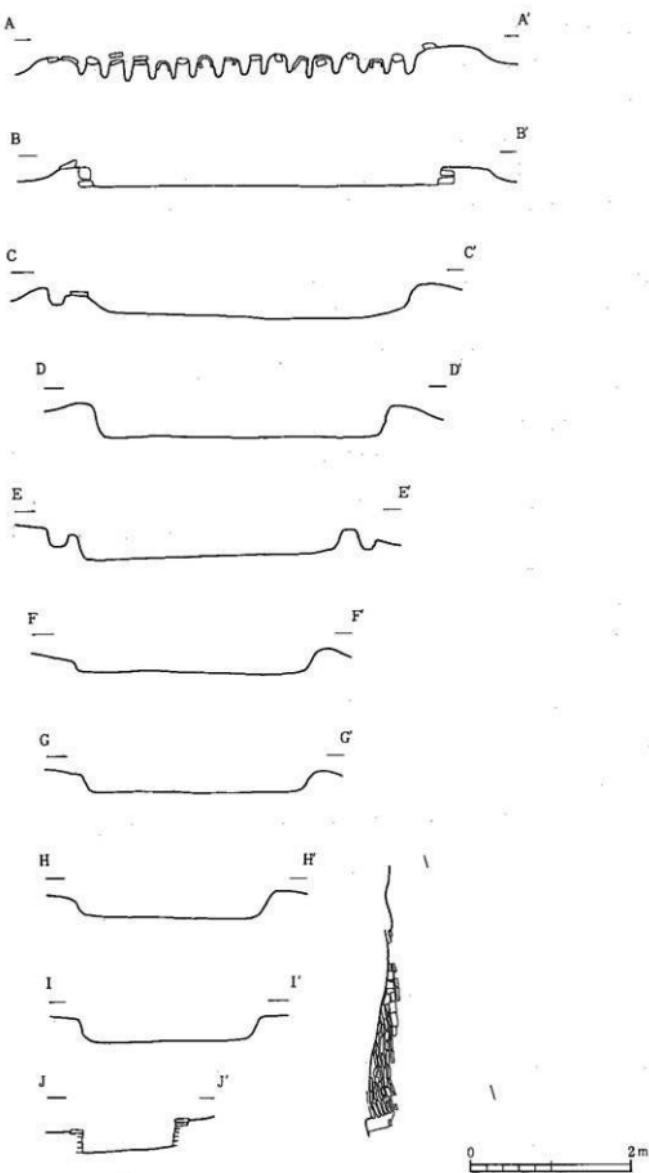
#### (11) 窯脇

窯体下部の胴木間から第3室にかけての左側は、地山をやや掘り込んでいる。また、第5室の側壁両側には、径20cm、深さ25cm前後のピットがあり、上屋に関するものであろうか。窯体脇のピットは、第7室でも検出された。

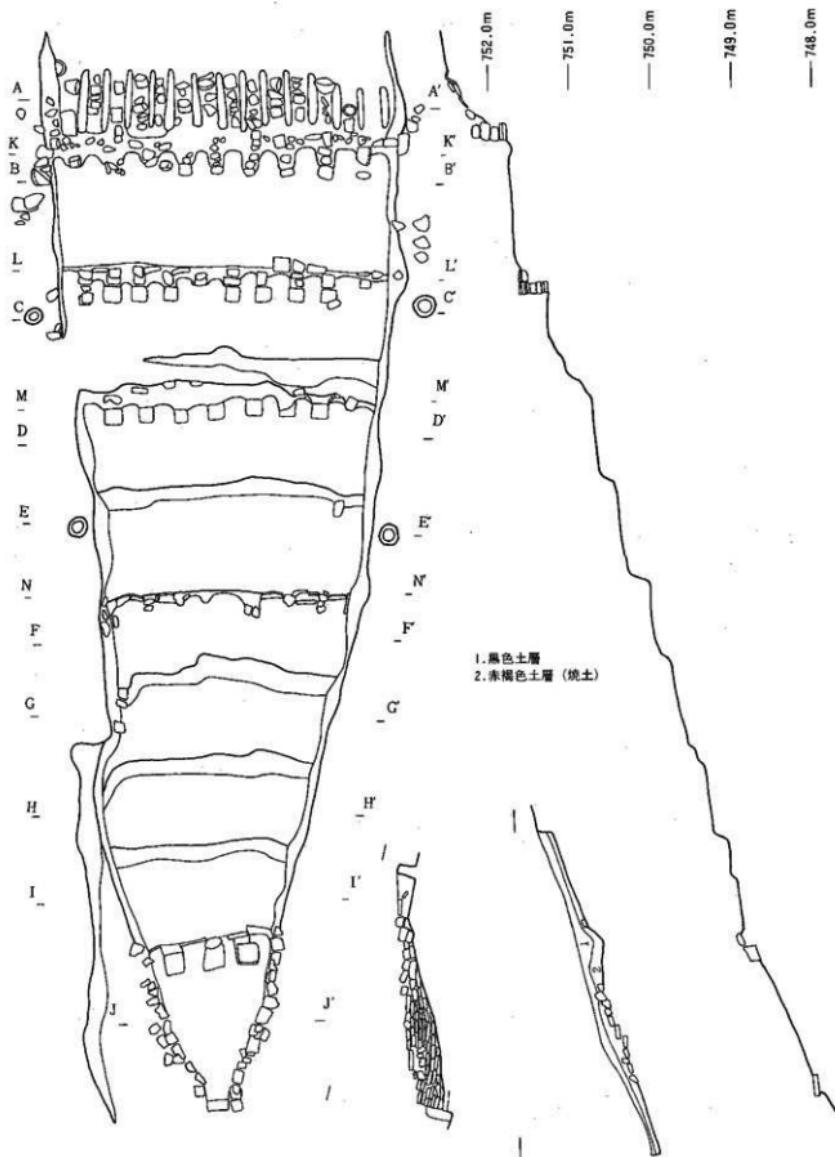
### 3. 工房跡(第10図)

第1号窯跡の下方、東へ3.2m離れた地点で検出された。平面形は南北6.4m、東西は5.3mを測る長方形である。斜面の山寄りの部分を掘り下げ、平坦な床面を作り、3方向の法面には土留めのための礫を積み上げている。床面に近い部分では長さ30cm前後のやや大きめの礫が使われ、上部は10~20cmのものが使用されている。中ほどは崩れ落ちて礫が床面に散乱していた。礫の間には粘土が詰め込まれ、しっかりと固定されていた。写真・実測終了後には礫をはずして掘り方を観察すると、平坦な面が見てとれた。

床面はローム層を平坦に固めているが部分的に堅緻な面が存在する。南側の床面下からは礫で囲った長径1.5m、短径0.9m、深さ0.8mの遺構が検出された。10~20cmの礫を積み上げ、隙間には粘土を充



第7図 第2号窓跡実測図(1)



第8図 第2号窓跡実測図(2)

埴している。掘り下げるに埋土からは多量の陶器類、窯道具が検出された。また、床面近くからは粘土塊が検出されたことで粘土の貯蔵施設であったことが明らかとなった。粘土だめの北西では直径50cm、深さ25cmのピットが検出された。

遺物は、粘土だめとともに石積みの壁際から多くの陶器類、窯道具が出土している。北側の壁下からは、粘土塊も出土している。また、石積みの中ほどからは、未焼成の三角ピンがまとめて出土した。石と石との間に置かれていた三角ピンは、当時のままの状態で発見されたと考えられる。

#### 4. 土 坑

##### (1) 第1号土坑（第11図）

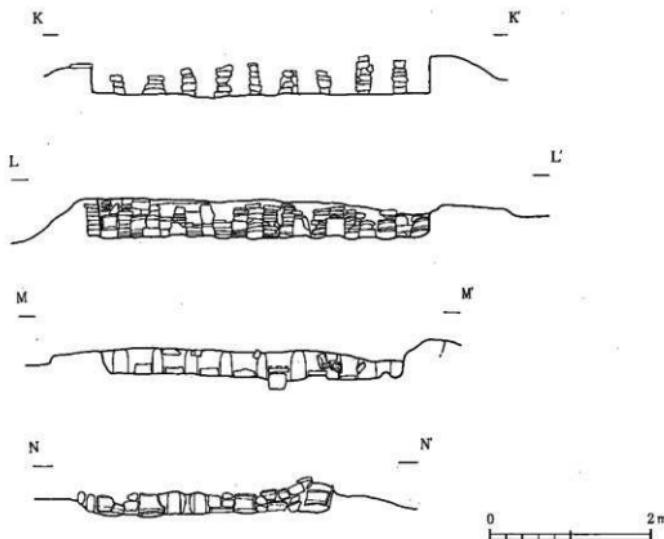
平成4年調査。第2号窯から北へ1.2mの地点で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径は2.3mを測る。斜面を掘り下げているため下方の壁高は8cmに過ぎないが、上方では1mの掘り込みを有する。土坑の前面も掘り下げられ平坦な面を作り出している。

床面や北寄りには径40cm、深さ40cmのピットが設けられている。その南側からは、掘りグレ、棚板などが10数点検出された。

本土坑の床面上30cmの埋土からは捏鉢などの素焼きの破片（194～203）が集積した状態で検出された。

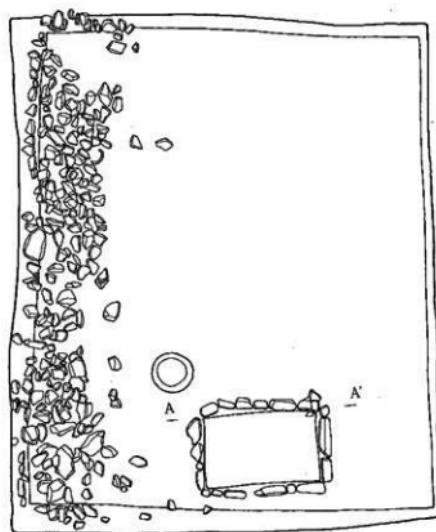
##### (2) 第2号土坑（第12図）

2号窯跡の南側1.7mの地点で検出された。東西4.6m、南北2.7mを測る。斜面を掘り下げて平坦な床



第9図 第2号窯跡実測図(3)

Ⓐ



0 2m

第10図 工房跡実測図

面を作っているため、山側の深さは1.15mあるが、谷側には掘り込みはない。中央やや下方の壁下には対になるピットがあり床面からの深さは13cmを有する。右上方には、はっきりした掘り込みではないが小形の土坑が接して存在する。床面中央からは粘土塊が検出された。

(3) 第3号土坑(第12図)

2号土坑の下方から検出され、長径2.8m、短径2.3mの橢円形を呈する。深さは4号土坑の床面下で57cm、谷側で21cmを測る。埋土からは多量の陶磁器類、窯道具が出土し、特に磁器は他の遺構からの出土が少なかったため際立っていた。

(4) 第4号土坑(第12図)

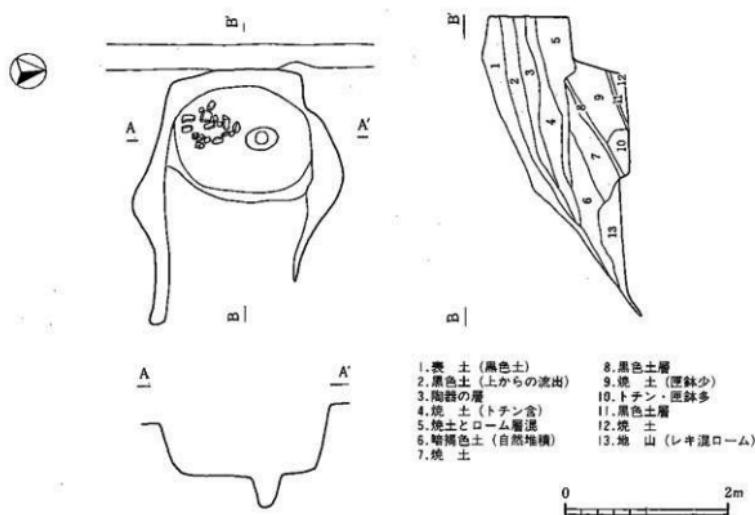
3号土坑の上方に重複して検出された。径3.6mほどの円形を呈していたと考えられる。深さは山側で1.19mを測り、壁は湾曲した掘り込みとなっている。

(5) 第5号土坑(第12図)

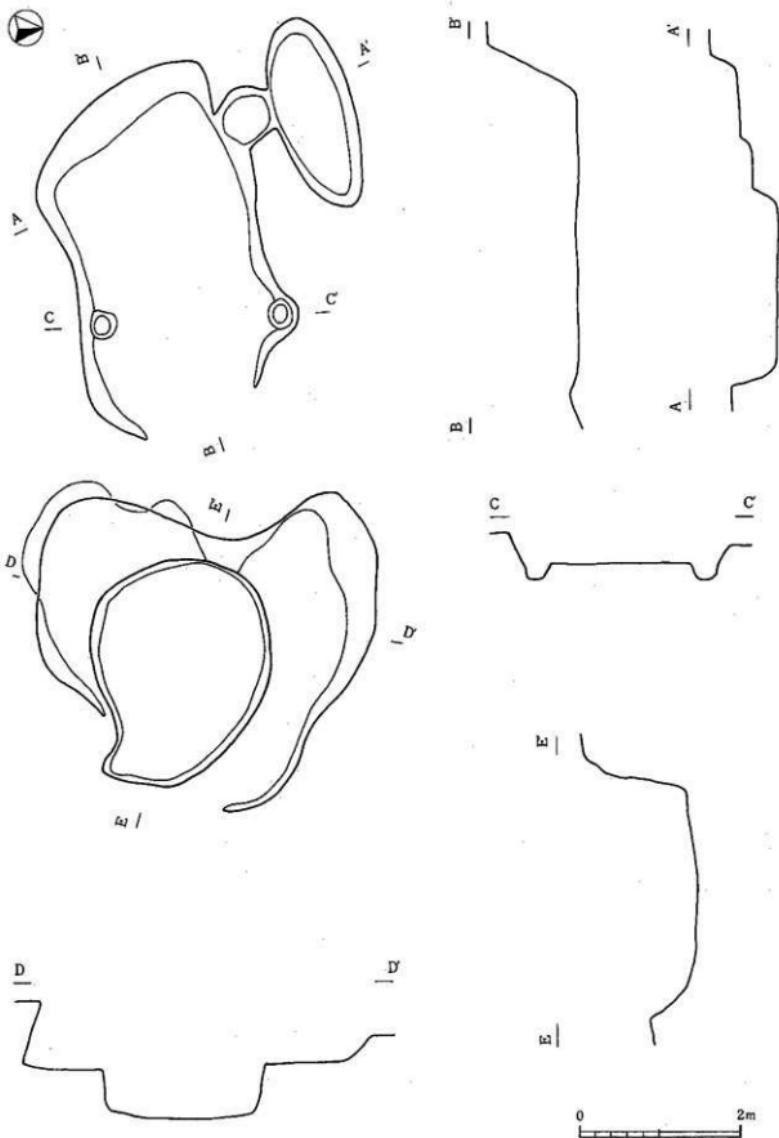
3号土坑の北側に重複して検出された。長径3m前後の規模になると思われる。深さは山側で75cmを測り床面は平坦である。

(6) 第6号土坑

第1号窯跡の4室から5室にかけて存在するが、窯体保存のために散えて掘り下げなかったため規模・形状等は明らかでない。5室の床面を精査している時に右側がやや凹凸していたため若干掘り下げたところ、被熱した床面下から軟弱な黒色土が現れた。断面を観察すると、黒色土の上面は平坦でその

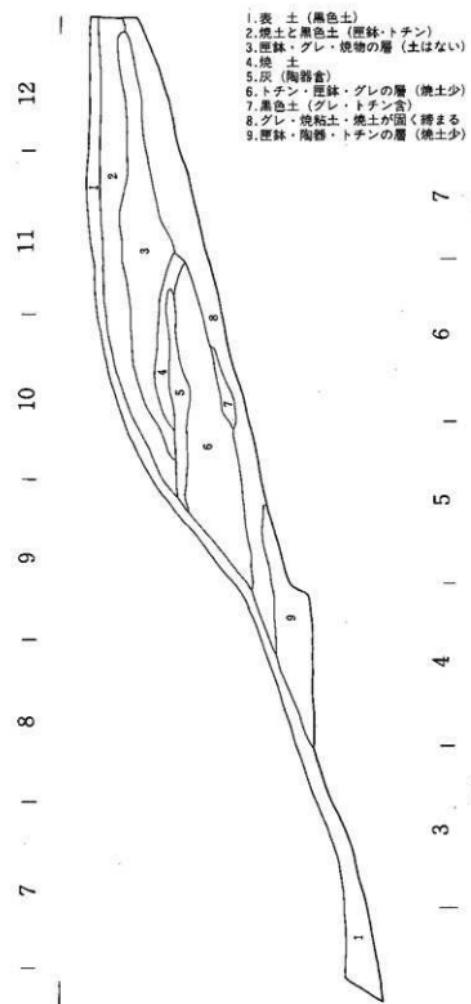


第11図 第1号土坑実測図

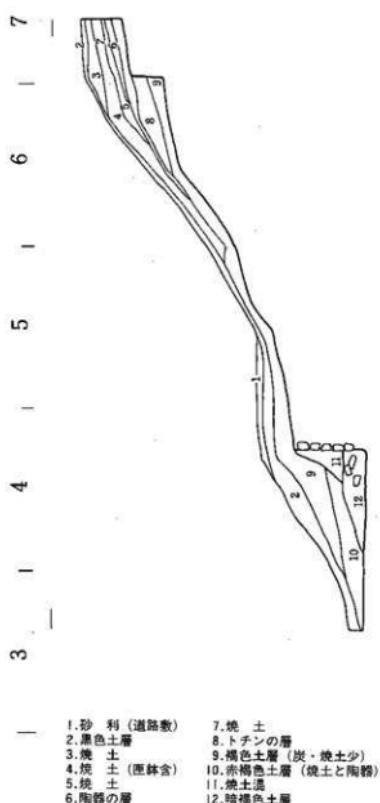


第12図 第2・3・4・5号土坑実測図

5ライン



8ライン



第13図 灰原セクション図

上に5室の床面、灰原の陶器類が堆積しているのが見てとれた。

黒色土からは陶器類、窯道具などが出土している。

## 5. 灰 原

1号窯から2号窯にかけては多量の遺物が堆積した灰原が形成されていた。特に、1号窯の上部では最大厚1.3mもの堆積があった。5ラインの堆積では表土以下、匣鉢、トチンなどの窯道具とグレ、棚板などの築窯材が入り交じっており、陶器類は少ない。8ラインでは、匣鉢、陶器、トチンの各層が焼土と交互に堆積している様子が見てとれた。

各グリッドの出土状況を見ると、1号窯の南側では、素焼きの破片のみの層が確認できた。また、南側では匣鉢、陶器類がまとまって出土している。

## 第4節 遺 物

発掘調査によって、和兵衛窯の窯体・工房・土坑・灰原から出土した遺物は陶器・磁器・窯道具を主として40万点の多さに達している。発掘調査後の短期間の整理ではこの出土遺物の全てについて分類し、観察することはとうてい不可能である。陶器・磁器は、図化にあたって全出土器種を網羅するようにつとめたが、記述にあたってはその概要のみとならざるをえなかつた。以下、遺構ごとに記述を進める。

### 1. 第1号窯跡

1号窯からの遺物の出土はほとんど無く、図化できる遺物は無い。僅かに5房の上端に匣鉢が半裁されて14個埋設されていたが、遺構保存のために敢えて取り上げず、現状保存のままにしてある。

### 2. 第2号窯跡(第14・15図)

遺構の規模は大きかったが、遺構内での遺物の遺存は極めて少量であった。僅かに壺・鉢・棚板などが出土地だけである。

#### (1) 壺類 (1)

今回の発掘中、大型の壺は本例が唯一の出土例である。破片は2号窯跡の焚口と3号土坑上面の4号土坑の範囲から出土しており、2号窯からは主として胴上半部が、3号土坑上面からは胴下半部が出土している。器高42.5cm、口径21.3cm、高台径11.6cmで、体部は直線的に立ち上がり、肩が張り、口辺が内屈するズンドウの壺である。体部には7段の積み上げ痕が認められる。口唇部上面には整形時の指圧痕が顕著である。器形は全体的に歪みが著しい。内外面に灰釉を、口縁外面に長石釉を流し掛けている2号窯内と3号土坑上面から出土した破片の接合によって、2号窯と3号坑上面(4号土坑の範囲)の時間的平行関係が確認できる。

## (2) 鉢類 (2)

捏鉢が一点出土している。底部を欠くが、口径28cm・推定器高15cm前後で、体部は丸味を帯び、口縁部は丸く肥厚させている。体部外面下半はヘラ削りされ、外面および口縁内面に灰釉が施されている。

## (3) 棚板 (3)

胴木間から出土し、「越中森」の線刻文字がみられる。

### 3. 工房跡(第15~20図)

陶器・磁器・土器・窯道具が出土している。床面全体に遺物は散乱していたが、とりわけ南側床下に設けられていた粘土だめからは多くの完形品が得られた。

#### 1 陶器

碗・皿・鉢・瓶・蓋がある。

##### (1) 碗類 (4・5)

口径11cm・器高6cm前後のものと口径6cm・器高5cm前後のものとがある。前者には丸碗(4)、端反碗(5・7)とがある。丸碗は下部が丸味を帯び、口縁は緩く内弯し、灰釉が施されている。端反碗(5)は口辺部がわずかに外反し、丸碗と同様の灰釉を施し制作技法的には類似する。7は、口辺で強く外反し、体部上半にロクロ成形痕を顯著に残し、灰釉と鉄釉を掛け分ける。口径6cm前後の(9~11)は、型押し2つ合わせによって制作されている。9は、拳骨茶碗風にくぼませ、一部には貝を押しつけている。「寿」?のヘラ書きがある。10は、全面に指圧成形痕を残し、高台を除き灰釉を施す。11は、1次焼成後に釉薬を施したのみで、2度焼されていない。

##### (2) 皿類 (12~45)

多出した灯明皿以外には12の皿がある程度で数は少ない。

###### 1) 皿 (12)

蛇目高台に張らみのある胴部、口縁端部は玉縁状に肥厚する。全面に鉄釉を施すが、高台内の釉薬は拭い取られている。

###### 2) 灯明皿 (13~45)

油皿(13~24)と受皿(25~44)があり、45は両用の形状を呈する。

油皿は、いずれも器高2cm、口径10cm前後で、上げ底状を呈する。体部はやや丸味を帯びるが、13~15は口縁部が内弯気味に立ち上がる。13は、底部には回転糸切り痕を残し、体部はロクロ成形のままで、無釉である。14~24は、底部をヘラ削りし、体部下半をヘラ削り調整している。いずれも鉄釉を施している。

受皿は、いずれも器高2cm、口径9~10cm前後で、上げ底状を呈する。棟が口縁より高いもの(25~30)、水平のもの(31)、低いもの(32~44)の別があり、棟への切り込みもV字状に鋭角のもの(25・26・29・33・42)、U字状のもの(27・28・30~32・34~37・40・41)、幅広で浅いもの(38・41・43)、緩い円弧状のもの(39)、切り込みのないもの(44)などがある。体部の下半から

底部にかけてヘラ削り調整されるが、底部に回転糸切り痕を残す（30・31）は、体部もロクロ成形のままである。内部を中心に錫釉・鉄釉を施している。

25は、高台を有し、口縁の2ヶ所にV字状の切り込みを入れたもので、灯明皿にしてよいか疑問も残る。

### （3）鉢類

小鉢・香炉・擂鉢がある。

#### 1) 小鉢（46）

削り出し高台脇から脛らみをもった腰部、胴部でいったんしづり、口縁部は大きく外反し端部は小さく内弯する。口唇部はヒダ皿状のヒダがあり、全面に鉄釉を更に口縁部に灰釉を施している。

#### 2) 香炉（47）

無台で、胴部がはり、頸部でくびれる。口縁は肥厚し、端部がやや張り出す。内面無釉で、外面に鉄釉が施され、灰釉が口縁に流し掛けられる。

#### 3) 擂鉢（87）

5個体の擂鉢が熔着したもので、擂鉢の間には団子トチが挿入されている。擂鉢は、体部は直線的で、口縁端部はやや膨らむ。体部から底部にかけてヘラ削りされ、口縁内部に稜を持つ。擂目は、底部内面は同心円状に、体部内面には左回りに櫛目が底部から体部内面の稜付近まで一気に施されている。櫛目は、幅2.9cm、14本の櫛状工具によっている。全面に錫釉が施されている。

### （4）瓶類

徳利・仏花瓶・土瓶がある。

#### 1) 徳利（48）

口縁部の破片で、口唇部は2段に肥厚している。2度焼き前で、素焼きのままである。

#### 2) 仏花瓶（49・50）

器高9cm・口径11.8cmの中型のもの（49）と、器高12.8cm・口径10cmの大型のもの（50）とがある。49は、口頸部から口縁にかけて大きくラッパ状に開き、端部は上方に立ち上がり、縁帶がつくなされている。腰部は大きく張り出し、底部は回転糸切り痕が残されている。頸部と胴部の接する部分に「十」の刻みを入れたボタン状の双耳が貼付されている。錫釉が施されている。50は、器形にやや歪みがある。筒状の胴部から頸部にかけてラッパ状に大きく開き、端部は上方に立ち上がり縁帶となっている。胴部から腰部は張り出し、台脚部は大きな裾張り形となっている。頸部には渦巻状の耳が相対して貼付されている。底部はヘラ削り調整されている。2次焼成前の素焼きのままでのものである。

#### 3) 土瓶（54）

球形の胴部下半に稜をもち、後から直線的に底部にいたる。胴上半部はロクロ成形を、下半部はヘラ削り調整されている。肩部に4～5段のトビカンナがかけられ、装飾効果を高めている。耳の一方は失われているが、富士山形を呈する。注口は胴部中程から急角度に付けられている。口縁は歪みが

著しい。底部は上げ底風である。全面に鉄軸が施されている。

#### (5) 鍋類

##### 1) 行平 (52・53)

器高9cm前後、口径17cm前後の鉢に把手と注口が付く。52は、胴部中央を最大径とし、口縁にかけてやや内弯気味に立ち上がる。胴部以下をていねいにヘラ削り調整する。胴部上半部は、トビカンナにより4重に装飾し、この部分に赤茶色の鉄軸を施している。注口は粘土板を曲げて片口状に付けられている。把手の先端は失われているが、体部に対して50°に付けられている。53は、胴部中央に最大径があり、これから口縁にかけて直に立ち上がる。胴部上半部にはトビカンナによる11重の装飾が密に施され、胴部下半部はヘラ削り調整されている。胴部上半部と内部には鉄軸が施されている。注口と把手は欠損している。

#### (6) 蓋類

蓋類の出土は多量である。つまみ・笠・かえりの形状から次の6種に大別できる。

##### 1) I類 ブリッジ状のつまみをもち、かえりのないもの (59・60)

口径15cm前後の比較的大きな蓋で、包みを縛ったような表現のブリッジ状のつまみをもつ。59は、梅文が描かれている。60は、笹文が描かれる。

##### 2) II類 環状のつまみをもつもの (61・62)

かえりのないもの (61) と、かえりのあるもの (62) がある。61は、大きめのつまみを付け、天井部に「舍」の墨書がある。62は、小さなつまみで、かえりを持ち、III類に類似する。

##### 3) III類 つまみ・笠・かえりのあるもの (63~76)

つまみの偏平なもの (63・69)、つまみが球形ないし尖頭状をなすもの (67・68・70~74)、両者の中間形のもの (64~66) がある。つまみには63・65・67~69・73など花弁状の刻みが施されるものが目立つ。笠の部分は、ほぼ水平なものが多いが、63・66・69などは円弧状をなしている。かえりは直立し、短いものが多い。軸薬は、笠部の上面に施される。63~67は、灰軸や銷軸の上に長石軸・呉須などを流し掛け、装飾効果を高めている。68は長石軸で笹文を、69は梅文を描いている。70・71は、笠上面にカキ目を残している。

75・76もこの部類に属するが、つまみは球形で、笠部が深く、かえりも大きい。蓋類の蓋になるのであろう。

##### 4) IV類 かえりがなく、笠の周縁が外にでるもの (77~81)

偏平ないし算盤玉状のつまみが付き、笠の肩に稜を有する。かえりはなく、笠の端部が外にでる。笠に貫通孔が1孔みられる。単一の軸薬が笠上面に施されることが多い。77・78は、長石軸で梅の花を、鉄軸で幹・枝を描いている。急須類の蓋と考えられる。

##### 5) V類 つまみがあり、かえりのないもの (86)

小さな粘土塊のつまみが付き、笠は円弧状になる。

##### 6) VI類 笠部が外反するもの (82~85)

口径6cm前後の小型のもの（82・83）と、口径10cm前後の大型のもの（84）とがあり、落とし蓋の形態のものである。82・83とも底面に回転糸切り痕を残し、笠は外反しながら外方に延びている。83は、捻った粘土塊をつまみとし、笠上面に梅花を描き、貫通孔を1孔有する。84は、底面をヘラ削り調整し、笠部の端部を屈折させている。つまみは花弁状の粘土塊を付けている。笠上面に鉄軸を施している。

85は、笠部の底面を丁寧にナデ調整し、つまみは12弁の花弁の形態をなす。笠部上面には鉄軸を施している。胎土は、白色緻密で他の蓋とは異なっている。

#### （7）その他

上記の分類に属さないもので、51がある。半球形状で、底部に多くの貫通孔を有する。内部上半に鉄軸が施されている。用途がはっきりしないが、茶漉しなどの用途が考えられようか。

### 2 磁 器

皿・碗が出土している。皿は小破片のため図化できない。

碗（6）は、小型でやや腰が張る形態で、鉄軸が内外面に施されている。3号土坑出土の119の碗に類似する。8は、いわゆる広東茶碗で、外面は鉄軸、内面は透明軸が施されている。

### 3 土 器

七厘およびその部品であるサナがある。

#### （1）七厘（58）

器高16.4cmの鉢の胴部に円形の窓を開け、中央にU字状の窓を開けたラッパ形の筒を取りつけている。筒の上部には通風を良くするための孔が6ヶ所開けられている。この筒は五徳の役目をするものである。底部は、削り出し高台状で、3ヶ所に円弧状の抉りが入れられている。

#### （2）サナ（56・57）

円形を呈する土板に孔を穿ったものである。56は、径8.4cmで、6孔が穿たれているが、57は直径もかなり大きなサナで、孔も多く穿たれているものと思われる。

### 4 窯 道 具

エンゴロ・足付きドチ・輪ドチ・ツク・型・乳棒・エブタがある。

#### （1）エンゴロ（88・89）

口径17cm、高さ14~15cm前後で、いずれも糸切り痕未調整の平底である。体部内外面にロクロ目が顯著に残る。口縁から体部下半まで切り込みを入れ窓を開けている。

#### （2）足付きドチ（90・91）

口径が狭い筒状の下端に円錐ビンを数個貼り付けたものである。大小の別があり、90は器高8.6cm、91は器高4.2cmで、口径にも差がみられる。円錐ビンは5個付けられている。ロクロ成形され、作りは丁寧である。

#### （3）輪ドチ（92）

粘土紐を環状につないだもので、製品の種類に対応して大小がある。

(4) ツク (93)

上部一辺3.8cm、下部一辺10.7cm、高さ8.9cmでロート形の正方形の筒で、角は面を取り、丁寧に作られている。

(5) 型 (95~99)

型押し整形のための型で、碗・鉢・把手の制作のための型がある。95は、碗の型で、菊花の彫刻がある。碗は器高6.3cmのものである。96は、鉢の型で、全面に小さな円の彫り込みがある。型押し整形された鉢は口径13cm前後のものとなる。97~99は、行平の把手の型である。97・98は同一の把手の型で、桐の花と蔓草・桜?の彫刻がある。99は、菖蒲の彫刻のある把手の型である。

(6) 乳棒 (100)

釉薬等の粉化のために乳鉢とともに使用したもの。フラスコ状で、鉄軸が施されている。

(7) エブタ (102)

一辺11cm前後の隅丸方形を呈し、厚さは1.9cmである。

(8) その他

94は、エンゴロの一種か、101は棒状を呈するものである。

#### 4. 土 坑

(1) 1号土坑

1号土坑の覆土および上面から捏鉢の破片が大量に出土している。194~203がその捏鉢であるが、出土状態を見ると、1号土坑の床面からの出土ではなく、一括出土した部分と床面との間にはかなりの埋土の堆積があることから、これらの捏鉢は1号土坑に所属するものというより1号土坑の上面に一括投棄されたものとした方がよいものと思われる。ここでは一応灰原出土として後述する。

(2) 3号土坑 (第21~23図)

1号窯と2号窯との間から発見された3号土坑からは多くの陶器・磁器が出土した。とりわけ磁器の出土は他の遺構からの出土が少なかったことから3号土坑の際立った特徴を示している。

#### 1 陶 器

碗・鉢・徳利・仏花瓶・土瓶・蓋・花生がある。

(1) 碗類 (103)

口径13.1cm、器高8.7cmの丸碗である。体部下半が丸味を帯び、口縁は緩く内寄する。体部にロクロ調整痕を残す。素焼きの後、灰軸を施すが2度焼きはされていない。

(2) 鉢類 (122・123)

口径14~16cm、器高8cm前後で、口縁部の形態から2種類がある。122は、高台脇から膨らみをもたせつつ立ち上がり、口頸部から直線的に外折する。123は、膨らみのある胴部に、内寄気味の口縁部が付く。122は素焼きのままのもの、123は鉄軸を施している。

(3) 瓶類

徳利と仏花瓶が出土している。

1) 徳利 (105)

胸部の下端は面取りされ、胴部はほぼ直立し、頸部にかけて緩やかにすぼまる。口縁端部は折り返され玉縁状になる。底部は上げ底状となる。胴部にはロクロ成形痕が顕著に残り、底部および胴部下端を除き上野釉が施されている。

2) 仏花瓶 (106)

口径10.7cm、器高15.2cmの大型の仏花瓶である。口頸部から口縁にかけて大きくラッパ状に広がり、端部には縁帶がつくられている。胴上半部は筒状を呈し、下半の腰部は大きく張り出し、裾張り形となって底部にいたり、下端は面取りされている。胴上半部には渦巻状の耳が対して貼り付けられている。底部は上げ底状で丁寧にヘラ削り調整がなされている。底部および体部下端の面取り部分を除き鉄釉が施されている。

3) 土瓶 (104)

器高8cm、口径6cmの小形の土瓶である。球形の胴部下半に稜をもち、稜以下をヘラ削り調整している。底部は上げ底状である。稜の下から底部を除き鉄釉が施されている。

4) 蓋類 (107)

蓋Ⅲ類に属し、つまみ・笠・かえりがある。つまみは花弁状の刻みが施された偏平なもので、笠上面には灰釉が施されている。

5) 花生 (108・109)

口径14cm前後で、筒形と壺形の頸部のものがある。108は、張った胴部から口縁にかけて次第につぼまり、口縁端部は小さく外屈する。ロクロ成形痕を残す。素焼きのままで、釉は施されていない。109は、器高17.1cmで張り出した胴下半部から筒状の頸部に立ち上がり、口縁端部は小さく外屈する。胴下半の張り出し部には指圧による拳骨形のへこみが付けられている。素焼きのみで釉薬は施されていない。

## 2 磁 器

碗・皿・徳利・小瓶・髪油壺・水滴・蓋がある。磁器には軟質であるものが多く、焼き損じの可能性が強い。

(1) 碗

1) I類 (110・111)

端反りの形態を呈する。口径10cm、器高5cm前後のものである。磁器の碗類では大型に属する。110は、反りが顯著でなく、内面底部中央に五弁花、体部に花文の呉須絵がある。111は、反りが目立つ。内面底部中央に宝珠文風の文様、口縁内面に2~3本組の放射状の線文が、また、体部には松竹梅文を呉須で描いている。

2) II類 (113~115)

丸碗の形態を呈する。口径6~8cm、器高5cm前後で、113・114は、体部下半が丸味を帯び、口

縁は緩く内穹気味に立ち上がる。115は、丸文のある体部下半から口縁にかけて垂直に立ち上がる。113は、体部に菊花の、114は花文の呉須絵が描かれている。なお、114は底部が円形に穿孔されているので色見として使用されたものと考えられる。115は、腰張状で、体部外面には鉄輪を、内部は灰釉を掛け分けしている。

112は、体部上半を失っているのではっきりしないが、本類に属するものと考えられる。体部に花唐草の呉須絵を描き、内面底部中央に「寿」？が呉須で書かれている。

### 3) III類 (116~119)

筒丸の形態を呈する。口径6~7cm、器高5.5cm前後で、高台脇から脛らみをもちらがら口縁まで簡状に直立する。116~118は呉須絵が描かれている。117は菖蒲、118は唐草状の文様と帶線からなっている。

### 4) IV類 (120)

口径7.8cm、器高5cmの小壺状を呈する。ロクロ調整痕を顕著に残す。

#### (2) 皿類

121の1点である。口径13.8cmで、焼成が悪い。内面に雁と植物らしき呉須絵が描かれている。

#### (3) 瓶類

徳利・小瓶・油壺・水滴がある。

##### 1) 徳利 (124~129)

徳利は3号土坑から出土した磁器の大半を占める。細片が多く復元できるものは少ない。図に示したものは、いずれも口縁部を失しておらず全形を知りうるものはないが、胴部下半はほぼ直立し、上方にかけて緩やかにすぼまる。底部は124・127・128などやや上げ底状を呈するものが一般的であるが、126のように削り出し高台状のものも僅かではあるが存在する。底部径は6cm前後である。胴部上半部にロクロ調整痕を、下半部にヘラ削り調整痕を残す。124は、丸文を配し、その間には柳の文様を描いている。丸文は、帆掛け船と植物（松？）、岩と植物の2つの丸文の組合せ、帆掛け船と岩？、よろけ横縞文の2つの丸文がそれぞれ呉須で描かれている。125と126は植物の呉須絵が大きく配されている。127は、網目文の変形したもの、128は文様構成がはっきりしない呉須絵である。

129は、素焼きのままである。文様は、125・126に類似し、松竹梅等の植物と思われる。

##### 2) 小瓶 (130~132)

全形を知りうるものがないが、底径5cm、推定器高10cm前後の小形の瓶である。130~132の3点とも張り出した胴部から急につぼまつた頭部となる、いわゆる辯蓋型を呈する。130・132は胴下半に最大径があり、131は胴中央に最大径がある。ともに植物の呉須絵が描かれている。

##### 3) 髪油壺 (133)

髪にぬる油をいれるために用いたもの。口縁部が失われてしまっているが、短い頸が付くものと思われる。低い器高に大きく張り出した胴部で、偏平な形状を呈する。肩の部分に呉須絵が認められる。

軟質で磁器の焼き損じである。

#### 4) 水滴 (134~138)

硯の水入れとして用いたもの。全形を残すものはないが、上面形が六角形を呈し、中央と六角の端に風穴と水穴を穿っている。型づくりで、底面には布痕を、また、内面には指圧痕を残している。上面に吳須絵が描かれている。136・137には草花、137には他に鳥、138は蚊かミズスマシなどの虫と思われる。

#### 5) 蓋 (139)

径5.6cmの小さな蓋で、粘土紐を貼り付けたつまみを有する。

### 3 窯道具

エンゴロ・輪ドチ・足付き輪ドチがある。

#### (1) エンゴロ (141~144)

141・142は、口径17cm、器高12.5cm前後で、丸底を呈する。体部の内外面にはロクロ目が顯著である。体部の下端に円孔を穿っている。

143・144は、口径13cm、器高10cm前後で、体部下半をヘラ削りし、下端は面取りされている。底部は削り出されて高台状となる。作りは丁寧である。

#### (2) 輪ドチ (145)

ロクロ成形された円板の中央をくり抜いたもので、外径9.2cm、厚さ1.1cmである。底面には糸切り痕が見られる。

#### (3) 足付き輪ドチ (146~148)

ワドチに円錐ピンの足が付けられたもので、外径6cm、高さ2cm前後である。足は、4足と5足があり、ワの制作には手づくねとロクロとがある。146は、手づくねによるもので、足は5足である。

147・148は、ロクロによってワが成形され、4個の円錐ピンが付けられている。

### (3) 6号土坑 (第24・25図)

1号窯下から発見された6号土坑からは、捏鉢・植木鉢・片口・壺・徳利・土瓶・花生の陶器類と窯道具が出土している。量的にはあまり多くない。また、磁器は1点の出土もない。

#### (1) 鉢類

捏鉢・植木鉢・片口がある。

##### 1) 捏鉢 (149)

口径26cm、器高11.4cmで、体部は高台脇から丸味をもちつつ外側に張り出して立ち上がり、口縁端は肥厚している。体部外面はヘラ削りされ、内外とも鉄釉を施し、その上に長石釉を掛けている。形態・施釉の状態とも他の捏鉢と異なっている。

##### 2) 植木鉢 (150)

口径21.2cm、器高13.2cmの大形の植木鉢で、高台から体部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁の端部は水平方向に外折する。高台は3方から弧状にカットされている。体部にはロクロ調整痕が顯

著に残る。高台を除く体部の外面と内面の上半部に鉄釉を施している。

3) 片口 (151・152)

口径15~16cm、器高8cm前後である。体部は、緩やかな丸味を帯び、内弯気味に立ち上がる。口縁部は肥厚し、151は口縁直下に浅い沈線が一条巡らされている。高台はほぼ直立し、方形に近い。片口は手づくねによる制作である。体部下半を除き鉄釉が施されている。

(2) 壺類 (153)

口径9.7cm、底径10.1cm、器高17.4cmで、胴部上半に最大径を持つ。頸部は短く、体部下半はヘラ削りされている。高台は削り出し高台で、底部周辺を除き鉄釉を施している。

(3) 瓶類

徳利・土瓶がある。

1) 徳利 (154・155)

154は、撫で肩で頸部にかけて急速にすぼまり、頸部はほぼ直立する。胴体は、下半に稜をもち、稜以下は直線的に底部に至る。底部は上げ底である。胴部はヘラ削り調整され、上半部に平行沈線が見られる。全体に鉄釉が施されている。155は、頸部の破片である。胴部上半部から段をもって急速にすぼまり頸部に至る。頸部はほぼ直立し、口縁端部は折り返され玉縁状をなす。2度焼き前の素焼きの状態である。

2) 土瓶 (156・157)

土瓶には、胴部に稜が有るものと無いものがあり、釉薬やトビカンナによる装飾の有無にも2種類がある。156は、胴部上半から口縁にかけて欠損しているが、残存部は球形の胴部に短かな頸部が直立している。胴部はヘラ削りされ、器壁は薄い。底は上げ底状である。釉薬は、外面胴部下半を除き鉄釉をかけ、口縁から胴部上半部にはさらに灰釉を施している。157は、球形の胴部下半に稜をもち、稜から直線的に底部に至る。稜より上の胴部から口縁にかけてはロクロ成形のままであり、稜より下はヘラ削りされている。肩の部分には3~4段のトビカンナがかけられている。耳は富士山形を呈する。底部には窯材が熔着している。

(4) 花生 (158・159)

花生の破片の出土は多かったが全形を窺えるものはない。ほとんど同一形態のものである。底径12cm前後で、器高は25cm以上の細長い筒状を呈する。158は、底径12.6cmの筒形で、高台は削り出し高台である。器外面には鉄釉が施されているが、2度焼きはされていない。159は、胴部の破片であるが、形態的にも釉薬の状態も158に酷似している。

(5) 窯道具

足付きドチ (160) が出土している。手づくねの輪ドチに4個の円錐ピンを取り付けている。

## 5. 灰原 (第25~50図)

直接、遺構に伴わず、遺構の周辺から出土した遺物を灰原出土の遺物として一括して取り扱う。今

回の発掘調査で出土した40万点の遺物のうち大半がこの灰原出土遺物で、その量は膨大である。そのため、まだ、整理も十分に進んでいないので、ここではその概要を報告したい。

出土した場所は1号窯から2号窯の上面および窯の焚口から工房にかけてであり、1号窯の上面により多く集中していた。

灰原からは、陶器・磁器・土器・窯道具・鉄器がある。量的には陶器片が圧倒的に多い。

## 1 陶 器

碗・皿・鉢・壺・瓶・鍋・蓋・その他がある。

### (1) 碗 (161~163)

口径12cm、器高9cm、底径7.5cm前後で、ともに体部の下部は丸味を帯び、口縁は緩く内弯し、全体的に球形を呈する丸碗である。口縁端部はわずかに肥厚する。高台周辺を除き灰釉を施している。

碗類は、丸碗の器形のみで器種は单一である。

### (2) 皿類

灯明皿を除くと量的には多くない。代表的なものを形態別に分類し、その概要を記す。

#### 1) 皿

##### A) I類 (164)

口径14.5cm、器高3.8cmのやや深い皿で、内弯気味の体部、肥厚した口唇部をもつ。高台・底裏を除き鉄釉を施す。内面にトチンの痕が見られる。量的には少ない。

##### B) II類 (165・166)

口径13~15cm、器高2.2~3cm前後で、浅く、体部は緩やかに開く。体部下半がヘラ削り調整され、口唇部に輪花が付けられている。体部下半から底裏を除き、灰釉が施されている。量的には少ない。

##### C) III類 (167)

口径10cm、器高2cmの小皿で、内面底部に16弁の菊花が印刻されている。全面に鉄釉が施されている。量的には僅少である。

##### D) IV類 (168・169)

型押しにより整形されたもので、亀の形をしている。器高1.2~1.4cmと浅く、亀甲文の部分が皿状をなしている。頭部・足部・尾部など写実的である。釉薬は底部を除き、168は灰釉を、169は鉄釉を施している。量的には他の皿に比べ比較的多い。

#### 2) 卸皿 (170・171)

口径11cm、器高 cm前後の皿の見込に細線を方眼に刻み卸面としたものである。170は、浅目で、体部は内弯気味に立ち上がる。口縁の内外面に灰釉を施している。171は、体部下半をヘラ削り調整され、直線状に立ち上がる。釉は掛けられておらず、素焼きのままである。

#### 3) 灯明皿

油皿 (172~181) と受皿 (182~189) がある。

油皿は、口径10cm、器高2~2.5cm前後で、高台を有する181を除き無台で、上げ底状を呈する。体部は丸味を帯びるが、172は直線状に、173~179は内弯気味に、また、180は体部下半で屈折してそれぞれ立ち上がる。体部外面はヘラ削り調整されているが、ヘラ削りの範囲はそれぞれ異なり、口縁部までのもの（174・175）、体部中央までのもの（172・173・176・179）、体部下端までのもの（177・178）の種類がある。釉薬は、173が鉄釉、174~177・180・181は錫釉をそれぞれ施し、172・178・179は無釉である。また、174~176は、胎土が赤い特徴をもつ。なお、173は内面底部にトチ痕を、175の体部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。

受皿は、口径9~10cm、器高2cm前後で、上げ底状を呈する。棟が口縁より高いもの（182・183）、水平のもの（184）、低いもの（185~189）の別があり、棟への切り込みもV字状に鋭角のもの（182・184・189）、U字状のもの（185~187）、緩い円弧状のもの（183・188）がある。体部はヘラ削り調整されるが、油皿とは異なり、体部中央以下をヘラ削りしている。釉薬は、錫釉を施すもの（182・185~189）が大半で、183・184など無釉のままのものも見られる。

### (3) 鉢類

小鉢・大鉢・捏鉢・擂鉢・手水鉢・香炉・火入れ・火鉢・餌鉢・その他があり、バラエティーに富んでいる。

#### 1) 小鉢（190）

口径13.6cm、器高5.9cmで、高台脇から丸味をもって立ち上がり、胴部上端でいたんしばり、口縁部は大きく外反する。底部から高台脇の周辺を除き鉄釉が施されている。

#### 2) 大鉢（191）

口径21.5cm、器高9.7cmで、削り出し高台脇から直線的に外反する。口縁内面に稜を有する。内面および口縁部外面はロクロ成形、体部はヘラ削りされている。2度焼き前の素焼きのままである。

#### 3) 捏鉢（194~203）

口径30~35cm、器高15~20cmの大形（196~203）と、口径25~30cm、器高15cm未満の小形（194・195）の2種類がある。体部は全体的に丸味を帯びる。口縁部は、肥厚するもの（195・203）、短く外折するもの（198・202）、長く外折するもの（194・196・197・199~201）がある。高台は、無台のもの（195）、幅4cmの幅広のもの（196~200・202・203）、幅1.8cmの狭いもの（194）とがある。体部上半部から底部にかけてヘラ削りし、素焼きのままであるが、195には灰釉を掛けた痕跡が認められるので本来は灰釉が施される物であったと考えられる。

#### 4) 擂鉢（204~217）

擂鉢の出土量は大量である。高台の有無・口縁の形態・擂目の付け方などによって形態分類が可能である。

##### A) I類（204~208・213）

平底で口縁が三角状に突出し、口縁内部に稜ないしは沈線をもつもの。体部は底部から直線状に外反し、ヘラ削りされている。口縁内面は、204・205・208のように稜を有するものと206・207の

ように沈線が一条巡るものとがある。銷軸が施される。擂目は、左回りに付けられ、幅3cm前後で13~14本の櫛齒によって付けられている。ともに内部底面中央はX字状に、その外周は同心円状に施され、底面から稼ないし沈線まで一気に直線的に引き上げられている。

B) II類 (212)

平底で口縁に縁帶が付けられている。底部から頸部まで直線的に開き、口縁はさらに外反する。体部はヘラ削りされ、頸部はロクロ成形痕が残る。擂目は右回りに付けられ、櫛齒10本によっている。擂目の付け方はI類に類似する。銷軸が施されている。

C) III類 (210・211・214~217)

高台が付き、体部は内弯気味で、口縁に縁帶が付くもの。口縁内部には緩い張り出しがある。縁帶以下はヘラ削りされている。擂目は、底部中央から口縁内部の張り出し部分まで一気に引き上げられるものを普通とする。但し、217は底部が同心円を描き、そこから直線を引き上げている。櫛齒は、幅2~3cm、20本前後で、I類よりも歯の数が多い。釉薬は施されていないものも目立ち(210・211・214・216・217)、僅かに215が鉄軸を施しているのみである。

5) 手水鉢 (218)

口径31.8cm、器高18.9cmの大きな鉢で、高台脇は丸味をもって緩やかに立ち上がり、胴部から直線的に口縁に達している。口縁は内弯気味に突出し、口縁端は肥厚する。口縁には雷文が彫り込まれていて。胴部はヘラ削りされ、中央に梅花が印刻されている。2度焼き前で、釉薬は施されていない。

6) 香炉 (219・220)

2点とも底部を失っている。口径11cm前後で、胴部が張り、頸部でくびれる形状である。219は、口縁端が肥厚し、220は頸部がやや長目である。219は、鉄軸が施されているが、220は無軸である。

7) 火入れ (221~223)

口径11cm、器高8~10cmで、体部は直立し、口唇部は肥厚する。221は、割り出し高台から直立する。221・222ともに体部外面と口縁内面に鉄軸を施している。223は、前2者よりやや大形である。外形は竹の節を模して成形されている。体部下位の節から下はヘラ削りされ、その上方から内部はロクロ成形のままである。釉薬は施されていない。

8) 火鉢 (225)

口径19.4cmで、体部は直立し、口縁端部は内屈する。体部はヘラ削りを等間隔に施すことによって沈線状の効果を出している。胴部上方には型押しによって成形された獅子頭を象った耳を2方に付けていている。無軸のままである。

9) 鍋鉢 (224)

口径7.4cm、器高3cmの小さな鉢で、一方の口縁に環状の把手が付いている。体部は直立し、無軸である。

10) その他

上記の中に入らない鉢類をここに括する。

191は、口径21.5cm、器高9.5cmで、体部は直立し、口唇部は半坦である。体部下端は面取りされ、口唇部を除き内部から体部下端まで灰釉が施されている。

192は、口径18.2cm、器高11.8cmで、体部は丸味を帯び、口縁は強く内湾する。口縁および体部下半は器壁は厚く、体部上半は薄く整形されている。体部下半部から底部はヘラ削りされ、内部から体部上半部はロクロ成形されている。無釉である。形態的には、捏鉢か火鉢とも考えられる。

#### (6) 壺類

大壺（228～230）・小壺（226・227）があり、その中でも形状に差が見られる。

小壺は、器高6.5cm前後で、口縁のやや広いものと狭くすぼまるもの、高台付きと無台のものがある。226は、口径9cmでやや広く、口唇部は肥厚し外側に突出している。底部・高台を除き外面に鉛釉を施している。227は、口径5.2cmで、口縁部ですぼまる形状を呈し、無台である。体部下半から底部にかけてヘラ削りしている。素焼きのままである。

大壺は、器高15～20cm、口径15～17cm前後で、高台付きと無台のものがある。228は、口径15.4cm、器高15.7cmで、丸味を帯びた胴部に短い頸部、口縁端部は外折する。高台は付け高台で、肩に沈線を巡らし、それ以下にはヘラ削り調整がなされている。内面には重ね焼きないしは輪トチンの痕跡が認められる。内面から外面の高台脇まで鉛釉が施されている。229は、口径20.9cm、器高17.4cmで、球形の胴部に短く直立した頸部、外半し垂れ下がる口縁端、高台を有す。胴部上半には沈線が13条巡っている。沈線から下、高台までヘラ削りされている。無釉である。230は、口径16.9cm、器高16.7cmで、丸味を帯びた胴部、すぼまった頸部、直立し平坦な口縁を呈している。無台で上げ底状をなしている。頸部には幅広の沈線が段をなして5条巡っている。胴部はヘラ削り調整が施されている。素焼きのままで無釉である。

#### (7) 瓶類

徳利・仏花瓶・土瓶・急須がある。

##### 1) 徳利

出土量は極めて多く、形状も多様である。

###### A) I類（237・245）

全形を知り得ないが、胴部の径が25～30cmを測る大形の徳利である。237は、球形の胴部上半に櫛目文が何段かにわたって巡る。胴部下半はヘラ削りされ、一部に成形時の積み上げの痕跡が残る。245は、球形の胴部に高台が付けられたもので、外面はヘラ削りされている。ともに2度焼き前で、素焼きのままである。

###### B) II類（235）

器高22.7cmで、棘垂形の胴部に直立した口縁を付け、口縁端部は折りまげて玉縁状をなす。底部は上げ底状で、全面に鉛釉が施されている。

###### C) III類（236・246～248）

胴部に型押しの像を押し付けたいわゆる人形徳利である。236は、器高25.6cmで、胴部下半にく

の字状の大きな張り出しを持つ。肩部は撫で肩で、口縁は直立し、その端部は2重の玉縁状をなしている。肩には波状文、胴上半部には撫日文が巡っている。胴部中央に福禄寿の像が付けられている。246は、径27cmの球形の胴部の下半に稜を持ち、直線的に底部に接する。胴部中央に福禄寿が付けられている。247も同様の像であり、248は大黒の像である。ともに素焼きのままである。

D) IV類 (231・232・244)

器高16.6~16.7cmで、寸胴で短い頸部のもので、口縁端部は玉縁状をなす。胴部は下半はヘラ削りされている。231は、胴部下半に稜を持ち、胴部中央をへこませた、いわゆるベコカン徳利である。232は、肩丸形のものである。ともに素焼きのままである。244も、この類に属する。灰釉を施している。

E) V類 (233・234・238~243)

燭徳利である。口縁の形状から3形態に分けられる。(a)233・234は、端反形で、胴部はほぼ直立し、下端は面取りされている。胴部下半はヘラ削りされている。素焼きのままである。239は鉄釉と灰釉が施されている。(b)238も、端反形であるが口縁端部が肥厚している。鉄釉と灰釉が施されている。(c)240~243は鳶口形のものである。鳶口の形状から更に4種類に分けられる。240は、長い頸部に短く口が突き出す。鉢釉を施す。241は、長い頸部に大きな口を突き出す。鉢釉を施す。242は、短い頸部に小さな口が突き出す。灰釉が施されている。243は、短い頸部に大きな口が付けられている。鉄釉が施されている。

2) 仏花瓶 (249~252)

大きさと形状によって、口径6.4cm、器高8.6cmで耳のない小形のもの(249)と、口径10~11cm、器高12~14cmで耳が付く大形(250~252)の2種類がある。249は、直立する筒状の胴部に大きく外反する頸部が付き、口縁は外屈する。張り出した腰部は小さな裙となった台脚部で底部へと接続している。底部は糸切り痕が残されている。耳は無く、灰釉が施されている。250~252は、ラッパ状に大きく開いた頸部、その罐部は上方に立ち上がり緑帯となっている。張り出した胴部から腰部、小さな裙の台脚部は上げ底状の底部に続いている。頸部から胴部に接する所に渦巻状の耳が相対して貼付されている。250・251は鉄釉・錆釉が施され、252は素焼きのままである。

3) 土瓶 (256~259)

土瓶の出土は多量で、形状や装飾の違いから4種類がある。

球形の胴部下半に稜を持ち、肩部にトビカンナによる装飾が施されているもの(256)、球形の胴部下半に緩い稜を持ち、底部は上げ底で口縁内部が強く内屈するもの(258)、球形の胴部のもの(257)、偏球形の胴部のもの(259)がある。ともに短かな頸部が直立し、胴部以下はヘラ削りが施されている。釉薬は、256が錆釉、257・259が鉄釉に長石釉を流し掛けている。258は素焼きのままである。

4) 急須 (255)

急須の出土は非常に多いが、ほとんど細片で、全形を保っているものがない。注口と把手の部分が識別できる。255は、把手である。

### (8) 鍋類

土鍋・行平がある。

#### 1) 土鍋 (260~264)

耳の付け方の違いによって、2つの形状に分けられる。

山形の耳が口縁の上に付けられるもの (260~262) と、粘土紐を胴部上半部から口縁に弧状につけたもの (263・264) とがある。260~262は、やや深目の碗形の体部に直立 (261・262) ないし外反 (260) する耳を付ける。体部下半はヘラ削りされ、釉薬は内面と外面の体部上半に鉄釉ないしは錫釉を施している。263・264は、やや浅目の碗形の体部に受け口状の口唇部をもつ。体部下半はヘラ削りされている。内面から体部下半にかけて灰釉が施されている。

#### 2) 行平 (320~332)

行平の破片は大量に出土している。しかし、器壁が極めて薄くヘラ削りされているため破片からは器形を復元することが不可能な状態にある。幸い把手は比較的残りが良く、その文様の特徴から種別が可能である。把手は全て型押しによって制作されている。

把手の文様には、文字のあるもの (320~325) と植物の文様のもの (327~330)、幾何学的な文様のもの (326・331・332) の3種類がある。文字には「本中」と「寿」があり、書体や組み合わされている文様とに差が見られる。320は「本中」と花弁、321は「本中」と植物、322は「本中」と網代、323は「本中」と上下に鋸歯文、324は「寿」と刺突、325は「寿」と花弁がそれぞれ組み合わされている。植物の文様には、327の花弁と花唐草、328の菖蒲と藤の花・花唐草、329の花弁と唐草、330の菖蒲がある。幾何学文様には、326の波線、331・332の網代がある。

これらの把手の文様の違いは行平の種類の多様性を示している。

### (9) 蓋類

蓋類の出土は非常に多い。工房出土の蓋類の分類に従り以下に概要を記す。

#### 1) I類 ブリッジ状のつまみをもち、かえりのないもの (269~271)

口径18~19cmで、比較的大きな蓋である。269のつまみには包みを縛った表現があり、灰釉の上に長石釉を細線状に施している。270は笠上部に2条の沈線が、また、271は6本の櫛による波状文と平行沈線が交互に施されている。ともに無釉であるが、同類の破片には灰釉を掛けたものがある。

#### 2) II類 環状のつまみをもつもの (272・274・275・278)

かえりのないもの (272・274・278) と、かえりのあるもの (275) がある。272は、大きな環状のつまみが付き、つまみ周囲にカキ目・トビカンナによる装飾を施している。274も大きな環状つまみを付け、つまみ周囲に3条の沈線を巡らしている。278は、行平の蓋で、行平の施釉と同じ鉄釉を施し、トビカンナによる装飾がなされている。275は、径27cmの大きな蓋で、かえりを有する。

#### 3) III類 つまみ・笠・かえりのあるもの (226・280・287~297・299・300)

つまみの偏平なもの (287・288)、つまみが球形ないし尖頭状をなすもの (280・291~296・299)、両者の中間形のもの (289・300) がある。この他に特殊なものとして298のブリッジ状のつまみを有

するものがある。つまみの上面には、渦巻状（287・288）、花弁状（290・294）の刻みが施されている。笠は、水平を呈するものが多いが、280は円弧状に、287～291は傾斜を示している。軸薬は、笠の上面に鉄軸・錫軸・灰軸の上に長石軸などを流し掛けている。また、型押しによって292は花弁を、296・297は星形を表現している。299・300は笠上面にカキ目で装飾効果を高めている。

4) IV類 かえりがなく、笠の周縁が外にでるもの（267・276・277・301～304）

工房出土のIV類は小形で急須の蓋と考えられるものを主としていたが、灰原出土のIV類には、大形の蓋あるいは行平の蓋と考えられるものも量的には多い（267・276・277）。これらの蓋は、口径16～17cmで、小さなつまみを付けている。267は鉄軸と灰軸を、276・277はつまみ周囲をヘラ削りし、その外圍にトピカンナを施し、円弧状に鉄軸で装飾している。301～304は、口径8cm前後で、笠に孔を穿っている。つまみは、偏平ないし算盤玉状を呈する。灰軸を施し、鉄軸と長石軸で梅花（301・302）を、また、303は半菊花を描いている。

5) V類 つまみがあり、かえりのないもの（305・306・313）

円弧状の笠に小さなつまみを付けたもので、305・306は笠に孔を穿ち、305は灰軸に鉄軸と長石軸による梅花が描かれている。

6) VI類 笠部が外反するもの（281～285・307～312・314・315）

口径6cm前後の小形のものが大半で、口径10cm前後の大形（281・283・285）はあまり多くない。小形のものは、笠は外反しながら外に伸び、球形のつまみを付けている。つまみの上半には花弁状の刻みをつけるものが目立つ。笠上面には、灰軸を施し、その上に長石軸で笠ないし梅などを描いたものの（308～310）がある。大形の283・284は、中空の大きなつまみを付け、笠は内弯気味に立ち上がり、ロクロ目が顕著である。281・282は笠の端が強く外折し、粘土塊のつまみを付す。

7) VII類 その他のものを一括する（268・273・279・286・316～319）

つまみが欠損しており、形状がはっきりしないもの（268・273・279）や、合子蓋（286）、型押しによる矩形の蓋（316・317）がある。317の笠には獅子が表現されている。

(iii) その他

漏斗・置物・装飾品・栓および用途不明のものを一括する。

334は、口径7.9cmの漏斗で、錫軸を施す。338は、置物の一部で、動物の爪が表現されている。337は何かの栓である。339・340は型押しによる亀で、出土量は多い。333は、口径16.5cm、器高6.9cmで、底面は小さな孔が多数穿孔され、胴部には下向きに注口がつけられていたらしい。胴部内面には螺旋状の突帯が付けられ、その先端は注口に接し、液体がこの突帯を伝わって外に注がれるようになっている。全面に灰軸が施され、一部に長石軸が斑点状に掛けられている。

363～374は、墨書きされた破片である。

## 2 磁 器

灰原からの磁器の出土は非常に少ない。出土した磁器もここでの窯で焼成されたものは殆どなく、

瀬戸・美濃からの移入品である。碗・皿・鉢・蓋がある。

(1) 碗

1) I類 (341)

端反りの形状を呈する。口径10.8cm、器高5.9cmで、見込みに「寺？」の文字が書かれ、体部外面には丸文の中に捺文と丸文の中に列点と格子文を描いた呉須絵を重ね合わせている。

2) II類 (342・343)

丸碗の形状を呈する。体部下半が丸味を帯び、口縁は内湾気味に立ち上がる。342は、口径7.2cm、器高5.0cmで外面に「寺」の文字が呉須で書かれている。343は、見込みに五弁花、体部に松竹梅文を描いている。345も口縁の形状が不明であるが343と同類であろう。

3) III類 (357)

筒丸の形態を呈するもので、口縁を欠いている。高台脇から脹らみをもたせながら体部は垂直に立ち上がっている。体部には呉須絵が描かれている。

4) IV類 (344・346)

体部が外方に開くもので、飯茶碗風のもの。344は、見込みに竹・菊を、体部に格子文を表わしている。347もこの類に属するものであろうか。

(2) 皿類

1) I類 (349)

口径14.7cm、器高3.9cmで、丸味を帯びた体部に端反り状の口縁を呈する。高台は幅広の削り出し高台である。見込みには花詰め文を、体部外面には唐草の呉須絵を描いている。

2) II類 (351)

口径13.4cm、器高2.8cmで、直線状の体部を呈する。見込みには、帆掛け船や植物が、また、体部外面には唐草様の文様を呉須によって描いている。

3) III類 (350)

口径11.2cm、器高1.4cmの浅い皿で、内湾気味に立ち上がる。牡丹や唐草の文様の染付である。

4) IV類 (352)

型押しによって成形された角皿で、菊花が浮き彫りにされている。菊花と口縁との間は連弧文で埋めている。

(3) 鉢類 (353・354)

口径17.7cmの大きなもの (353) と、口径14.2cmの中形のもの (354) とがある。353は、丸味を呈した胴部から大きく外反する口縁をもつ。胴部下半には帶線を巡らせる。見込みには梅花を、口縁内面には鋸歯文を施している。354は、形態的には353に類似するが、文様は無く、口縁内面に鎖状の押庄村が見られる。

(4) 徳利 (355・356)

ともに高台を有し、呉須絵を描いている。

### (5) 蓋 (358~360)

358は、環状のつまみを有し、笠は弧状を呈する。笠には、捻文で区画された空間を帶状線などで埋めている。359は、小さなかえりを持ち、笠と鳥の呉須絵が全面に描かれている。360も同一個体で、「富」の落款が見られる。

## 3 土 器

焙烙・乘燭・サナがある。

### (1) 焙烙 (253・254)

内面に耳が付く「内耳焙烙」と胴部に把手の付く「手付焙烙」がある。253は、内耳焙烙で、口径32.1cm、器高5.1cmの大きなもので、底部にはゴザ状の圧痕が残されている。体部はナデ調整されている。254は、口径12.1cm、器高3.7cmの小形で、把手の付けられた「手付焙烙」である。口縁から胴部上半はロクロ成形、胴部下半から底部はヘラ削りされている。

### (2) 乘燭 (265・266)

ともに口縁部を欠いているが、中央に芯を立てた痕跡が見られるので「たんころ形」のものと考えられる。裾が直線的に底部にいたるもの(266)と裾が縁帯をなすもの(265)がある。両方とも底部に糸切り痕を残している。底部中央から体部にかけて貫通しない孔がある。

### (3) サナ (336)

円形の盤に多数の孔を穿ったもので、盤の厚さは1.2cmである。

## 4 窯 道 具

エンゴロ・足付きドチ・足付き輪ドチ・足付き板ドチ・輪ドチ・センペイ・円錐ビン・団子ドチ・型・棚板・エブタ・栓・鉄器などがある。灰原からの窯道具の出土は膨大で、廃棄された製品と同じ位の量がある。

### (1) エンゴロ (376~377・387)

エンゴロには、口径15~17cm、器高9~15cm前後のものから、口径10cm、器高10cm前後のものまである。体部には切り込みを入れたものから小孔を穿ったものまで多様である。底部は丸底状を呈するものと平底を呈するものがある。体部にはロクロ目を残す。376~377はエンゴロの完形で出土したものである。

また、これらとは別に口径14.7cm、器高2.9cmと浅く、底部中央には穿孔が見られるものもある。口縁には円弧状の抉りもある。

### (2) ドチ類

#### 1) 足付きドチ (379~386)

筒状の体部に足の付いたもの(379)と、逆皿状の体部に足を付けたもの(380~382)がある。379は、器高8.3cmで、5個の足を付けている。この他に器高5cm前後の小形のものもある。380~382は、器高2~3cm前後で、高低にバラエティーがある。3~5個の足を付けている。

#### 2) 足付き輪ドチ (383~384)

粘土盤の中央を円形にくり抜き円錐ピンを付けたもので、他に粘土紐を環状に繋いだものに円錐ピンを付けたものがある。

3) 足付き板ドチ (385・386)

円形の粘土板に足を付けたもので、足は3~4個が付けられている。

4) 輪ドチ (388~404)

径7~8cm、器高3~4cmの円筒状のもの (388・389)、厚さ1cmの板状の中央を穿孔したもの (390~395)、粘土紐を環状に繋いだもの (396~404) がある。388は、底部に糸切り痕を残し、体部に穿孔がある。389は、手づくねで、指圧成形痕が顯著である。板状のものは、14.3cmの大きなもの (390) から7.2cmのもの (395) まであるが、9cm前後のものが多数を占めている。底部に糸切り痕が見られる。環状のものは、404の4.2cmのものから396の10.5cmのものまで大小様々である。糸の痕跡のあるもの (396・400・402・403) がある。

5) センペイ (405~413)

ロクロによって成形されたもの (405~410) と、手づくねのもの (411~413) がある。405~410は、底面に糸切り痕を残し、体部に円錐ピンの痕を4~5個残している。411~413は、上面に製品を乗せたことを示す高台の痕跡を残している。胎土に長石を多く含んでいる。

6) その他のトチ

この他に、円錐ピン (417・418)、糸の痕のある半月状のトチ (414・415)、団子トチ (416) がある。量的には上記のトチ類をはるかに凌駕する。

(3) 型

型には、行平の把手、急須の把手、皿、蓋、土瓶の耳などがある。

1) 行平の把手の型 (419・420・423・424)

419は菖蒲を、420は網代を彫り込んでいる。419は330の、420は331の把手の型であろう。

2) 急須の把手と注口の型 (425・428・429)

425は把手、428は注口の外型、429はその内型である。

3) 皿の型 (426・427・430)

420は、角皿の外型、427はその内型である。430は菊皿の型である。

4) 蓋の型 (431)

円形の突起のある蓋の笠の型である。

5) 土瓶の耳の型 (432~438)

土瓶の耳の型で、一对を一個の型で成形し、半裁して使用している。

6) その他の型 (439~445)

444・445は人形徳利に貼付する弁天や福禄寿の型、440は蓋のつまみの型と思われる。439・441~443型によって成形された製品ははっきりしない。

(4) 欄板 (446・448)

厚さ3cm前後で、446には円が複数印されている。

(5) 角グレ (449)

偏平で細長く、表面に成形痕を残す。

(6) エブタ (451)

円形のエブタで、輪トチの痕跡が残っている。エンゴロの蓋として用いられたとされている。

(7) 桿 (452)

円錐状の底面中央に孔が穿たれている。数点出土している。

第2表 出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
1	甕	42.5	21.3	11.6	2号窯・3号土坑	灰・長石	
2	鍊鉢	—	28.0	—	2号窯1房	灰	
3	棚板	—	—	—			
4	碗	7.0	10.6	4.8	工房	灰	
5	々	6.0	12.0	4.5	々	々	
6	々	4.3	8.7	3.6	々	鐵・透	
7	々	5.2	11.5	4.6	々	灰・鐵	かけ分け
8	々	6.6	10.8	5.4	々	鐵・透	
9	々	5.7	6.9	3.0	々	錯	
10	々	5.0	6.5	7.0	々	灰	
11	々	5.2	6.4	3.2	々	灰	
12	皿	3.4	12.2	7.1	々	錯	蛇目高台
13	灯明皿	2.3	8.8	3.4	々		油皿
14	々	2.0	9.8	4.5	々	錯	々
15	々	2.0	10.0	3.5	々	々	々
16	々	1.8	9.5	3.6	々	々	々
17	々	2.0	10.1	3.7	々	々	々
18	々	2.1	9.6	3.5	々	々	々
19	々	2.3	9.7	3.3	々	々	々
20	々	2.1	10.0	3.4	々	々	々
21	々	2.3	10.0	3.4	々	々	々
22	々	2.4	10.3	3.4	々	々	々
23	々	2.6	10.1	4.5	々	々	ト子痕
24	々	2.3	10.6	4.0	々	々	
25	々	1.6	9.9	3.8	々	々	受皿
26	々	1.6	10.3	3.4	々	々	
27	々	1.7	9.5	3.4	々	々	
28	々	1.9	10.1	3.8	々	々	々
29	々	2.2	9.6	3.8	々	々	々
30	々	2.4	10.3	3.6	々	々	々
31	々	2.3	10.6	4.4	々	々	々
32	々	1.6	9.9	4.1	々	々	々
33	々	1.9	10.8	3.8	々	々	々
34	々	2.1	9.3	3.9	々	々	々
35	々	1.9	9.4	3.4	々	々	々
36	々	1.8	10.1	4.3	々	々	々
37	々	1.8	9.2	3.5	々	々	々
38	々	2.1	9.6	4.1	々	々	々
39	々	2.0	8.7	3.3	々	々	素焼
40	々	2.3	9.3	2.8	々	錯	々
41	々	1.9	9.4	3.5	々	々	々
42	々	2.0	10.3	3.8	々	々	々
43	々	2.3	10.2	4.4	々	々	々

No.	器種	法量(cm)			出土点	釉素	備考
		器高	口径	底径			
44	灯明皿	2.0	9.5	3.5	工房	錫	受皿
45	タ	2.0	9.4	4.7	タ	タ	タ
46	鉢	5.1	14.4	5.8	タ	鉄・灰	
47	香炉	3.9	11.0	4.9	タ	タ	
48	徳利	—	4.8	—	タ		素焼き
49	仏花瓶	9.0	11.8	6.0	タ	錫	
50	タ	12.8	10.0	6.4	タ		素焼き
51		6.9	9.2		タ		
52	行平	9.2	17.2	6.8	タ	鉄	トビカンナ
53	タ	8.4	16.5	6.0	タ	タ	タ
54	土瓶	11.9	8.9	7.5	タ	タ	素焼き、焰熔
55	把手	—	—	—	タ		土器
56	さな	1.8	—	8.4	タ		タ
57	タ	—	—	—	タ		タ
58	七厘	16.9	16.4	11.6	タ		タ
59	蓋 I	3.9	15.6	—	タ	灰・鉄	梅文
60	タ	3.8	17.6	—	タ	鉄	笹文
61	蓋 II	2.2	11.1	—	タ	錫	舍の墨書
62	タ	2.5	10.6	8.6	タ	タ	
63	蓋 III	2.9	8.4	6.3	タ	灰・長石	
64	タ	2.7	7.5	5.4	タ	タ	
65	タ	3.0	8.8	6.9	タ	錫・灰	
66	タ	3.2	11.2	9.0	タ	タ	
67	タ	2.8	8.0	6.2	タ	灰・長石	
68	タ	2.9	9.3	7.2	タ	タ	笹文
69	タ	2.8	8.7	6.1	タ	タ	梅文
70	タ	3.0	9.4	7.4	タ	錫	カキ目
71	タ	2.3	7.7	5.3	タ	タ	タ
72	タ	3.0	9.2	7.0	タ	鉄	
73	タ	3.4	8.9	6.8	タ	灰	
74	タ	2.7	6.9	5.1	タ	タ	
75	タ	5.1	11.6	8.8	タ	タ	
76	タ	5.2	10.3	8.2	タ	タ	
77	蓋 IV	2.4	7.4	—	タ	タ	梅文
78	タ	2.5	7.7	6.4	タ	タ	タ
79	タ	2.8	8.0	—	タ	タ	
80	タ	2.6	8.2	—	タ	錫	
81	タ	2.9	8.0	—	タ		素焼き
82	蓋 V	—	6.0	2.5	タ	灰	
83	タ	1.0	5.5	2.4	タ	錫	
84	タ	1.7	9.9	3.6	タ	タ	
85	タ	1.7	5.0	—	タ	灰	
86		1.8	5.0	—	タ	錫	
87	擂鉢	—	—	—	タ	タ	5個体が融着

No.	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
88	エンゴロ	15.5	17.0	19.3	工房		
89	タ	13.7	17.2	17.4	タ		
90	足付きドチ	8.6	6.5	9.4	タ		
91	タ	4.2	5.2	6.6	タ		
92	ワドチ	0.9		4.0	タ		
93	ツク	9.0		10.4	タ		
94		8.2	22.2	14.2	タ		
95	型	7.1	10.3		タ		碗の型、菊花彫刻
96	タ	—	15.8	—	タ		鉢の型
97	タ	—	—	—	タ		行平の把手
98	タ	—	—	—	タ		タ
99	タ	—	—	—	タ		タ
100	乳棒	8.6	2.2		タ	鉢	
101	不明	2.5	2.6		タ		
102	エブク	1.9	11.6		タ		
103	碗	8.7	13.1	5.5	3号土坑	灰	
104	土瓶	8.0	6.0	5.4	タ	鐵	
105	徳利	18.2	3.1	5.7	タ	上野	
106	仏花瓶	15.2	10.7	5.2	タ	鐵	
107	蓋	2.5	7.3	5.8	タ	灰	
108	花入れ	—	14.5	—	タ		素焼き
109	タ	17.1	14.5	12.7	タ		タ
110	碗 I	5.5	9.9	4.0	タ	透	磁器 吴須絵
111	タ	4.9	10.6	4.3	タ		タ タ
112	タ	—	—	4.0	タ		タ タ
113	碗 II	5.4	5.7	3.0	タ		タ タ
114	タ	5.2	7.3	—	タ		タ タ
115	タ	4.8	7.9	3.2	タ	— 鉄	タ タ
116	碗 III	5.4	6.3	4.0	タ	透	タ 吴須絵
117	タ	—	—	3.9	タ		タ タ
118	タ	—	—	2.9	タ		タ タ
119	タ	5.5	7.3	4.0	タ		タ
120	タ	5.0	7.8	3.5	タ		タ
121	皿	—	13.8	—	タ		タ 吴須絵
122	鉢	8.4	16.2	7.2	タ	— 鎌	
123	タ	7.8	14.3	6.5	タ		素焼き
124	徳利	—	—	6.5	タ	透	磁器 吴須絵
125	タ	—	—	5.1	タ		タ タ
126	タ	—	—	6.0	タ		タ タ
127	タ	—	—	6.3	タ		タ タ
128	タ	—	—	6.4	タ		タ タ
129	タ	—	—	7.2	タ		タ タ
130	油壺	—	—	—	タ		
131	タ	—	—	4.5	タ		タ タ

No	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
132	油壺	—	—	4.6	3号土坑	透	磁器 先須絵
133	タ	—	—	5.0	タ	タ	タ
134	水滴	2.6	—	6.7	タ	タ	吳須絵
135	タ	2.5	—	6.7	タ	タ	タ
136	タ	—	—	6.9	タ	タ	タ
137	タ	—	—	6.8	タ	タ	タ
138	タ	—	—	—	タ	タ	タ
139	蓋	1.1	5.6	3.5	タ	タ	タ
140	—	—	—	—	タ		墨書き
141	エンゴロ	12.3	17.0	3.0	タ		
142	タ	12.5	16.8	3.5	タ		
143	タ	10.2	12.5	11.2	タ		
144	タ	10.7	13.3	12.3	タ		
145	輪ドチ	1.1	9.2	—	タ		
146	ドチ	2.2	6.4	—	タ		
147	タ	1.8	6.0	—	タ		
148	タ	1.5	6.3	—	タ		
149	捏鉢	11.4	26.0	9.9	6号土坑	鉄・長石	内部に团子トチ痕
150	楕木鉢	13.2	21.2	11.0	タ	鉄	
151	片口	7.7	16.5	6.4	タ	タ	内部にトチ痕
152	タ	8.0	15.0	7.3	タ	タ	タ
153	壺	17.4	9.7	10.1	タ	鉄	
154	徳利	—	—	8.2	タ	タ	
155	タ	—	5.5	—	タ		蒸焼き
156	土瓶	11.2	7.2	7.6	タ	鉄・灰	
157	タ	11.7	8.9	7.5	タ	鉄	トビカンナ
158	花生	—	—	12.6	タ	タ	
159	タ	—	—	—	タ	タ	
160	足付き輪ドチ	2.2	4.6	—	タ		
161	碗	—	8.9	12.2	5.3	灰原	灰
162	タ	—	8.4	12.3	5.1	タ	タ
163	タ	—	8.7	13.1	5.7	タ	タ
164	皿 I	—	3.8	14.5	7.0	タ	鉛
165	皿 II	—	2.2	13.0	6.6	タ	灰
166	タ	—	—	15.4	—	鉄・灰	
167	皿 III	—	2.0	10.0	4.9	タ	
168	皿 IV	—	1.2	10.4	4.4	タ	鉛
169	タ	—	1.4	10.6	4.4	鉄	亀の型押し
170	鉢皿	—	1.8	10.7	5.7	タ	タ
171	タ	—	2.2	11.6	5.5	タ	蒸焼き
172	灯明皿	—	2.7	11.1	4.2	タ	油皿 蒸焼き
173	タ	—	2.4	10.4	3.9	タ	油皿
174	タ	—	2.4	10.4	3.2	タ	タ
175	タ	—	2.1	9.8	3.8	タ	タ
						鉄	

No.	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
176	灯明皿	2.4	10.3	4.4	灰原	錆	油皿
177	タ	2.2	9.9	3.6	タ	タ	タ
178	タ	2.1	9.6	3.7	タ		タ 素焼き
179	タ	2.0	9.6	3.6	タ		タ タ
180	タ	2.1	9.9	4.1	タ		
181	タ	2.3	9.8	4.7	タ	タ	タ 高台
182	タ	2.2	10.0	3.9	タ	タ	受皿
183	タ	2.0	9.7	4.1	タ		受皿 素焼き
184	タ	1.9	9.2	3.8	タ		タ タ
185	タ	2.0	9.5	4.2	タ		タ
186	タ	1.9	9.0	3.4	タ	タ	タ
187	タ	1.8	9.6	4.4	タ	タ	タ
188	タ	1.8	9.2	4.3	タ	タ	タ
189	タ	2.0	9.8	4.0	タ	タ	タ
190	小鉢	5.9	13.6	5.2	タ	鉄	
191	大鉢	9.7	21.5	8.0	タ		素焼き
192	鉢	11.8	18.4	8.8	タ		タ
193	タ	7.9	18.2	12.5	タ		
194	捏鉢	13.0	27.6	16.2	タ		素焼き
195	タ	14.5	29.4	15.3	タ		
196	タ	15.1	31.0	16.0	タ		素焼き
197	タ	15.0	32.9	15.7	タ		タ
198	タ	17.3	33.7	16.0	タ		タ
199	タ	17.7	31.6	17.0	タ		タ
200	タ	17.6	33.0	16.7	タ		タ
201	タ	16.8	35.5	19.1	タ		タ
202	タ	18.0	34.3	16.6	タ		タ
203	タ	18.0	34.5	16.8	タ		タ
204	擂鉢 I	13.2	33.7	16.0	タ		
205	タ	12.9	30.0	12.6	タ		
206	タ	15.5	30.7	11.1	タ		
207	タ	14.3	31.8	13.0	タ		
208	タ	15.9	38.0	16.8	タ		
209	タ	—	25.6	—	タ		
210	擂鉢 II	—	33.7	—	タ		素焼き
211	タ	—	31.4	—	タ		タ
212	擂鉢 III	13.2	29.7	12.5	タ		
213	タ	—	—	14.0	タ		素焼き
214	擂鉢 IV	14.7	33.0	14.3	タ		タ
215	タ	13.5	30.0	13.8	タ		
216	タ	—	—	14.4	タ		素焼き
217	タ	—	—	12.8	タ		タ
218	手洗鉢	18.9	31.6	15.1	タ		
219	香炉		11.3		タ	鉄	

No.	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
220	香炉		11.0		灰原		素焼き
221	火入れ	8.0	10.6	9.5	タ	鉄	
222	タ	8.7	11.6	7.0	タ	タ	
223	タ	9.8	14.0	13.0	タ		竹の形状 素焼き
224	鉢	3.0	7.4	4.5	タ		素焼き
225	火鉢		19.4		タ		タ 獅子頭の耳
226	小壺	6.6	9.0	4.8	タ		
227	タ	6.4	5.2	3.7	タ		素焼き
228	大壺	15.4	15.7	11.5	タ	鉄	
229	タ	17.4	20.5	12.6	タ		素焼き
230	タ	16.7	16.9	13.9	タ		タ
231	徳利 IV	16.7	2.7	6.9	タ		タ
232	タ	16.6	2.5	6.9	タ		タ
233	徳利 V			7.1	タ		タ
234	タ	22.0	3.6	6.5	タ		タ
235	徳利 II	22.7	3.5	9.3	タ	鉄	
236	徳利 III	25.6	3.9	9.4	タ		素焼き 福禄寿
237	徳利 I	—	—	—	タ		タ
238	徳利 III		3.0		鉄・灰		
239	タ		3.6		タ		
240	タ		3.6		鉄		
241	タ		3.4		タ		
242	タ		2.8		タ	灰	
243	タ		3.0		タ	鉄	
244	タ		2.8		タ		素焼き
245	徳利 I			14.8	タ		タ
246	徳利 III	—	—	—	タ		タ 福禄寿
247	タ	—	—	—	タ		タ タ
248	タ	—	—	—	タ		タ 大黒
249	仏花瓶	8.6	6.4	4.8	タ		
250	タ	13.2	9.8	5.6	タ	鉄	
251	タ	12.5	10.7	6.8	タ	鉄	
252	タ	13.8	11.2	6.9	タ		
253	培培	5.1	32.1	25.8	タ		素焼き
254	タ	3.7	12.1	4.8	タ		タ
255	急須	—	—	—	タ		把手
256	土瓶	11.7	8.8	7.4	タ	鉄	トビカンナ
257	タ	11.6	8.1	7.6	タ	鉄・長石	
258	タ	10.8	9.3	7.5	タ		素焼き
259	タ	8.5	6.6	6.4	タ	鉄・長石	
260	土鍋	10.9	21.2	9.2	タ		素焼き
261	タ	11.3	19.6	—	タ	鉄	
262	タ	—	23.4	—	タ	タ	
263	タ	—	20.9	—	タ	灰	

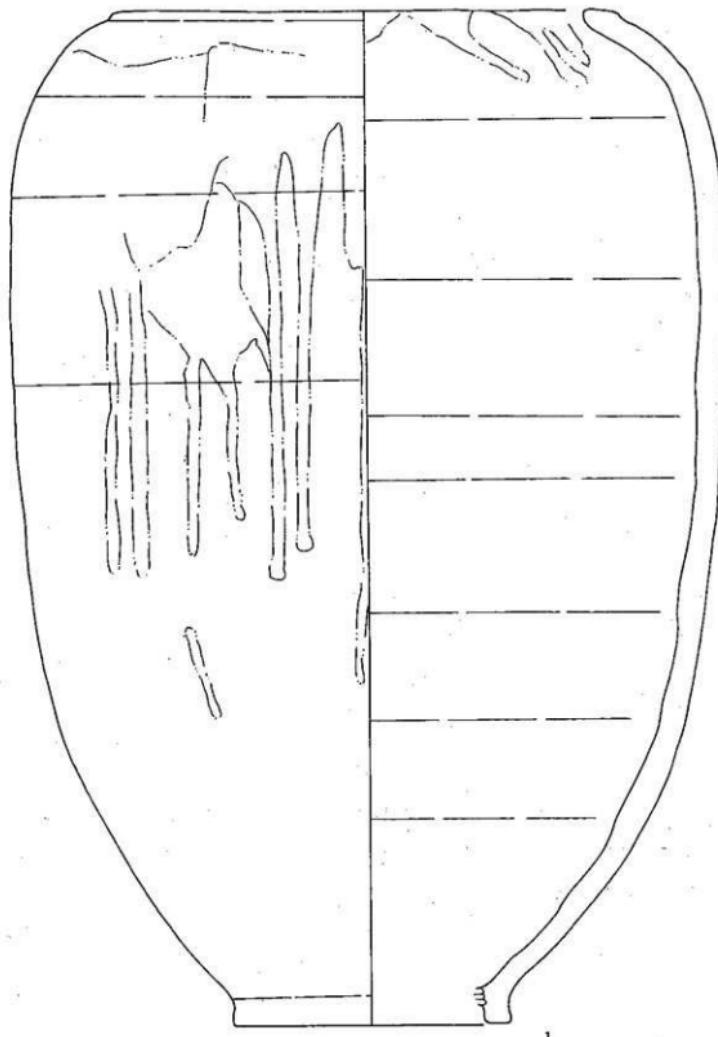
No.	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
264	土鍋	—	18.4	—	灰原		素焼き
265	乗鍋	—	—	4.0	タ		土器
266	タ	—	—	4.8	タ		タ
267	蓋 IV	4.0	15.7	—	タ	鉄・灰	
268	蓋 VII	—	16.7	—	タ	鉄	
269	蓋 I	—	—	—	タ	鉄・長石	
270	タ	—	18.1	—	タ		素焼き
271	タ	—	19.0	—	タ		タ
272	蓋 II	3.8	17.8	—	タ	錆	トビカンナ
273	蓋 VII	3.0	15.5	—	タ		素焼き トビカンナ
274	蓋 II	3.3	18.5	—	タ		素焼き
275	タ	5.9	27.0	22.7	タ		タ
276	蓋 IV	—	17.6	—	タ	鉄	トビカンナ
277	タ	4.5	16.0	—	タ		タ
278	蓋 II	3.1	14.8	—	タ		タ
279	蓋 VII	—	13.0	—	タ		素焼き
280	蓋 III	5.2	10.5	8.4	タ	錆	
281	蓋 VI	2.4	12.9	4.8	タ		素焼き
282	タ	2.0	8.6	3.5	タ	鉄	
283	タ	3.4	8.5	4.0	タ		素焼き
284	タ	3.8	8.7	3.7	タ		タ
285	タ	3.4	8.7	3.9	タ		タ
286	蓋 VII	2.5	9.3	7.0	タ		タ
287	蓋 III	4.4	11.3	9.0	タ		タ
288	タ	3.7	9.5	6.8	タ		タ
289	タ	3.0	7.9	5.5	タ		タ 鉄絵
290	タ	3.7	8.3	6.5	タ		
291	タ	3.2	7.6	5.8	タ	鉄・長石	
292	タ	2.9	8.0	6.3	タ	鉄・長石	
293	タ	2.7	8.4	6.5	タ	灰	花弁
294	タ	2.9	9.1	7.2	タ	鉄・灰	
295	タ	2.8	7.3	5.3	タ	鉄	型押し
296	タ	2.8	7.6	6.2	タ	タ	タ 素焼き
297	タ	—	7.4	5.3	タ		
298	タ	—	3.0	9.2	タ	鉄	
299	タ	—	3.4	10.8	タ	錆	カキ目
300	タ	—	2.5	8.5	タ	タ	タ
301	蓋 IV	2.9	7.7	—	タ	灰	鉄と長石で梅花
302	タ	—	2.2	7.5	タ	タ	タ
303	タ	—	2.8	8.0	タ	タ	タ
304	タ	—	2.5	7.9	タ	タ・長石	タ
305	蓋 V	—	2.4	2.4	タ	タ	タ
306	タ	—	2.7	6.4	タ	タ	タ
307	蓋 VI	—	1.5	5.9	2.3	タ	

No	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
308	蓋 VI	1.8	6.2	2.8	灰原	灰	
309	タ	1.7	6.1	2.3	タ	タ	
310	タ	1.9	5.8	2.6	タ	タ	
311	タ	1.7	6.0	2.3	タ	タ・長石	
312	タ	1.8	5.8	2.4	タ	タ・長石	
313	蓋 V	1.5	4.2	—	タ		素焼き
314	蓋 VI	1.9	6.0	2.4	タ		タ
315	タ		8.2	2.3	タ		
316	蓋 VII	—	—	—	タ	灰・鉄・長石	
317	タ	—	—	—	タ	鐵・鎗	
318	タ	1.1	5.6	4.2	タ	鎗	獅子 素焼き
319	タ	1.1	6.5	—	タ		タ
320	把手	—	—	—	タ		行平の把手「本中」素焼き
321	タ	—	—	—	タ		タ タ タ
322	タ	—	—	—	タ		タ タ タ
323	タ	—	—	—	タ		タ タ タ
324	タ	—	—	—	タ		タ 「寿」 タ
325	タ	—	—	—	タ	灰	タ タ
326	タ	—	—	—	タ		素焼き
327	タ	—	—	—	タ		タ 花・唐草 タ
328	タ	—	—	—	タ		タ 高瀬・唐草 タ
329	タ	—	—	—	タ		タ 花弁・唐草 タ
330	タ	—	—	—	タ		タ 高瀬
331	タ	—	—	—	タ		タ 織代 タ
332	タ	—	—	—	タ		タ タ タ
333	不明	6.9	16.5	16.0	タ		
334	漏斗	9.0	11.2	—	タ		
335	水滴?	5.0	5.5	4.3	タ	鎗	素焼き
336	サナ	1.2	—	—	タ		土器
337	栓	—	—	—	タ	灰	
338	置物	—	—	—	タ		素焼き
339	亀	—	—	—	タ	灰	
340	タ	—	—	—	タ	透	素焼き
341	碗	5.9	10.8	4.5	タ		磁器 具須絵
342	タ	5.0	7.2	2.6	タ		タ タ
343	タ			3.1	タ		タ タ
344	タ	—	—	—	タ		タ タ
345	タ	—	—	3.3	タ		タ タ
346	タ	—	—	—	タ		タ タ
347	タ	—	—	—	タ		タ タ
348	タ	—	—	—	タ		タ タ
349	皿	3.9	14.7	8.9	タ		タ タ
350	タ	1.4	11.2	6.4	タ		タ タ
351	タ	2.8	13.4	7.1	タ		タ タ

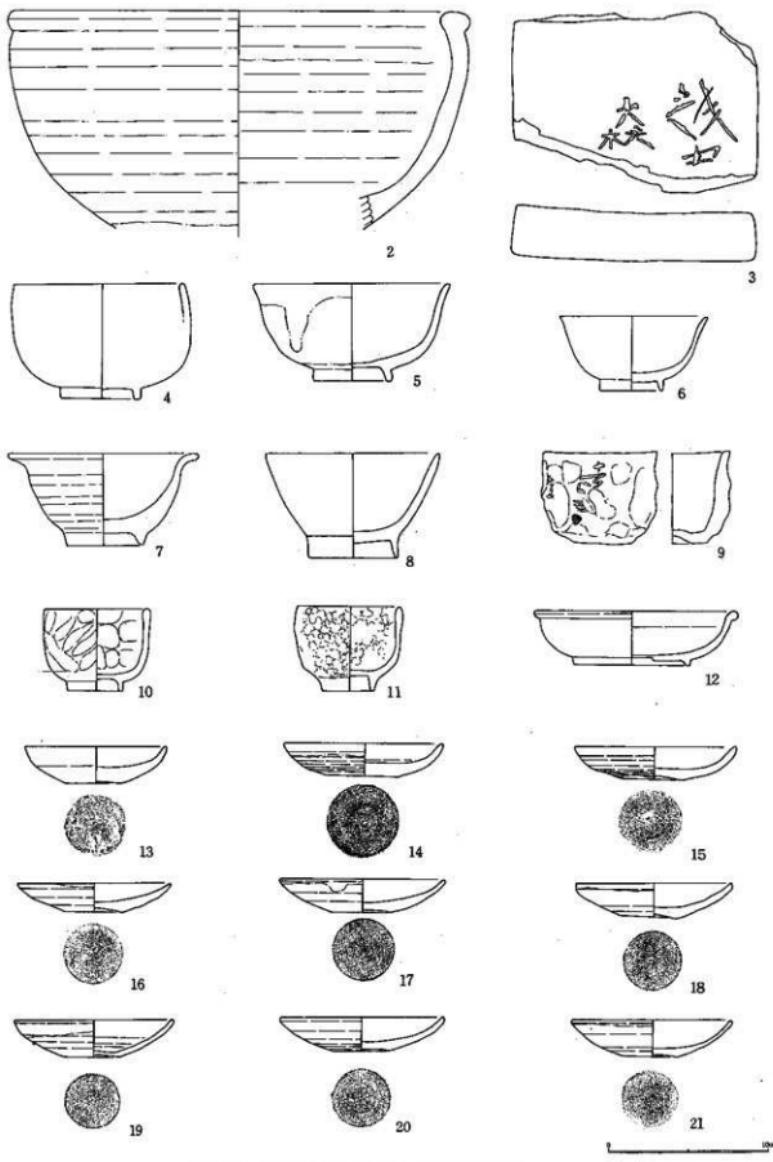
No	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
352	皿	2.1			灰原	透	磁器 具須絵
353	鉢	6.4	17.7	5.3	タ	透・鐵	タ 錫文花木
354	タ	6.4	14.2	6.1	タ	透・鉛	タ
355	徳利	—	—	6.2	タ	透	タ 具須絵
356	タ	—	—	4.6	タ	タ	タ
357	碗	—	—	3.9	タ	タ	タ
358	蓋	2.1	9.0	3.5	タ	タ	タ
359	タ		—	12.2	タ	タ	タ
360	タ	—	—		タ	タ	タ
361	碗	—	—	—	タ	タ	タ
362	タ	—	—		タ	タ	タ
363	墨書き	—	—	—	タ		素焼き
364	タ	—	—	—	タ		タ
365	タ	—	—	—	タ		タ
366	タ	—	—	—	タ		タ
367	タ	—	—	—	タ		タ
368	タ	—	—	—	タ		タ
369	タ	—	—	—	タ		タ
370	タ	—	—	—	タ		タ
371	タ	—	—	—	タ		タ
372	タ	—	—	—	タ		タ
373	タ	—	—	—	タ		タ
374	タ	—	—	—	タ		タ
375	エンゴロ	8.7	19.0	17.7	タ		
376	タ	9.6	10.0	10.9	タ		
377	タ	6.0	13.0	13.1	タ		
378	タ	21.0	9.2	15.8	タ		
379	足付きドチ	8.3	7.1	9.8	タ		
380	タ	3.2	6.5	8.6	タ		
381	タ	2.3	5.9	8.1	タ		
382	タ	1.6	6.1	7.0	タ		
383	足付き輪ドチ	2.4	8.3		タ		
384	タ	2.4	7.4		タ		
385	タ	1.1	6.4		タ		
386	タ	1.1	5.0		タ		
387	エンゴロ	2.9	14.7	14.4	タ		
388	輪ドチ	3.1	8.0		タ		
389	タ	4.3	7.0		タ		
390	タ	1.3	14.3		タ		
391	タ	1.3	9.3		タ		
392	タ	1.1	9.0		タ		
393	タ	1.2	8.0		タ		
394	タ	1.1	8.2		タ		
395	タ	1.1	7.2		タ		

No.	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
396	輪ドチ	1.4	10.5		灰原		
397	タ	1.8	6.7		タ		
398	タ	1.2	5.8		タ		
399	タ	1.0	6.7		タ		
400	タ	1.0	5.6		タ		
401	タ	0.9	4.7		タ		
402	タ	0.8	5.0		タ		
403	タ	0.8	4.8		タ		
404	タ	0.7	4.2		タ		
405	センペイ	1.9	11.0	3.9	タ		
406	タ	1.5	9.0	4.0	タ		
407	タ	1.2	7.9	3.5	タ		
408	タ	1.1	6.4	3.7	タ		
409	タ	1.4	7.5	4.2	タ		
410	タ	1.1	6.8	4.0	タ		
411	タ	0.9	7.0	1.6	タ		
412	タ	1.1	7.3	2.1	タ		
413	タ	0.9	7.5		タ		
414	トチ	—	—	—	タ		
415	タ	—	—	—	タ		
416	団子トチ				タ		
417	円錐ビン				タ		
418	タ				タ		
419	型				タ		行平把手の型
420	タ				タ		タ
421	タ				タ		
422	タ				タ		
423	タ				タ		行平把手の型
424	タ				タ		タ
425	タ				タ		急須把手の型
426	タ				タ		皿の型
427	タ				タ		タ
428	タ				タ		注口の型
429	タ				タ		タ
430	タ				タ		皿の型
431	タ				タ		壺の型
432	タ				タ		土瓶耳の型
433	タ				タ		タ
434	タ				タ		タ
435	タ				タ		タ
436	タ				タ		タ
437	タ				タ		タ
438	タ				タ		タ
439	タ				タ		タ

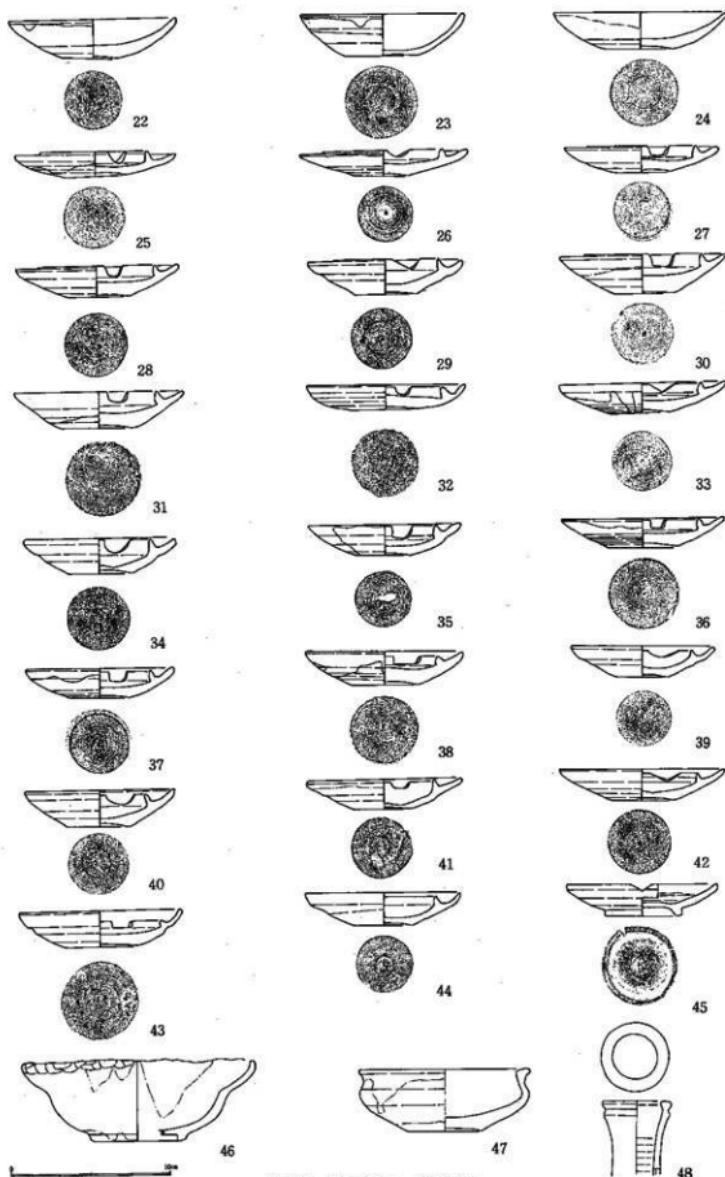
No.	器種	法量(cm)			出土地点	釉薬	備考
		器高	口径	底径			
440	型				灰原		
441	々				々		蓋つまみの型
442	々				々		
443	々				々		
444	々				々		
445	々				々		
446	棚板	3.7			々		
447	不明				々		
448	棚板	3.0	16.2		々		
449	角グレ	3.0			々		
450	不明				々		
451	エブタ	4.9			々		
452	栓	9.1	11.6		々		



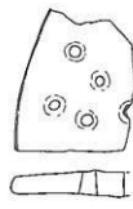
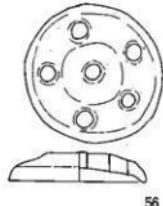
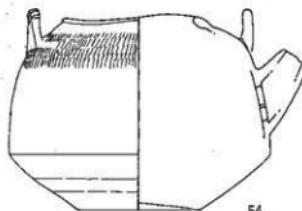
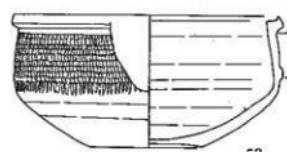
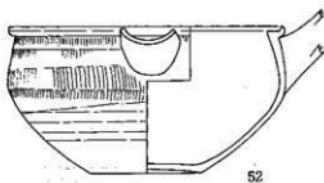
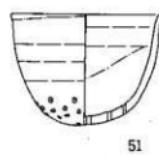
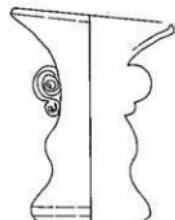
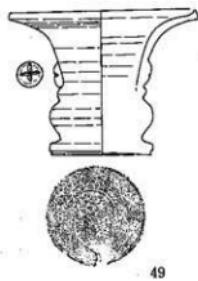
第14図 2号竈・3号土坑上面(4号土坑範囲内)出土物



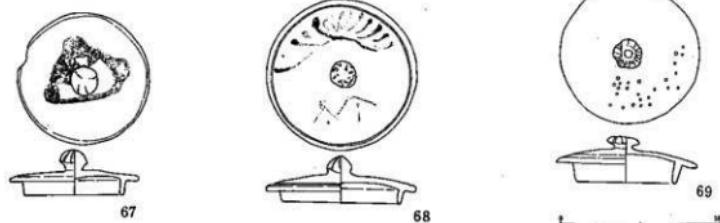
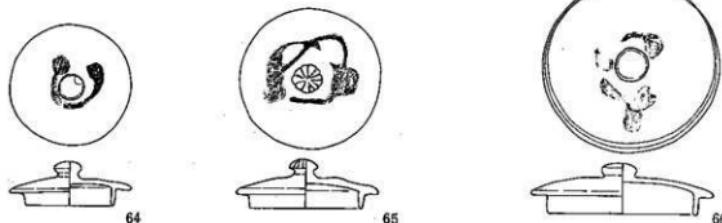
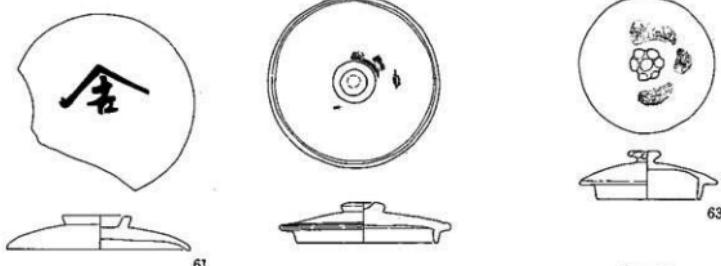
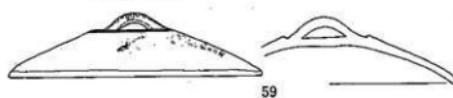
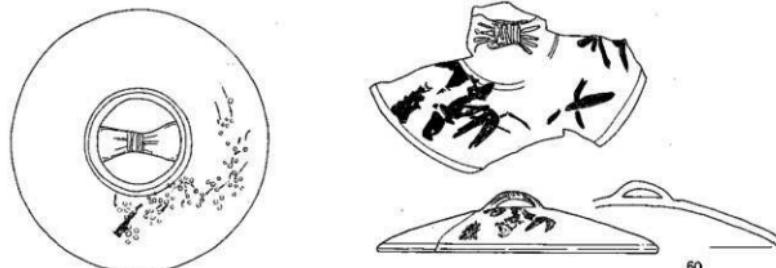
第15図 2号窯(2・3)、工房(4-21)出土遺物(I)



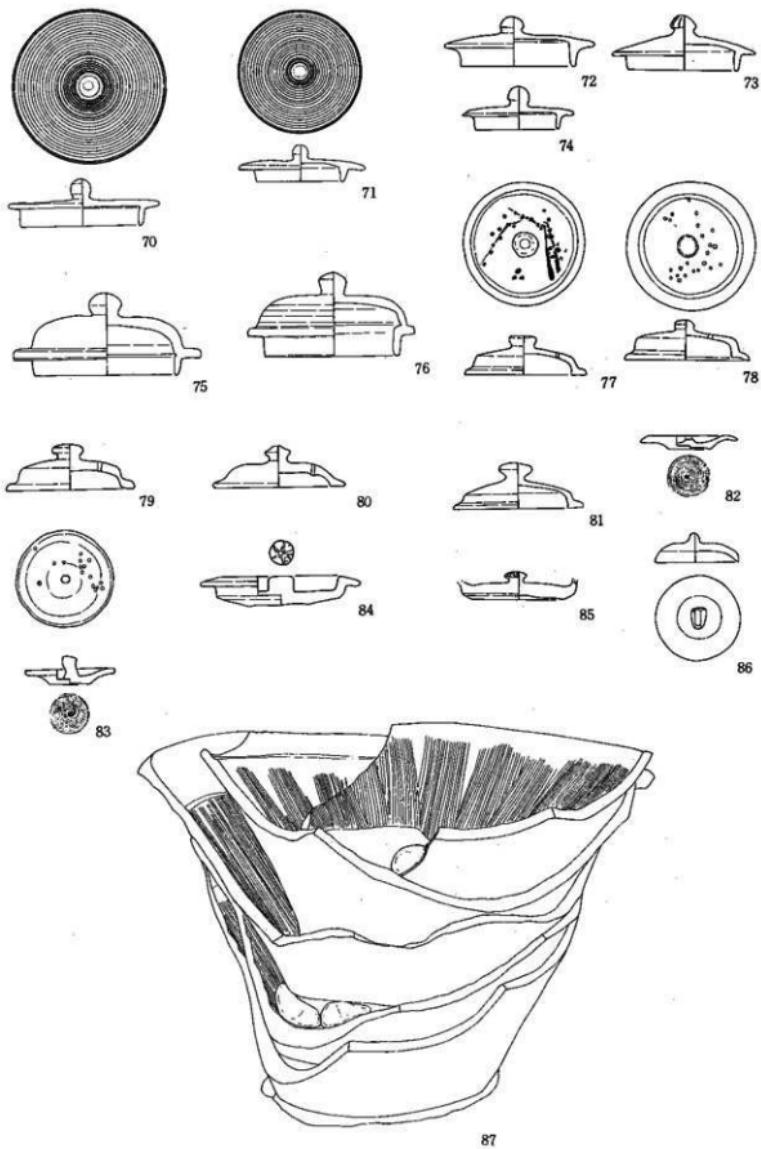
第16図 工房出土遺物(2)



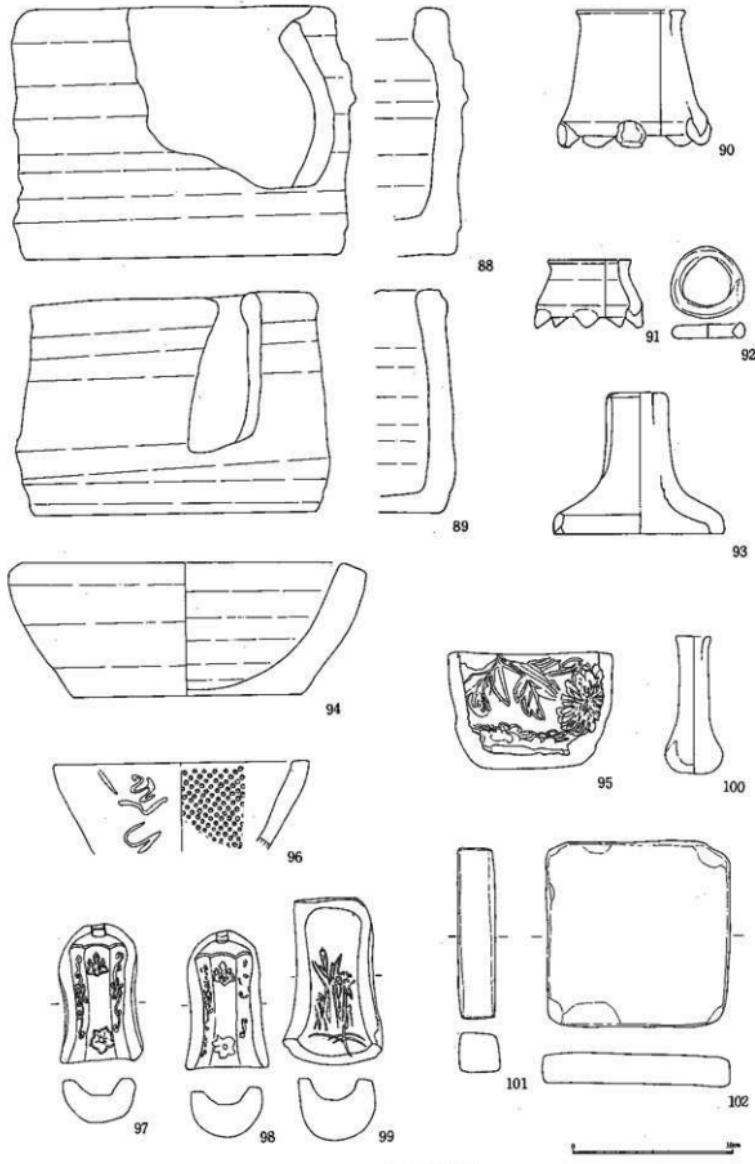
第17図 工房出土遺物(3)



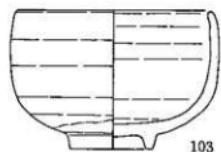
第18図 工房出土遺物(4)



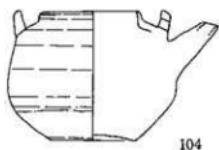
第19図 工房出土遺物(5)



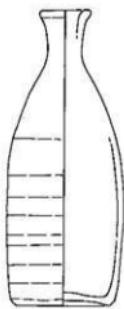
第20図 工房出土遺物(6)



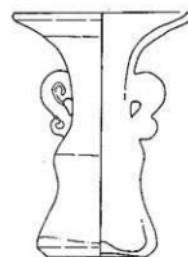
103



104



105



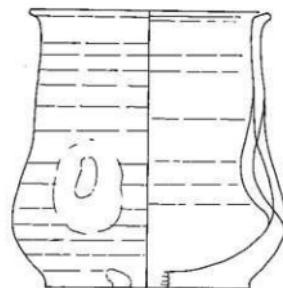
106



107



108



109



110



111



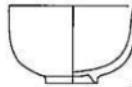
112



113



114



115



第21図 3号土坑出土遺物(i)



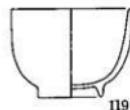
116

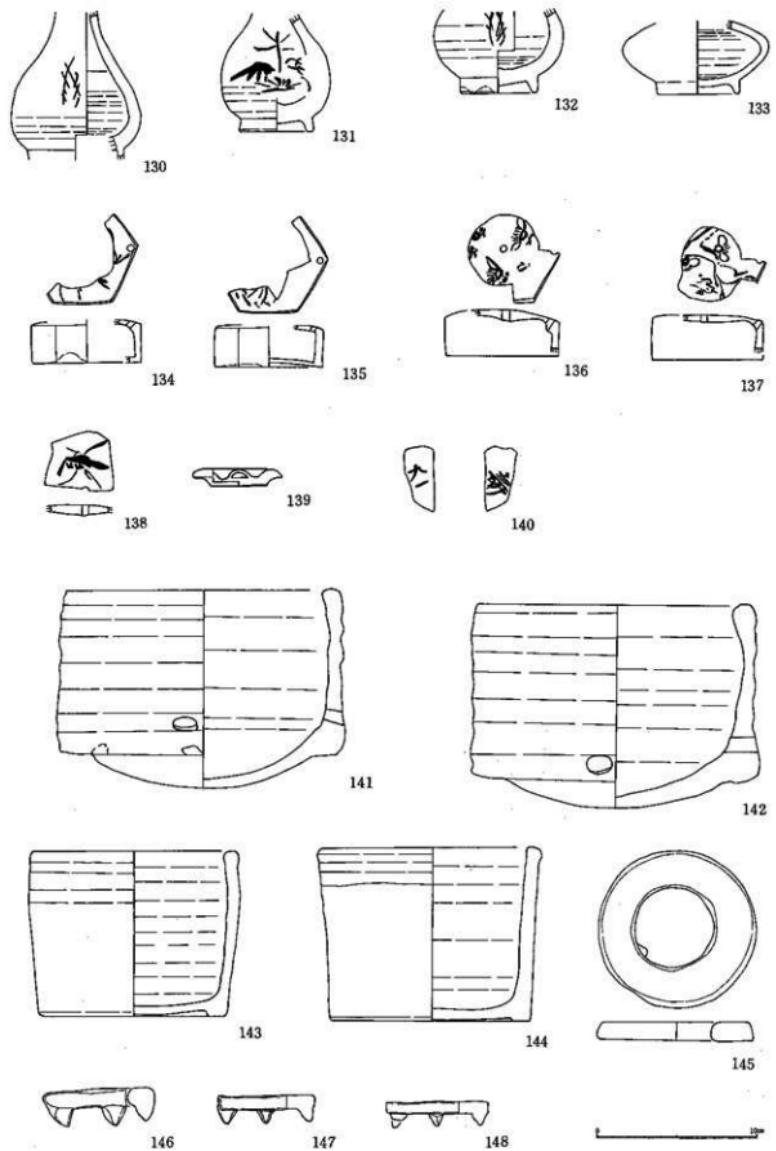


117

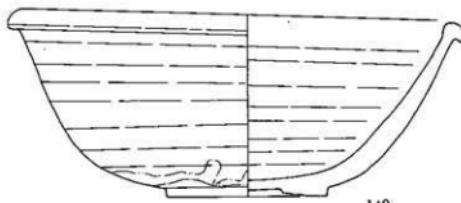


118

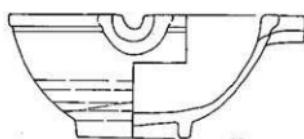




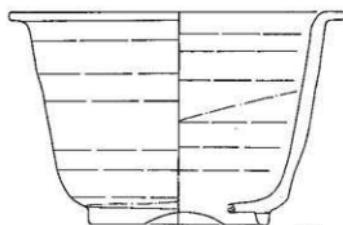
第23図 3号土坑出土遺物(3)



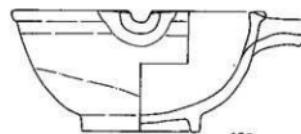
149



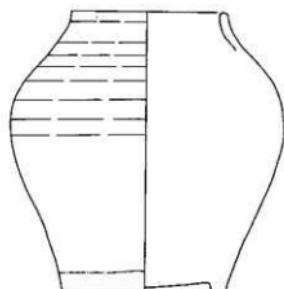
151



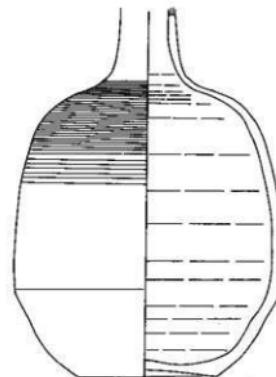
150



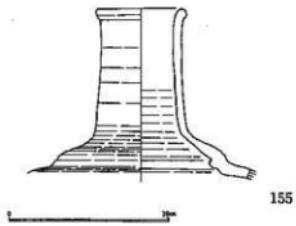
152



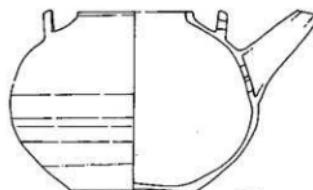
153



154

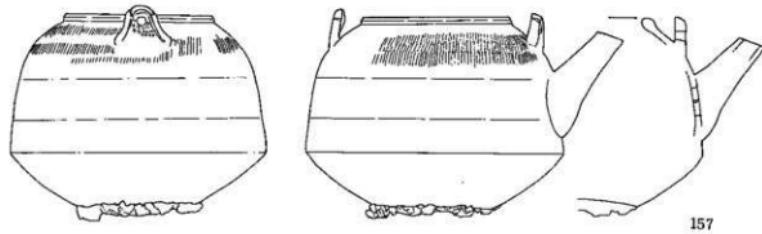


155

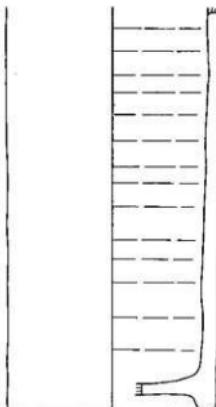


156

第24図 6号土坑出土遺物(I)



157



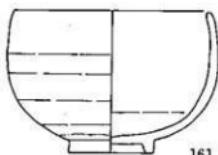
158



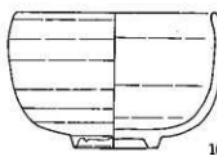
159



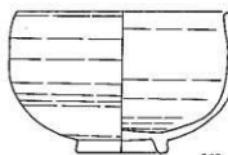
160



161



162



163



164



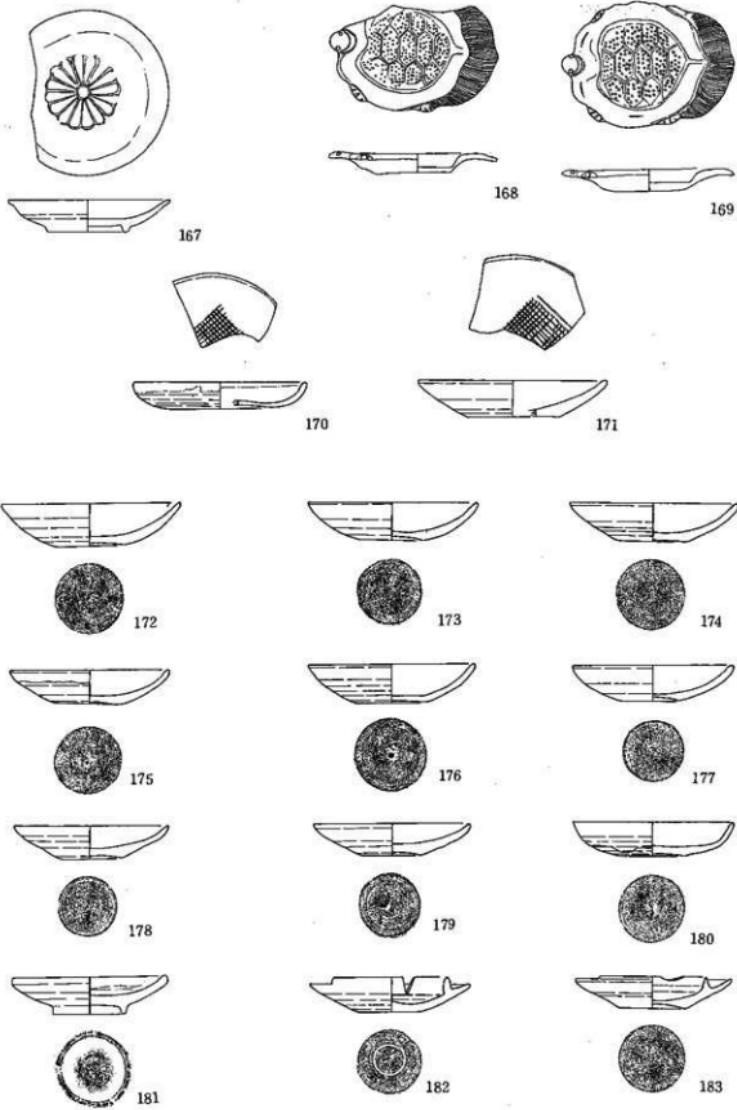
165



166

第25図 6号土坑(157~160)、灰原(161~166)出土遺物(I)

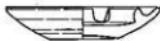




第26図 灰原出土遺物(2)



184



185



186



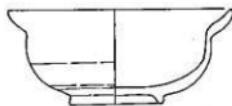
187



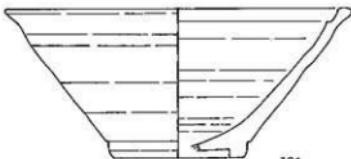
188



189



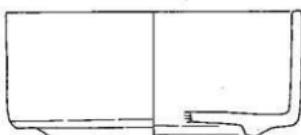
190



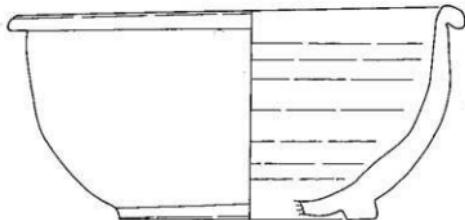
191



192



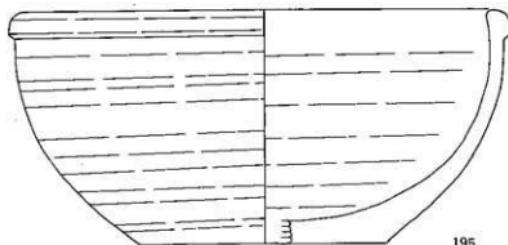
193



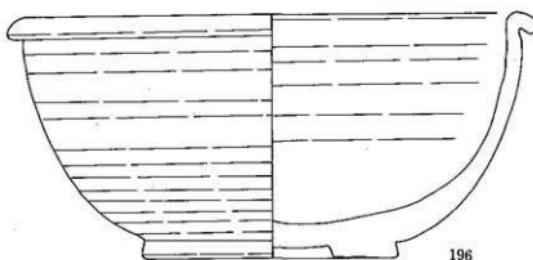
194

10cm

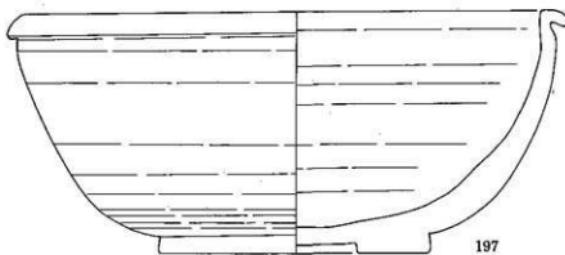
第27図 灰原出土遺物(3)



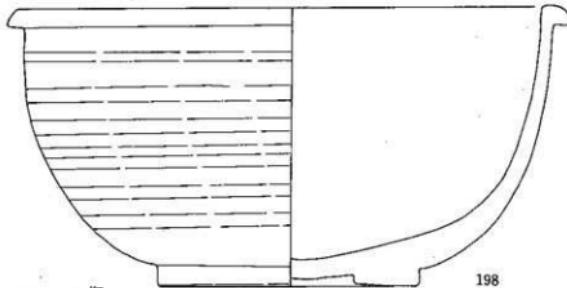
195



196



197

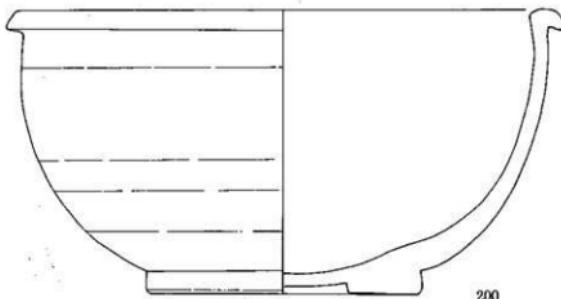


198

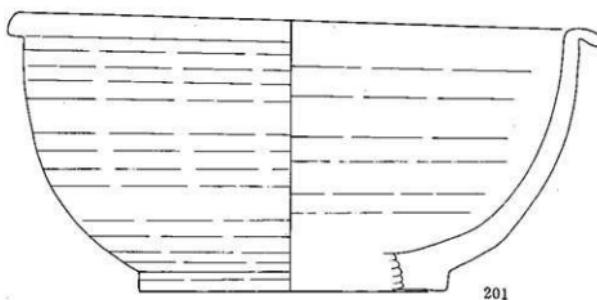
第28図 灰原出土遺物(4)



199



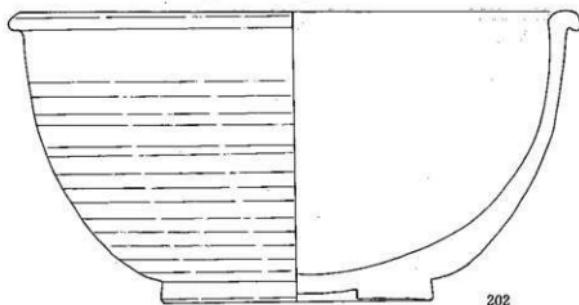
200



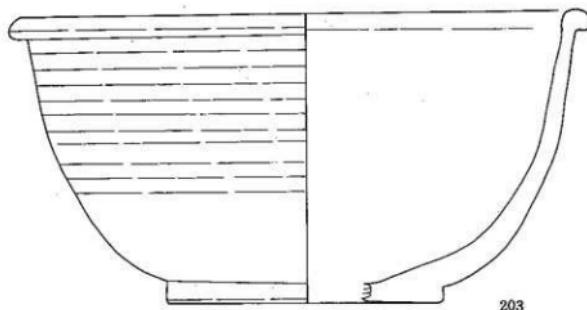
201



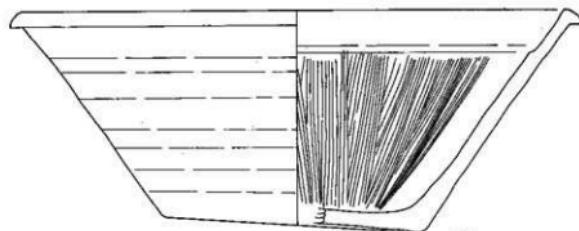
第29図 灰原出土遺物(5)



202



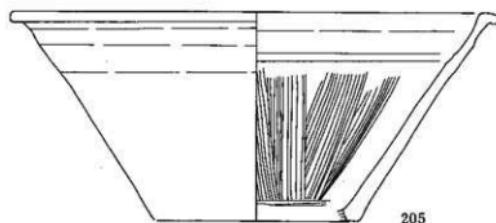
203



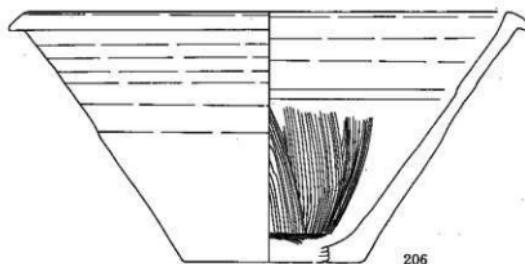
204



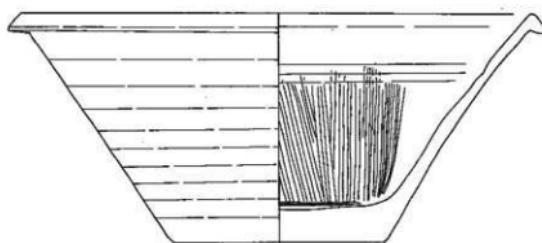
第30図 灰原出土遺物(6)



205



206

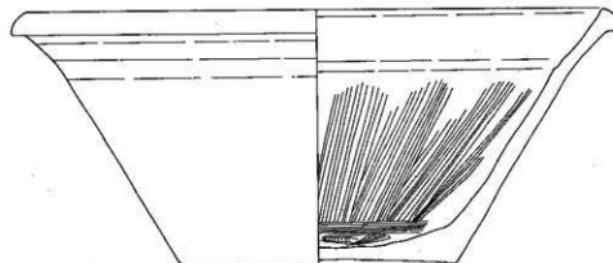


207



10cm

第31図 灰原出土遺物(7)



208



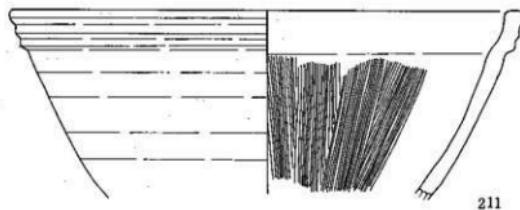
209



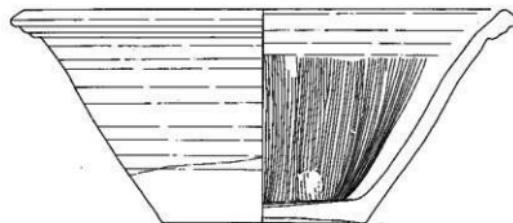
210



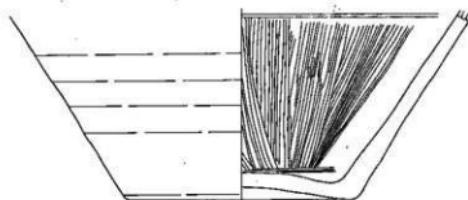
第32図 灰原出土遺物(8)



211



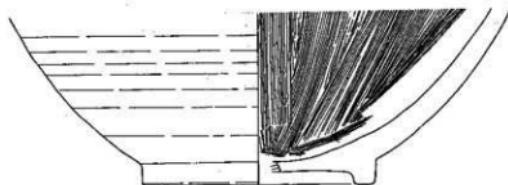
212



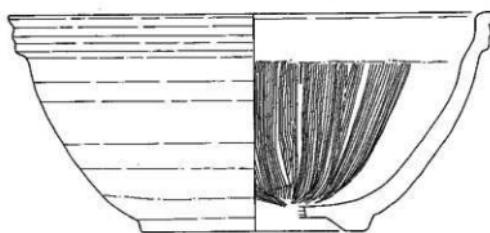
213



第33図 灰原出土遺物(9)



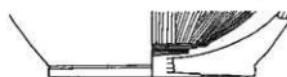
214



215



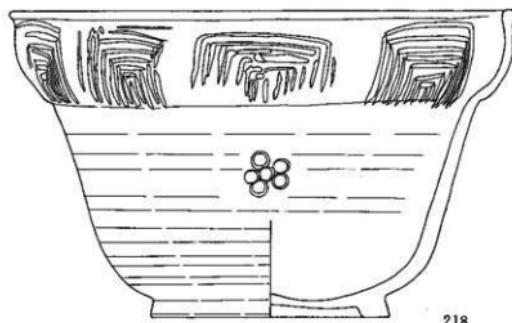
216



217



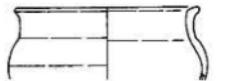
第34図 灰原出土遺物(1)



218



219



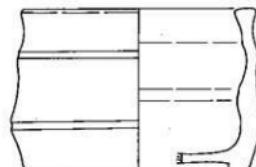
220



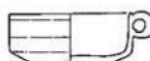
221



222



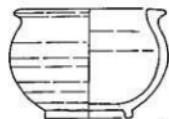
223



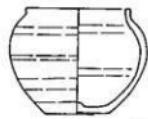
224



225



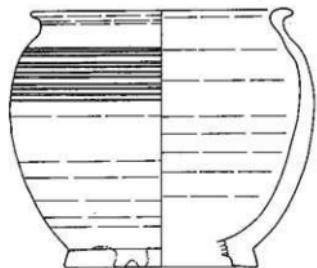
226



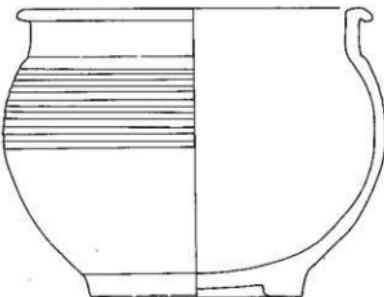
227



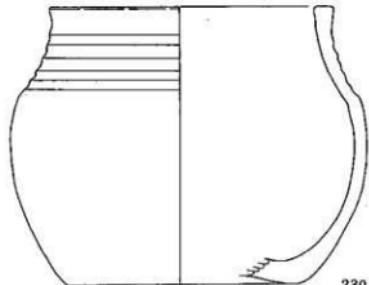
第35図 灰原出土遺物 (II)



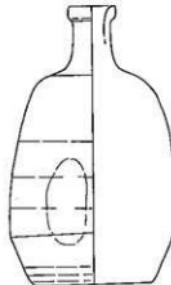
228



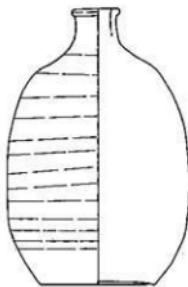
229



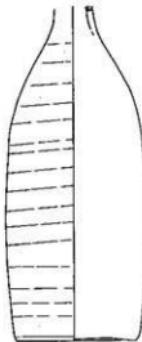
230



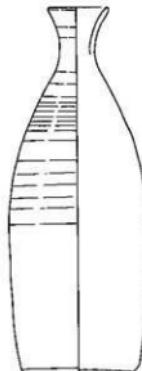
231



232



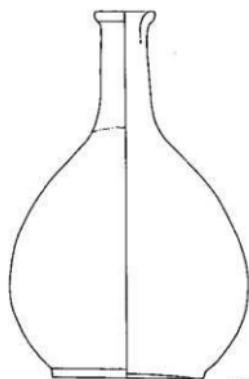
233



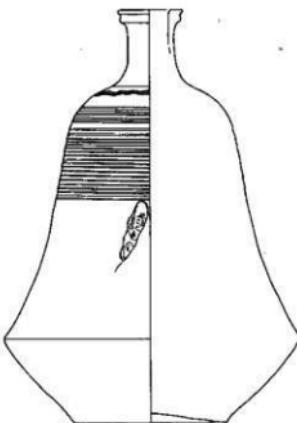
234



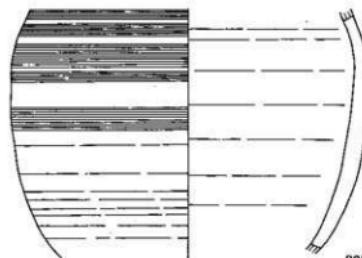
第36図 灰原出土遺物 (II)



235



236



237



238



239



240



241



242



243



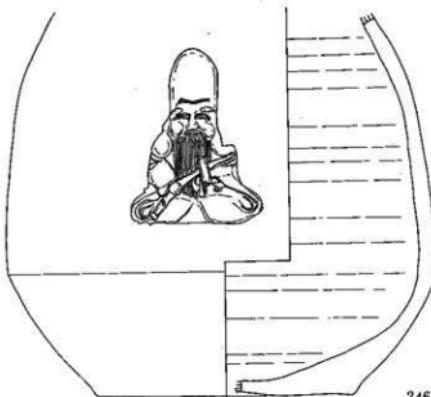
244



第37図 灰原出土遺物 (3)



245



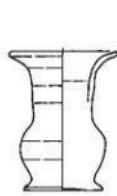
246



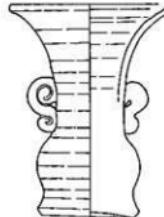
247



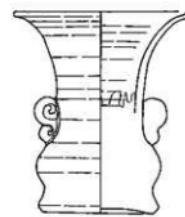
248



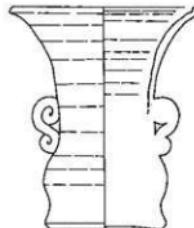
249



250



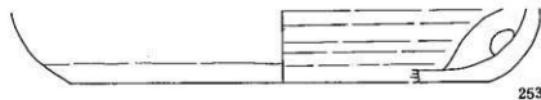
251



252



第38図 灰原出土遺物(II)



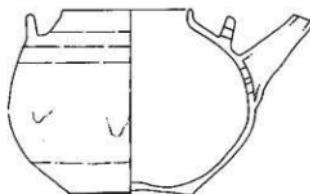
254



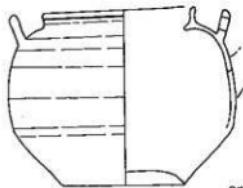
255



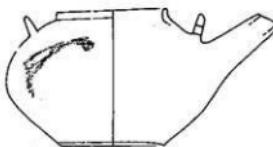
256



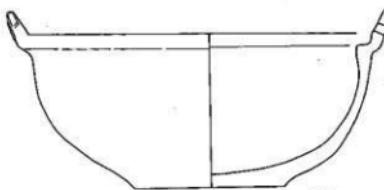
257



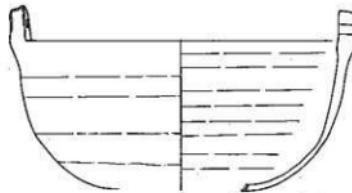
258



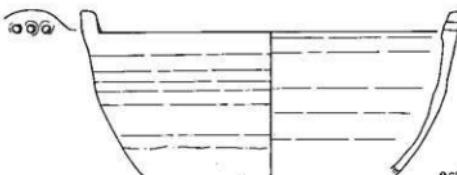
259



260



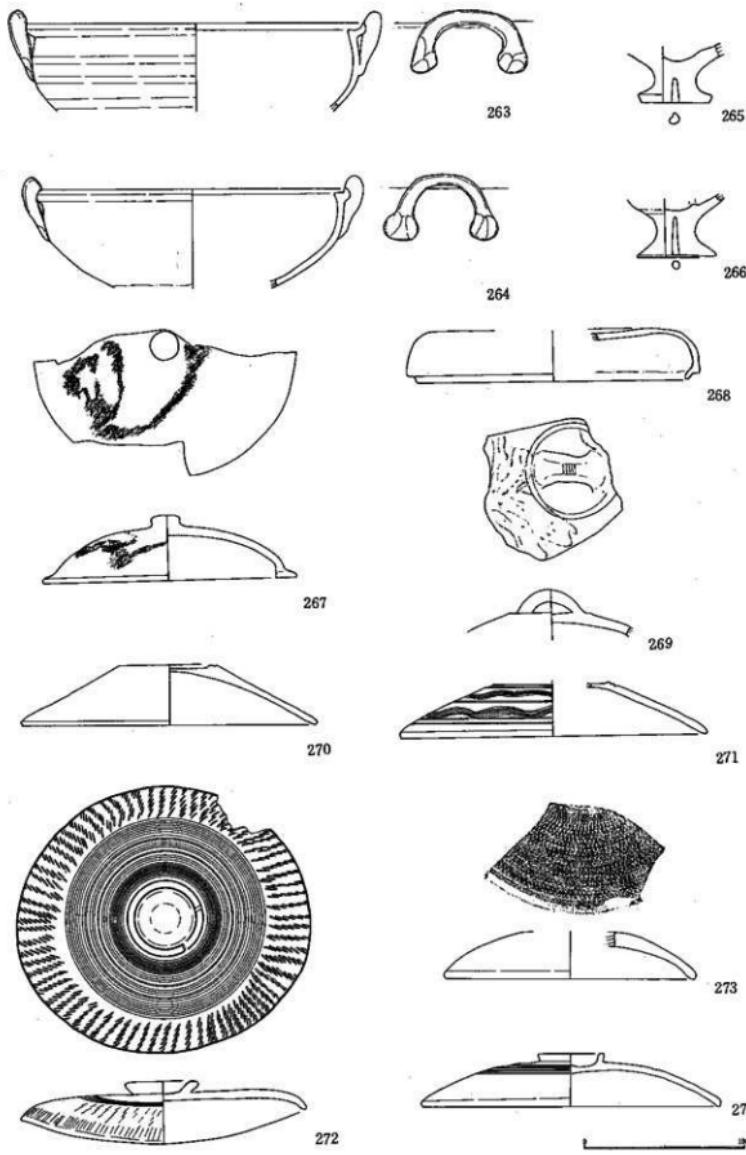
261



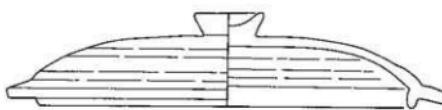
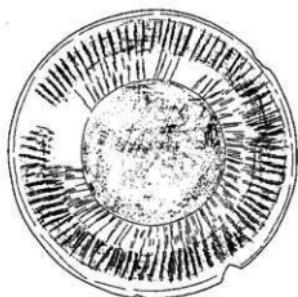
262



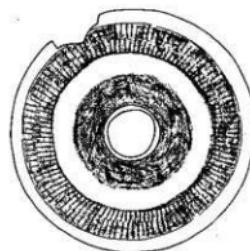
第39図 灰原出土遺物(15)



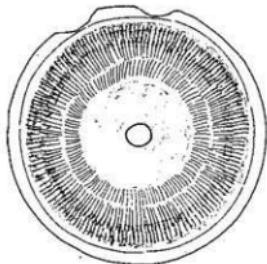
第40図 灰原出土遺物 (15)



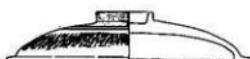
275



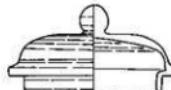
278



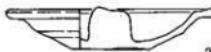
277



279



280



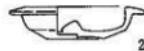
281



283



284



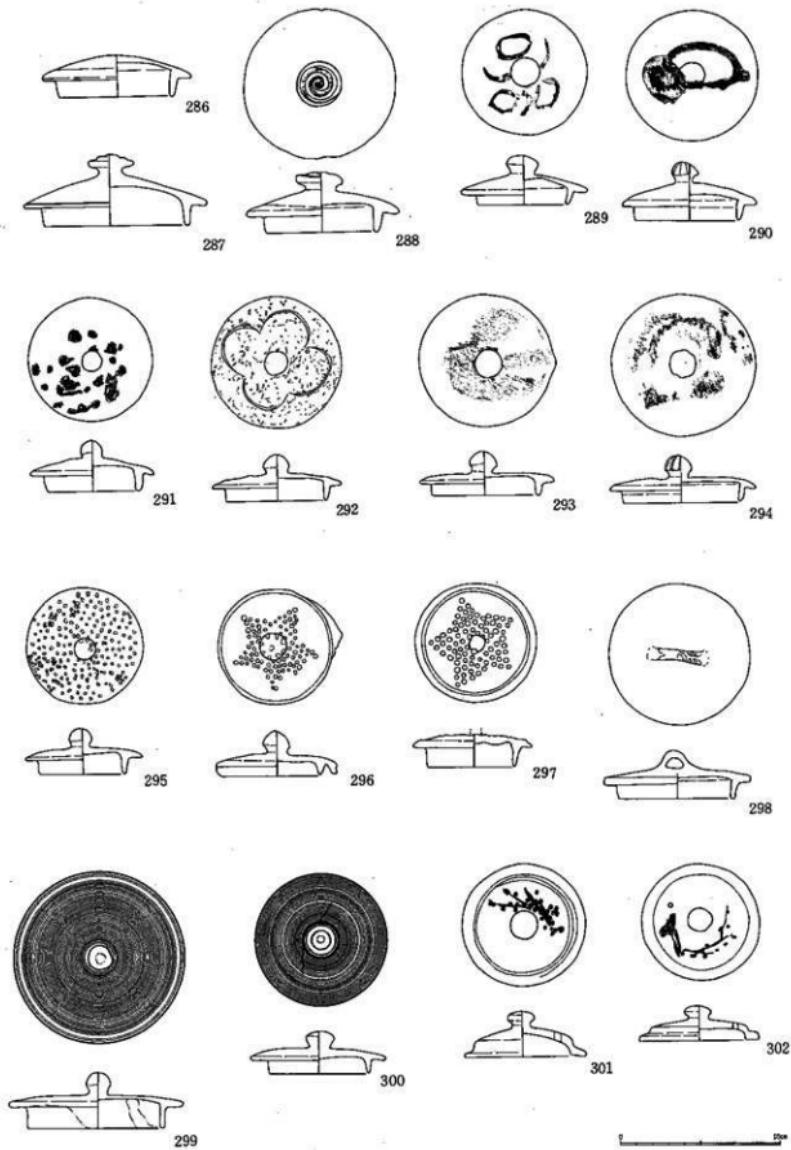
282



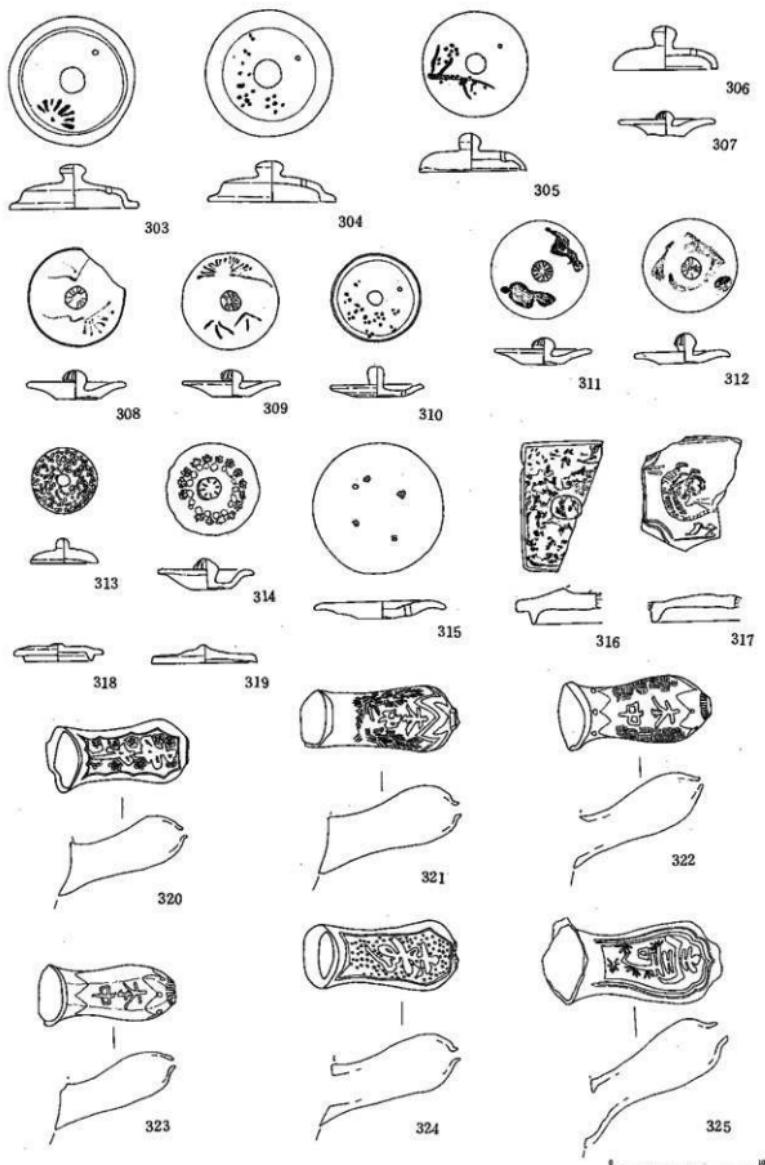
285



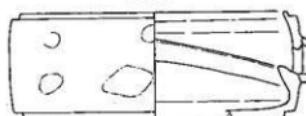
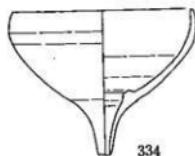
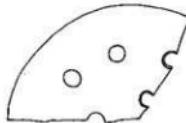
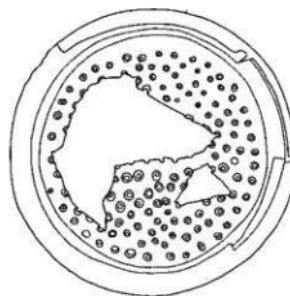
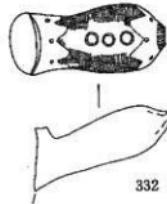
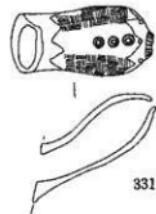
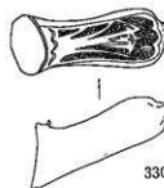
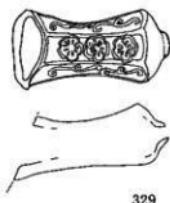
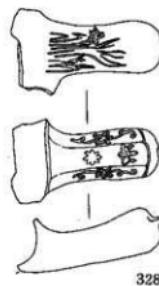
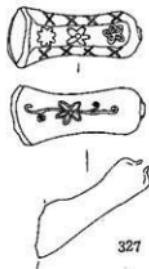
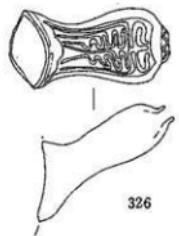
第41図 灰原出土遺物(1)



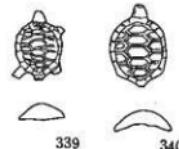
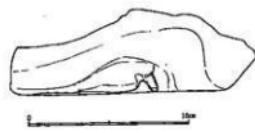
第42図 灰原出土遺物(18)



第43図 灰原出土遺物(II)

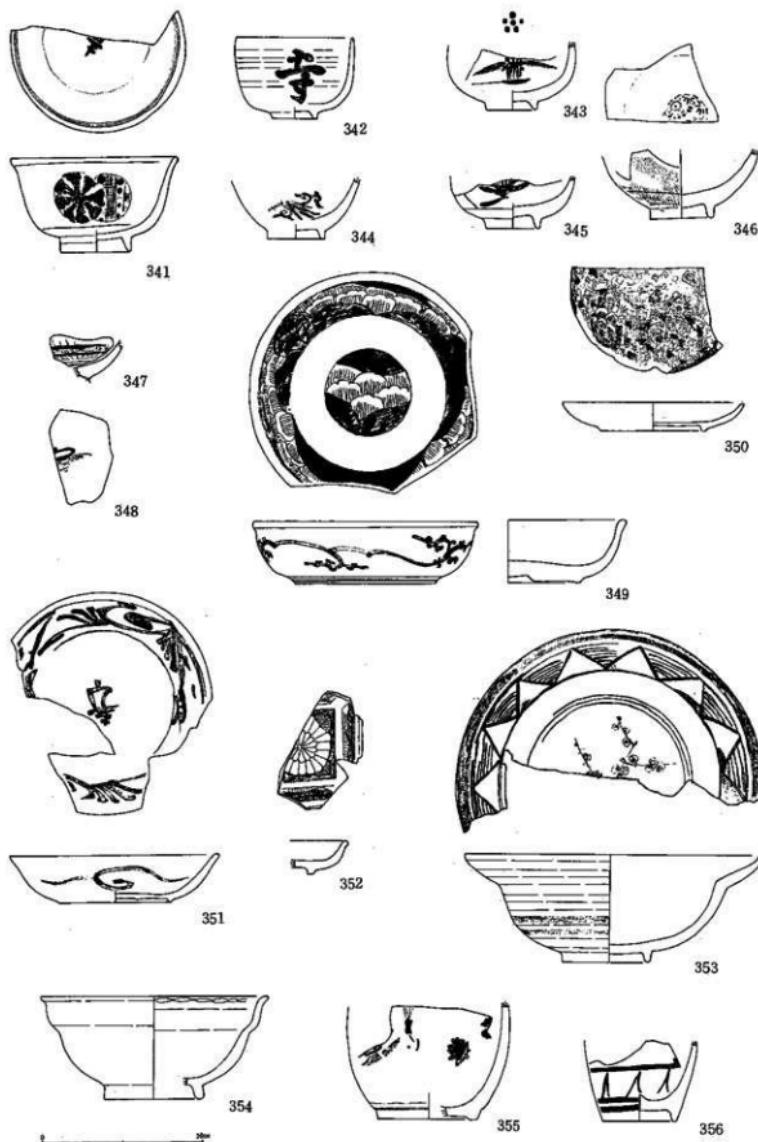


333



340

第44図 灰原出土遺物(2)



第45図 灰原出土遺物(2)



357



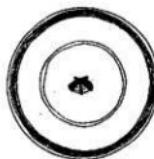
359



360



358



361



362



363



364



365



366



367



368



369



370



371



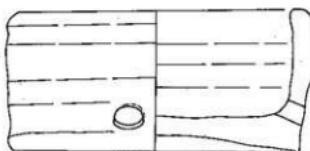
372



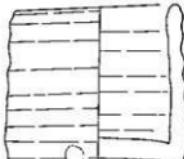
373



374



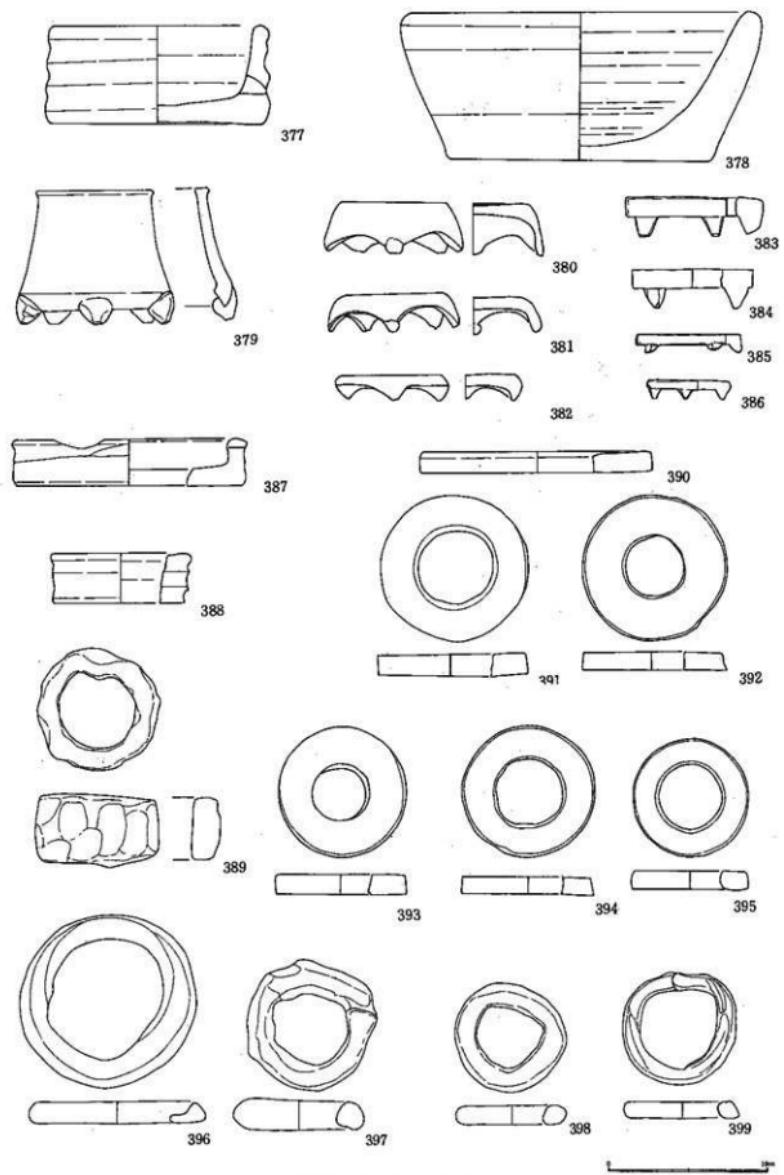
375



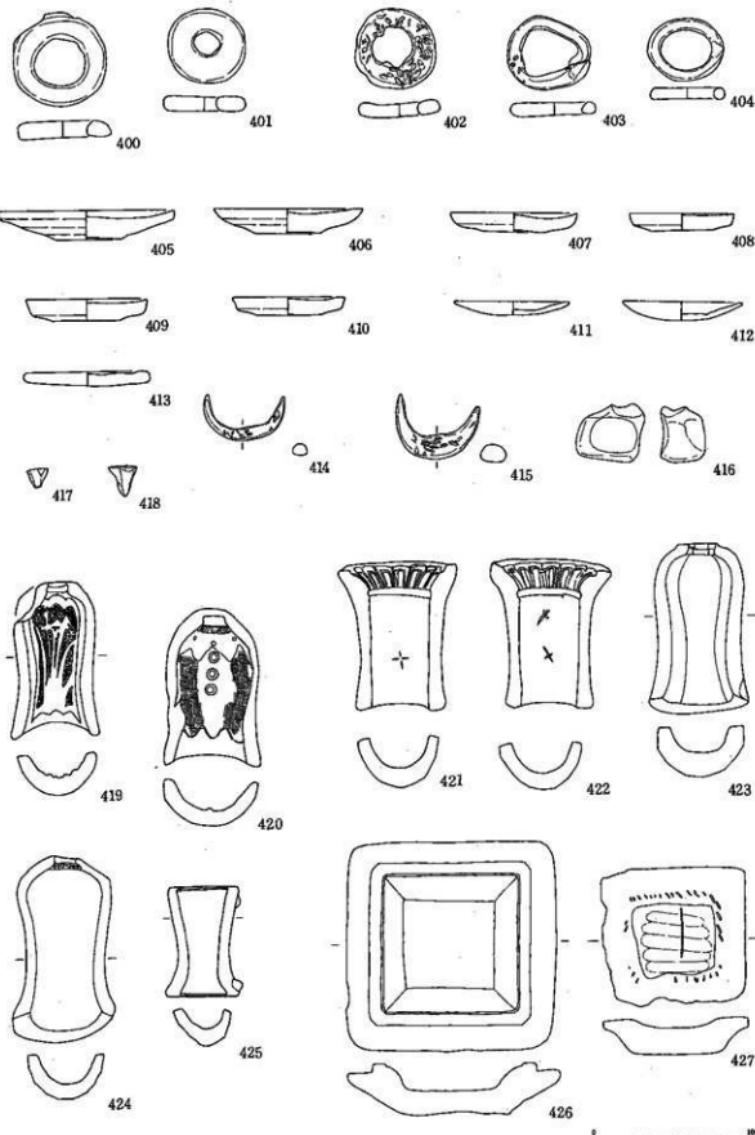
376



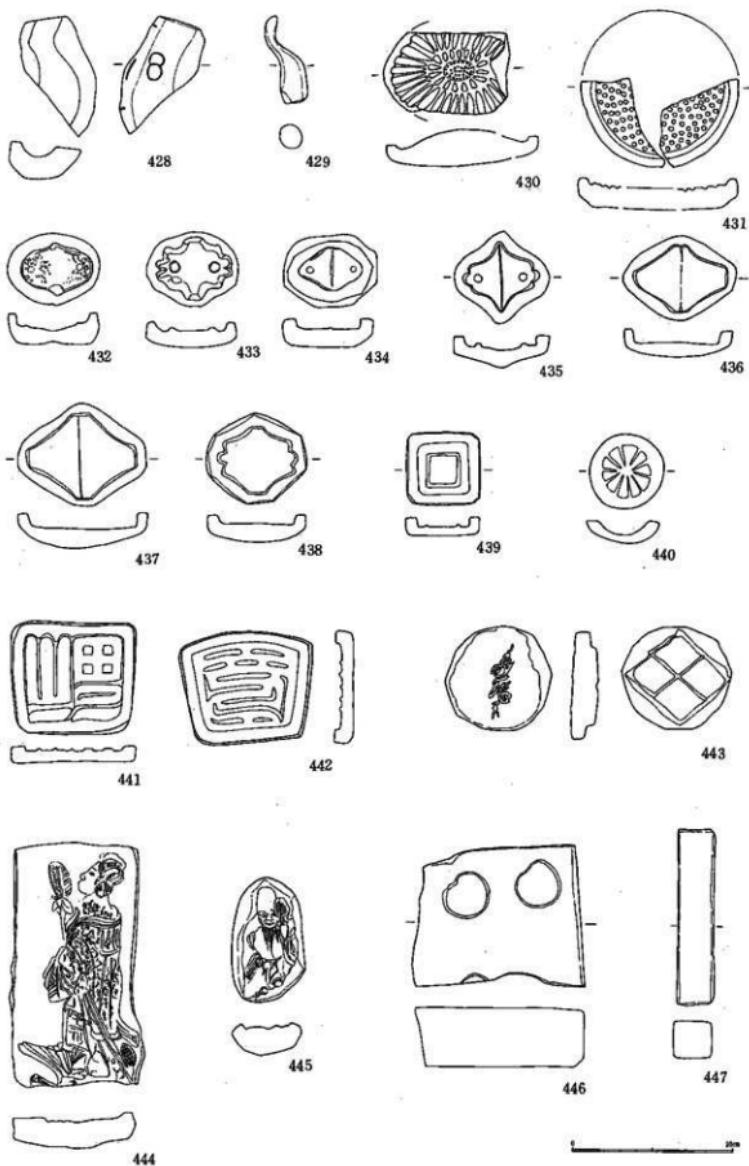
第46図 灰原出土遺物(2)



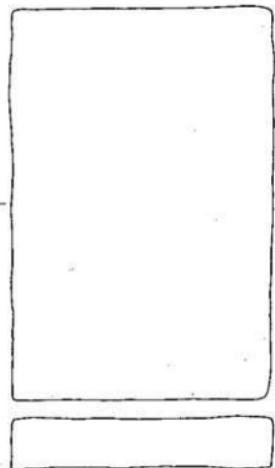
第47図 灰原出土遺物(2)



第48図 灰原出土遺物(2)



第49図 灰原出土遺物(2)



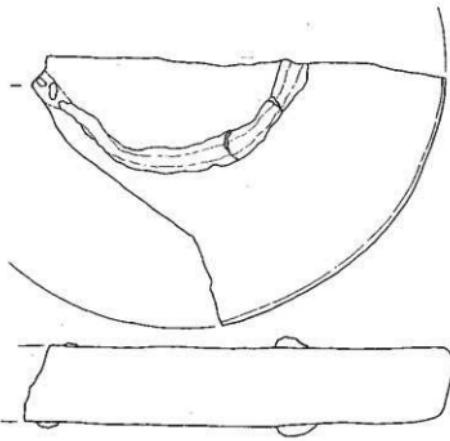
448



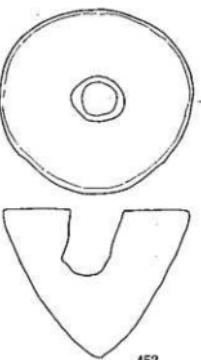
449



450



451

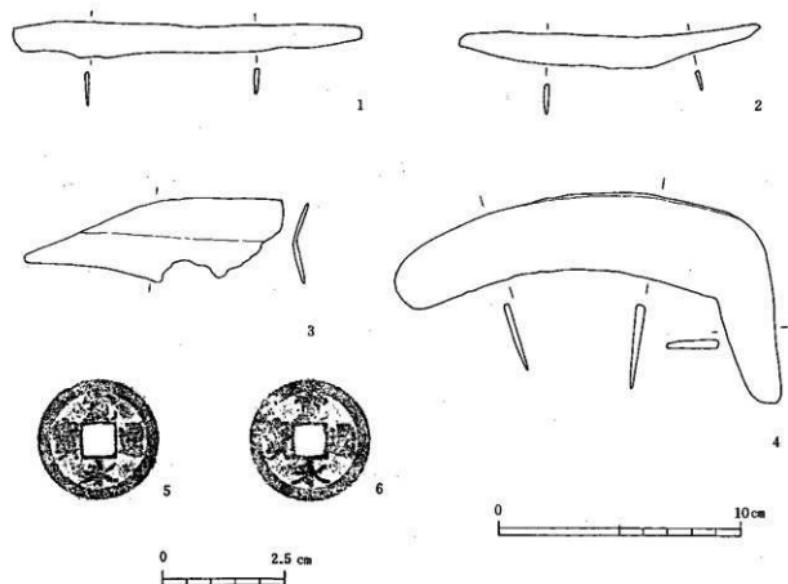


452

第50図 灰原出土遺物(2)

### 鉄製品・銭貨

灰原から 4 点の鉄器が出土した。いずれも鏽に覆われ、かなり腐食が進んでいる。1・2 は刀子で 1 は刃部をわずかに欠損している。3 は断面が「へ」の字形を呈した薄い作りである。4 は完形の鎌で刃部先端は丸味を帯びている。5・6 は寛永通寶である。



第51図 灰原出土の鉄製品・銭貨

## 第IV章 考察

### 1. 遺構の場所と変遷

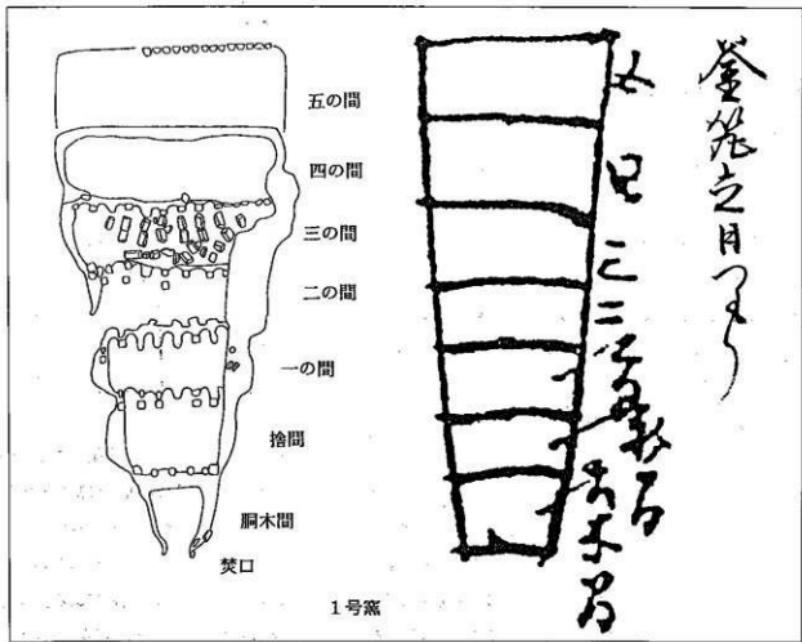
和兵衛窯の発掘調査で検出された遺構は、登窯2・工房1・土坑6および灰原である。これらの遺構は小範囲に密集して遺存しているが、当時の記録や遺構の重複関係からその前後関係をとらえることができる。

遺構の重複関係が認められたのは、1号窯と6号土坑である。1号窯の4室と5室の北壁寄りの床下に6号土坑が発見されている。1号窯4・5室の床はしっかりとおり乱れた様相ではなく、1号窯廃絶後に6号土坑を構築したとは認められないことから、6号土坑の廃絶後、その上部に1号窯を構築したものと考えられる。従って、1号窯と6号土坑の前後関係は、6号土坑→1号窯となる。

和兵衛窯に関連する古文書には、天保11年の「新製土焼諸入用扣帳」(熊谷英澄家文書)と天保14年の「瀬戸竈場借地証文之事」(長興寺文書)の2通がある。

天保14年の借地証文からは、三溝九左衛門がこの年の7月に長興寺の土地を借りて窯を築いたことが分かる。添付されている絵図によると、南側には三溝九左衛門の土地があり、その北側に隣接して長興寺の土地がある。ここを借りて窯を築いたことが分かる。今回の発掘調査で発見された遺構の中では位置関係から2号窯に該当するものと考えられる。1~5号の土坑と2号窯には重複関係はない。土坑の重複関係は、1号土坑と2号土坑は独立しており、3・4・5号の各土坑は重複関係にある。地層は搅乱しており前後関係を明確に把握することは困難であったが、3号土坑内からは磁器の一括遺物(110~139)が出土し、土坑上面(4号土坑の範囲)からは大甕(1)が出土し、遺物の様相が異なっている。こうした遺物の出土状態から3号土坑が古く、この土坑を埋めて4号・5号土坑が造られたものと考えられる。また、4号土坑の範囲から出土した大甕は2号窯から出土した破片と接合しているので、4号土坑と2号窯とは時間的並行関係があったものと認められる。このことから3号土坑→4号土坑・2号窯の前後関係が把えられる。

次に、天保11年の「新製土焼諸入用扣帳」に記載されている内容が今回発掘調査された窯・工房等の遺構に関連するものかが問題となる。発掘調査結果と一致する点は、扣帳の中に記載されている「釜筑立目つもり」の図が第1号窯の構造に類似すること、工房の存在が記載されている点があげられる。また、この文書の記載者熊谷直隆の熊谷家では、窯業を行っていたという事実ではなく、むしろ縁戚関係にありまた実質上の經營者である三溝九左衛門の協力者として経理を担当していたのではないかと想像される。文書中の「新製焼物」は磁器のことと考えられ、この磁器が出土したのは3号土坑のみであることから3号土坑と1号窯は時間的に並行関係にある。三溝九左衛門はこの文書に記載されているように天保11年に自分の所有地に1号窯と工房を築き、ここで試行期間を経て、3年後に規模を広げて本格的な操業を実施するにあたり隣接地(長興寺所有地)に土地を借り、大規模な2号窯を始めたのではないかと考えられる。このように天保11年の「新製土焼諸入用扣帳」に記述されている施設は三溝九左衛



和兵衛窯 1号窯の実測図と天保八年文書の図

門所有地で始められた1号窯・工房・3号土坑のことと考えてもよいものと思われる。

ここで1号窯と6号土坑との関係が問題となる。6号土坑は第1号窯より明らかに古い。文書にある天保11年から創業が始まったとすれば、当然その前に陶土や資金等の準備段階の試作期間があったものと考えられる。6号土坑はこの試作に関連する施設であったのではないか。また、6号土坑とともに試作に関連する窯も周辺に存在するのではないかと想像される。このように発掘調査結果と文書から得られた結果を総合すると、「6号土坑→1号窯・工房（3号土坑）→2号窯・4号土坑・5号土坑」という時間的前後関係がとらえられる。

## 2. 窯体構造について

和兵衛窯では2基の登窯が発見された。ともに連房式登窯である。

1号は、胴木間・捨間に統いて焼成室が5室設けられていた。焼成室の幅は、一・二の間が約2m、三の間が3m、四・五の間が約4mで、上部の間になるに従い幅広くなっている。奥行きも一の間から五の間になるにつれて次第に大きくなっているが、1m前後と狭い。狭間は縦狭間構造で、狭間穴は胴木間から四の間まで4・6・7・7・9・12と次第に数を増している。なお、五の間は確認できなかった。

年 代	遺 構 名	出 土 遺 物	特 徴
天保11年 (1841)	6号土坑	陶器のみ ○擂鉢 ○行平 瓶 直徳利 捻鉢 灯明皿 片口	・和兵衛窯の中で最も古い遺構（この土坑に關係する窯も存在する？） ・鉄軸主体の地味な陶器のみ
	1号窯	遺物の出土なし 窯体にエンゴロ使用	・天保11年の文書に關係する窯 ・陶器・磁器を焼成するも磁器は短期間で中止
	工 房	陶器・磁器・窯道具が出土 陶器（○擂鉢 ○行平 ○蓋 灯明皿 徳利 壺 直徳利 壺 磁器（碗）	・天保11年の文書にある工房 ・以後も使用か
天保14年 (1843)	3号土坑	陶器・磁器が出土 陶器（○擂鉢 壺 直徳利 壺 灯明皿 蓋） 磁器（○碗 ○皿 ○直徳利 水滴）	・磁器が主体的に出土した唯一の遺構 ・1号窯での短期間の磁器焼成の授業場所か
	2号窯	陶器のみ出土 大甕（4号土坑と接合） 棚板（「越中森」の刻書）	・天保14年の借地証文の図中にある瀬戸窯場に該当 ・和兵衛窯での主体的な操業窯
	4号土坑	陶器のみ出土 大甕（2号窯と接合）	・3号土坑の上にあり、2号窯と同時期に存在 ・和兵衛窯の廃絶まで使用か
	灰 原	陶器・磁器・窯道具が大量に出土 磁器は瀬戸美濃系のもの	・1号窯の上を中心として大量の遺物が出土 ・2号窯の操業時の灰原か

第3表 和兵衛窯遺構・遺物変遷表

狭間柱は円柱グレ・箱グレが使用され、側壁は箱グレ・掘りグレが用いられている。

2号窯は、胴木間・捨間に統いて燃焼室が7室設けられ、四の間脇に上屋に開通すると思われる柱穴がある。燃焼室の幅は、一・二の間が2.5m、三・四の間が約3m、五の間が3.5m、六・七の間が4mであり、奥行きはともに1m前後である。燃焼室の数、その幅は1号窯よりも大型化している。狭間穴は、胴木間が4、三の間が6、四の間が7、五の間が8、六の間が9、七の間が10あり、上部になるに従い数が増えている。狭間柱には、掘りグレ・箱グレ・棚板・エンゴロウなどが使用され、側壁も狭間柱と同様の材料によって構築されている。

2基とも縱狭間構造を成すこと、狭間・側壁に箱グレ・掘りグレ・エンゴロウを使用している点などを持てして指摘できる。縦狭間構造は瀬戸・美濃地方に通有の構造とされているが、信楽地方にも存在するようであり、後述するように陶器の焼成方法が素焼きと本焼きとの二度焼きによっており瀬戸・美濃地方とは決定的に異なることから、和兵衛窯の築造に携わった職人（窯の築造も和兵衛か？）は信楽と関係のある人物であった可能性が強い。このことは後にこの地で作陶した中川松助や奥田信斎が信楽出身であったことを考え合わせると誠に興味深い。地理的に近く、この地方にも馴染みの強い瀬戸・美濃地方の職人を招致せず、遠く信楽出身者を招いたことも洗馬焼の性格を考える上で重要な点である。また、この地に窯業を始めた三溝九左衛門がなぜ信楽から職人を招致したかも興味がそそられる。

いずれにしてもこの2基の窯は洗馬焼発祥の謎を解き明かす鍵を秘めていることに間違いはない。今後の研究の深化が望まれる。

### 3. 製品の特徴と変遷

#### (1) 製品生産の時間的経過

和兵衛窯における製品の生産にどのような経過が認められるかを、前述の遺構の前後関係を基に考えてみたい。

今回の調査で、時間的に最も早い時期の遺構は6号土坑である。ここから出土する遺物は陶器に限られ、磁器の出土はない。釉薬は、鉄釉を主体とし、他の遺構からは鉄釉の他に灰釉・長石釉など多種の釉薬を使用した陶器が出土することとは対照的で、比較的地味な色合いの製品を生産していたことが分かる。6号土坑の遺物は和兵衛窯の最初期の様相を良く示している。

この6号土坑の次に位置づけられるのは1号窯と工房、そして3号土坑である。1号窯には出土遺物がほとんどなく、また、工房は2号窯の時期まで工房として機能していたことが考えられるため、ここからの出土遺物は時間的に長期間にわたることが考えられる。そのため1号窯・工房ともに6号土坑の次の段階の様相を覚えるには不十分である。このため6号土坑の次にあたるものとして3号土坑の出土遺物が重要視される。3号土坑では、陶器と磁器が出土しているが、量的には磁器が多い。陶器には、碗類・鉢・徳利などがあり、鉄釉のほかに灰釉を施したものも認められ、釉薬にも幾分多様化が見られるようになる。磁器は、碗・徳利・油壺・水滴などの種類がある。量的には碗・徳利が主体をなしている。陶器では量的に少ない碗類が多いこと、また、陶器には全く出土例のない油壺や水滴などの特殊な製品が磁器で造られている点に特徴が認められる。天保11年の文書に「新製焼物始候」とあるので、この3号土坑出土の磁器は天保11年に和兵衛が始めた新製焼物（磁器）であったものと考えてよいであろう。この磁器は、おそらく同時期に存在したであろう1号窯で焼成されたものと考えて間違いない。しかし、後述するように3号土坑出土の磁器は、軟質で磁器とするには不十分なものであり、また、磁器の出土は3号土坑に限られ、しかもその出土量は決して多くはない。おそらく磁器としての商品価値はなく、それゆえに程なくして生産は中止されたものと思われる。

磁器の制作が中止された後の和兵衛窯では、陶器の生産に重点がおかれる。3号土坑の次には2号窯や4・5号土坑が位置する。しかし、2号窯・4・5号土坑からは遺物の出土が少なく実態は今ひとつはつきりしない。しかし、1号窯の上部には膨大な量の陶器及び窯道具が山積していたが、2号窯の上部にはわずかな量の陶器しか出土していない。おそらく一時は2号窯と同時に使用していたであろう1号窯もやがて廃絶し、2号窯からの不良品の投棄場所（灰原）と化していくのであるまい（注1）。この灰原から多種多量の陶器が出土し、各器種の多様化と洗練度、釉薬の多様化など和兵衛窯が営業的にも採算がとれたことを示している。この2号窯と4号土坑から出土した和兵衛窯唯一の大壺は、成形は稚拙であるが灰釉に長石釉を流し掛けた様相は、以後の洗馬焼で主流をなす大壺・大徳利などの大

形製品のはしりをなすものとして重要である。和兵衛窯の成功は、この洗馬の地に焼物の伝統を根付かせる大きな契機になったことは間違いない。

和兵衛窯では、当初、試行期間ともいえる地味な陶器を制作していた段階（6号土坑）、陶器と磁器を制作する段階（1号窯・3号土坑、天保11年）、そして、多種多様な陶器を本格的に生産した段階（2号窯・4号土坑・灰原、天保14年以降）の3段階がとらえられ、それぞれの段階で少しずつ異なった製品が制作されていたといえる。

（注1）1号窯の上部に後の上条窯の製品を投棄したとの言い伝えがあることをかつて上条窯を経営していた上条家の上条卯太郎氏からうかがったことがある。昭和19年に死去した卯太郎氏の父親がこの地に自宅の敷地内にあった上条焼を投棄したと聞いたというものである。上条宅に保管されている上条焼を参考に、今回の発掘調査で得られた陶器類とを比較したが形態・釉薬の状態に差が認められること、また、工房からの出土遺物と灰原からの出土遺物との間に差は認められないことから混入があるとしてもごく僅かなものであったと言え、出土した大半の遺物は和兵衛窯での製品と考えても良いものと思われる。

## （2）遺物の特徴

### 1) 陶器

和兵衛窯の廃絶時期を示す資料は今のところ見当たらないが、時期的には長期間に渡ったものとは考えがたく、長興寺にある安政6年（1859）銘の伏牛の作者とされる中川松助が洗馬に来て制作を開始する前後には廃止されていたものと考えられる。それは、中川松助については幾つかの文書史料があるが、これらの史料の中に時間的にさほど離れていない和兵衛の記載が全く見当たらないこと、長興寺から借地した三溝九左衛門の子孫に陶器生産の伝承がなく今まで未知の窯であったことなどを考慮すれば、この窯が長期間営業されたものではなく比較的短期間に廃止された窯であったことを示してよい。したがってこの和兵衛窯から出土した陶器・磁器は天保11年から短期間の間に制作されたことになり、19世紀中頃のこの地域の陶器・磁器の好例といえる。

和兵衛窯の陶器は、多器種あるがいずれも本焼き前に素焼きしている点に特徴がある。各器種とも素焼きのものと釉薬を施釉したものが出土地でいるので、器種によって焼成法に差があるのでなく、全器種とも素焼きし、その後に絵付け・施釉され、本焼きされている。こうした2度焼きは瀬戸美濃では見られない技法である。信楽系の技法とも考えられる。

各器種ごとの形態的な特徴、その制作技法や釉薬の詳細は遺物の項で述べているので繰り返さないが、大雑把に釉薬を見ると、碗類・捏鉢は灰釉が、行平・土瓶・擂鉢・灯明皿は錫釉が、花瓶類は鉄釉が施されることが多い。

洗馬焼では、従来、行平の把手の文字によって窯を識別していた。例えば、「本上」は山崎窯、「寿」は上条窯というように、○○窯で生産された行平を識別するには書かれている文字によっていたのである。今回の和兵衛窯では、「本中」「寿」があり、この窯の特徴といえるかもしれない。

洗馬焼では、今まで残っていた大徳利・壺・壺・火鉢など釉薬がたっぷり施された美的に優れた焼物が洗馬焼であると考えられてきた。しかし、和兵衛窯の発掘では今まで知られていなかった灯明皿・行平・擂鉢など当時の人々にとって必需品であった焼物ばかりを生産していたことが明らかとなつた。洗馬焼の実態はこうした日常雑器を主とする焼物であったのである。

## 2) 磁器

洗馬焼の窯で磁器が生産されたことがあった、これは今回の発掘で初めて明らかにできた成果である。3号土坑にのみ出土するところからみて生産の主体とはなりえず廃止されている。

出土した磁器は、胎土が悪く、また、焼成温度が低かったためかガラス質とはなりえず軟質である。出土する器種は、碗・徳利を主体に陶器には無い油壺や水滴が少量ではあるが存在する。呉須による植物・幾何学文などの絵つけは達者である。

長野県における江戸時代の磁器生産の窯には、須坂焼・藤沢焼・風越焼が知られている。各窯の創業は、須坂焼が嘉永6年（1853）に廃窯した吉向焼を引き継ぎその弟子達によって5年間焼かれている。藤沢焼は安政5～6年（1858～1859）に、また、風越焼は嘉永元年（1848）頃始まっている。こうした長野県下での磁器生産の開始年代を見ると和兵衛窯の天保11年（1843）という年代は早い時期でもあり、また、この頃から一斉に各地で磁器生産が始まっているところを見れば地方窯業の大きな動きの中での磁器生産開始であったことがわかる。

## （3）和兵衛窯と周辺遺跡との器種構成

和兵衛窯から出土した陶器・磁器は膨大な量である。陶器・磁器・土器の種別を考えずこれらの破片で個体数の判別が可能な口縁部と底部の数量の分析から個体数を算定したものが4表である。器種的には焼物で日常に使用するほとんどのものを網羅していると言ってよいが、量的にはかなりの片寄りを見出しができる。遺構別に分類されているが、総体的に器種構成をみると、器種を明確にできない蓋類を除くと行平1923個体・徳利類が1773個体と圧倒的に多く、次いで壺・壺類・擂鉢が600～700個体、そして灯明皿・油受皿がそれぞれ300個体、あとは碗類・片口・花瓶・皿類が100～200個体となっている。捏鉢や鉢類は少なく、香炉・土鍋などはさらに少量である。

生産地である和兵衛窯での製品としては、とりわけ徳利・壺・擂鉢・灯明皿の多さが目立つ。そして、壺・壺も大形品は少なく、全器種とも小形品を主体としている。

では、消費地での陶磁器の使用状況は発掘調査が実施された遺跡ではどのような結果が得られているか。松本平における近世末期の町屋ないし住居の発掘例は極めて少ない。近時、松本市で町屋の発掘がさかんに実施されており、正式の報告が待たれる。ここでは千見遺跡の報告書で市川隆之氏が行った器種構成の分析結果を参考にして和兵衛窯と対比してみたい。

18世紀の千見遺跡4期では、碗82%・皿13%・徳利5%・18世紀後半の吉田川西遺跡整地下では碗37%・皿24%・鉢16%・徳利2%・擂鉢8%・灯明具6%という構成を示している。19世紀では、その前半の千見遺跡5期では碗58%の他は皿・徳利・仏具・擂鉢・調理鉢・貯蔵具が各6%、秋葉原遺跡

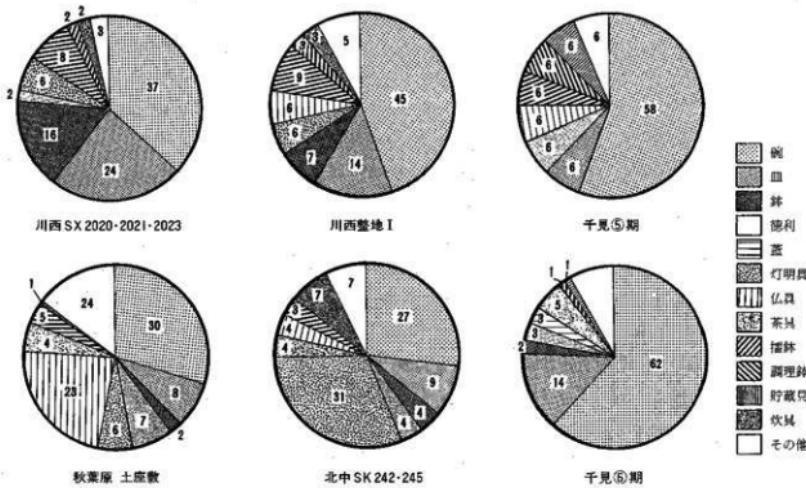
	碗類	皿類	灯明皿	灯明受皿	钵類	捏鉢	擂鉢	片口	香炉	火入
1号窯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2号窯	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
工房址	17(3)	8	13	21	3	0	73	3	0	2
1号土坑	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0
3号土坑	24(23)	2(10)	0	8	2(4)	1	33	4	0	0
6号土坑	22	8	1	9	0	3	74	4	0	2
灰原	139(5)	69(7)	261	282	62	12	428	181	15	77
計	172(31)	87(17)	275	320	67(4)	27	608	192	15	81

	植木鉢	火鉢	焜 炉	七 壺	七壺部品	甕・壺類	大 甕	德 利	小 瓶	髮油壺
1号窯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2号窯	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
工房址	0	0	0	2	2	11	0	26	0	0
1号土坑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3号土坑	1	0	0	0	0	18	0	16(40)	(11)	(3)
6号土坑	0	0	0	0	0	4	0	11	0	0
灰原	10	1	2	8	1	77	0	1720	0	0
計	11	1	2	10	3	110	1	1773(40)	(11)	(3)

	仏花瓶	花生	培 烙	土 鍋	行平(把手)	瓶	水 滴	乘 煙	茶こし	漏 斗
1号窯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2号窯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
工房址	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0
1号土坑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3号土坑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6号土坑	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0
灰原	80	0	6	5	1158	1	0	3	0	1
計	83	6	6	5	1158	1	(12)	3	1	1

	餅器口	蓋 類	合 計
1号窯	0	0	0
2号窯	0	0	2
工房址	0	85	260(3)
1号土坑	0	0	10
3号土坑	0	14	103(103)
6号土坑	0	17	161
灰原	1	2418	7018(12)
計	1	2534	7554(118)

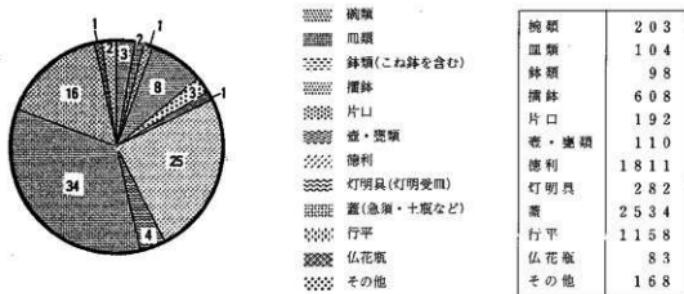
第4表 和兵衛窯遺構別陶磁器出土個数一覧表



周辺遺跡の器種構成(市川:1994より)

土座敷では碗30%・仏具23%・皿8%・徳利7%・灯明具6%、北中遺跡では碗27%・灯明具31%・皿9%・炊具7%・他に鉢・徳利・茶具・仏具が各4%となっている。これらの遺跡では、墓守りの庵ともいわれている秋葉原遺跡土座敷などその遺跡の性格によって出土する焼物器種構成に差が生じる可能性もあり、また、出土器種や量が当時のその遺構で使用されていた実態を表しているかも検討の余地がある。しかし、発掘調査の結果からは、18世紀から19世紀前半にかけて松本平では碗・皿・徳利が多く、擂鉢・調理具・貯蔵具などは少数であったことがうかがえる。これに遺跡によっては灯明具・仏具が加わる構成をとっている。

このような周辺遺跡での出土例と和兵衛窯出土例とを比較するとき、両者の器種構成にはかなりの差



和兵衛窯出土の器種構成

があることが分かる。すなわち、和兵衛窯では行平・擂鉢・壺・甕などの調理具や貯蔵具が圧倒的に多かったのに対して、碗・皿は少量であった。ただし率の高い徳利の占める割合は和兵衛窯でも他遺跡でも類似したあり方を示している。今ただちに和兵衛窯の製品がこれらの消費地にもたらされたとは断じることはできないが、和兵衛窯でもこうした消費地での需要の多い器種は把握していたであろうから当然需要の高い器種の生産に重点が置かれてしかるべきであると思われる。しかし、実際は和兵衛窯と消費地との器種構成は顕著な差を示しており、こうした両者の差は何を示しているのであろうか。

このような一般的な遺跡の発掘調査の結果は、果たして当時の生活における焼物の取り扱われ方を忠実に示しているのであろうか。近時、近世村方帳簿の「拂物帳」や「分散帳」から家具家財の所有形態から当時の生活実態を究明しようとする研究が進められている。長野県内では、尾崎行也氏の研究や長野県史・諏訪市史などでも同様の研究成果が掲載されている。これらの研究をまとめたものが小泉和子氏の「家財目録からみた暮らしの道具」(小泉1994)である。長野県内の資料を積極的に取り上げた研究結果を陶磁器に関して要約すれば、5表のようになる。最上層農民から中下層農民まで所有陶磁器の数量には差があるが、多くの碗・皿・徳利などの供膳具、少量の擂鉢・片口・行平・壺・甕などの厨房具が所有されている。文献上から見た碗・皿・徳利が多く、擂鉢・行平等が少ないという農家の家財保有数の様相は、消費遺跡の発掘調査から得られた陶磁器の所有数の結果と良く一致している。文献上も発掘結果も当時の陶磁器の所有状況を良く示しているといえよう。

	厨 房 具	供 講 具	照 明・暖 房	そ の 他
最 上 層 農 家 4 戸	行平2 壺2 水甕1 擂鉢2 片口1	椀216 壺21 平34 茶碗171 皿426 どんぶり9 沙鉢2 鉢8 瓢4 茶壺2 入れ物6 茶びん1 水こぼし15 壺19 水入れ壺2 おはち3 銀子2 猪口118 斧洗2 徳利3	行灯15 掛け灯2 油徳利1 火鉢10	花活8 香炉5 茶道具1 茶壺4 灯明1 香立1
上 層 農 家 3 戸	ほうろく1 壺2 滅手油壺1 土甕2 鉢類5 すり鉢2 こね鉢1 片口4 醤油徳利2 茶碗入物1	壺14 茶碗類18 皿類34 皿1 猪口8 銀子3 徳利2	行灯12 皿油壺2 油徳利1 火鉢3	花立1
中 下 層 農 家 18 戸	ほうろく1 壺3 鉢類8 すり鉢6 片口1 七厘2	椀21 茶碗15 小鉢1 皿13余 盆・猪口18 徳利7 土甕2 急須1	行灯5 火鉢3	花立2 手水鉢6 壺黒壺1

第5表 文書史料より見た近世農家の焼物所有状況（小泉：1994より抜粋）

したがって生産場所である和兵衛窯と消費地との器種構成の差、すなわち和兵衛窯で少量であった碗・皿類の不足分は他の窯場からもたらされていたことを示していい。県内の他の窯場でも、「とくに、壺・かめ・鉢・片口・とっくりなどがいして大型器が多く、皿・茶碗類などはすくない」(古川1899) ことから考えれば皿・碗などは県外、例えば瀬戸美濃あるいは肥前などからもたらされていたとも考えられる。

#### 4. 関連する古文書と和兵衛窯

和兵衛窯に関連する文書は2通ある。天保11年の「新製土焼諸入用扣帳」(熊谷英澄文書)と天保14年の「瀬戸竈場借地証文之事」(長興寺文書)である。

##### (1) 「新製土焼諸入用扣帳」について

いくつかある洗馬焼窯に関する文書の中で現在知られている文書中最も古い年代のものである。この文書が和兵衛窯に関連するものであることは遺構の場所と変遷の項で述べた通りである。この文書には窯に関する様々な興味深い記述がみられるが、前後の乱丁があったり、意味がはつきりしない部分もあったりして現時点では全ての内容について紹介できないため、幾つかの記述を取り上げてその内容を検討してみたい。なお、全文を附してあるので参照していただきたい。(①②…は文書に附してある部分を示している。)

**年代・名称** ①表紙には天保11年の年号とともに、「新製土焼諸入用扣帳」との記載がある。この「新製土焼」は、焼物の種類を示しているものと考えられ、この和兵衛窯で何が生産されていたかを語っている。江戸時代の陶磁器生産を表す言葉として、陶器を「本業焼」と呼び、「本業焼」は土焼(陶器)を意味していた。一方、磁器は新しい焼物という意味で「新製染付焼」ないしは「新製焼」と呼ばれていた(井上1992)。表紙からは陶器・磁器の両方を生産していたことがうかがえる。このことは次の「新製焼物始候事」という磁器生産の開始をうかがわせる記述とも一致している。9月15日に和兵衛という陶磁器制作の職人を招致して陶磁器の生産を始めたことを示している。招致したのは「借地証文」に名前の出てくる三溝九左衛門であったと想像される。今回発掘された登窯を和兵衛窯としたのもこの文書を参考にして名づけられたのである。

**窯業の施設** ②③④和兵衛窯に関連して登窯・工房・物置場などの施設に関する記述がある。④の「釜筑立目つもり」は、登釜の構造・規模の見積りと考えられ、附されている図からは胴木間・捨間・一の間~五の間まである窯の築造を予定していたことが分かる。この構造は発掘調査によって発見された登窯の中では1号窯の構造と一致している。1号窯も胴木間・捨間・一の間から五の間まである連房式登窯という構造が明らかとなっている。この記述の次に、「六拾人 職人三人二面廿日」とあるから窯築造には延べ60人の職人が必要であったことが分かる。この後の「棟木工」は、工房の建築を示していよう。なお、②に大工や豊・板・障子などの記述がみられるが、工房ないしは職人の住まいに関連したものであろう。「武百文 すやき窯」とは値段からして登窯ではなく煮炊きの釜を指していよう。④には、「釜屋」「ゑ五ら屋」とあり、窯の覆屋?やエンゴロウの置場(小屋)があったことが知られる。

**職人の構成** ④「職人 一ろくろ 二丁半 一土をし 半 一えし 一人 一小ばたらき ひとり」とあり、製品の製作にはロクロ・土練り・絵師・小働きが必要であったことが分かる。この給金に51両2分が支払われている。また、③には、陶土である「石」掘りの人々や⑤には臨時として焼成のための「木わり」も雇われていることが記載されている。焼物の製作に携わる人々には、実際に

土を練り・ロクロを回し・絵付けをして製品を作る職人のほかに土を掘り・それを運搬し、また、焼成のための薪を用意する者など多数の人々が係わっていたことがこれによって知ることができる。

製品の製作 製品の製作には前述した職人の構成でどのような日程で製作がおこなわれていたかが⑨に記述がある。片口と思われる「次出し」を10,000個製作するのに48日間がかかっている。ロクロにより10,000個の片口を成形するのに25日、素焼きに2日、施釉・絵付けに各5日、本焼きに2日、窯への出し入れに各2日、製品を壊れないように包むのに3日、そして、休日が2日とられ、計48日がかかれている。製品の製作には、統いて記述のある「え具（絵付けの釉薬）」「くすり（釉薬）」「薪木」「土」「トウ具（道具）」が必要であった。こうして製作された片口は、一個1分5厘の経費がかかっている。

製作には前述の薪の他に、③の地元産の「石」（陶土のことと思われる）と④の木曾からの「石」とを混入した陶土、④の「粉」（釉薬）、⑤の他所から仕入れた「こん上」（絹青の顔料）などの記載がある。

⑩では、エンゴロウの製作の記述がある。エンゴロウ11,000個の製作に、材料として松の木が280駄、土のスイヒ（土こし）に40人、土ねり（土をし）に40人、エンゴロウのロクロ成形に60人がかかり、20日がかかっている。製作費用は、賃金・材料ともで6両2分2朱がかかっている。

製品の製作 ⑧⑨⑩に製品名の記述がある。これによれば、「次出し」（片口）・「りん丸」（？）・「井」・「なろ茶」（奈良茶碗）・「かん徳利」・「水入」（壺・甕）・「皿」がある。発掘で出土している器種はこれよりはるかに多種類である。天保11年の文書記録の後にこの記載以外の器種が生産されたのかとも想像される。

これらの製品は⑦および⑩に見られるように地元ないしは周辺地域に小売もされ、また、かなり多くが松本に売られたことが分かる。今後、消費地での和兵衛窯の製品の検出により販路も明確になろう。

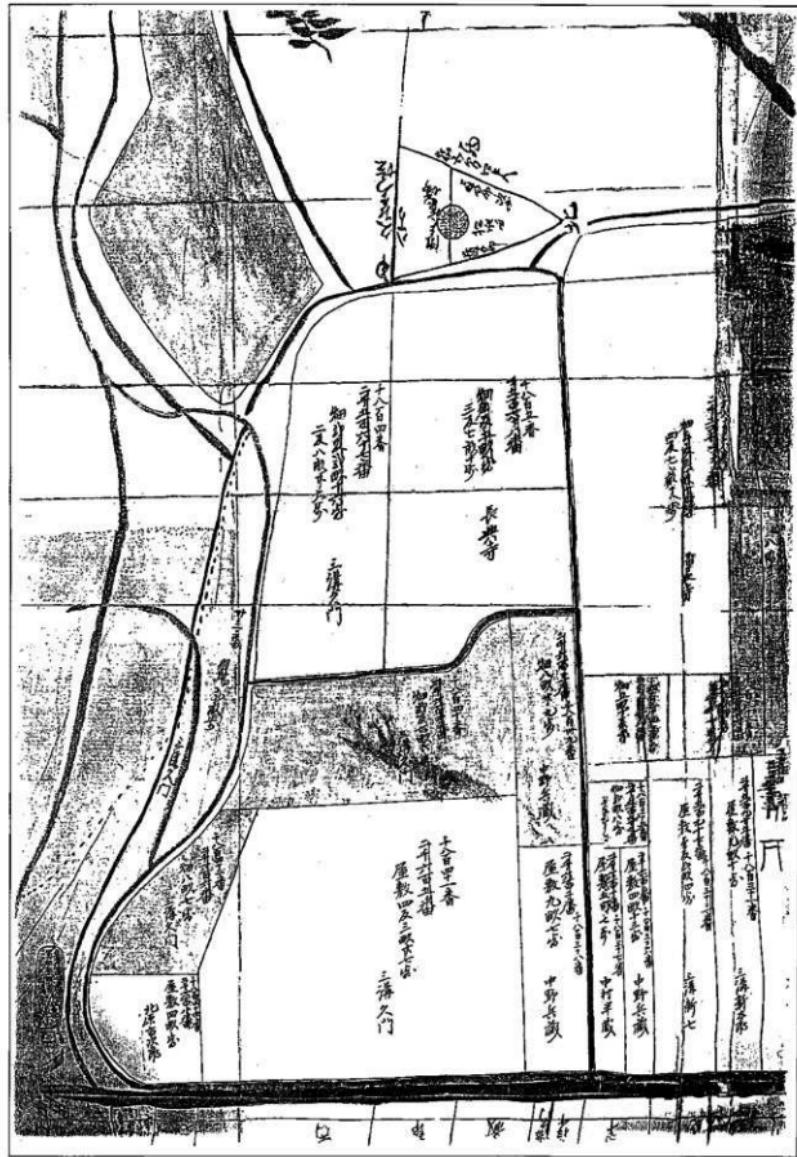
尾張との関係 文書の中に尾張との関係を示す記述がある。⑪に、「白粉 名古屋 鉄方堀高野屋 同 本町三丁目 ほり川筋麻屋」とある。高野屋ははっきりしないが、麻屋は「清洲越し」依頼の古い商家で、染付焼の蔵元の一人となっている著名な商人である。ここから釉薬の原料である「白粉」（珪石）を仕入れていたものと考えられる。和兵衛窯の取引先がこの記述によっても分かる。

多彩な記述のある文書であるが、言葉に不明な事項も多く、また、統一的に順序立てて記載されておらず、しかも備忘録のため記述が断片的であったりして、現在その全てにわたって考察を加えるまでは至っていない。今後の検討・分析を待ちたいと思う。

## (2) 「瀬戸窯場借地証文之事」について

「所入用扣帳」の3年後の文書である。和兵衛窯の出資者であり世話人である三溝九左衛門が自分の所有地の北側の隣接地を長興寺から借地した時の証文である。証人の小野沢村（現朝日村）祐八は如何なる人物であるか特定できていない。

この証文には、添付されている図中に「瀬戸窯場」があり、「瀬戸商売仕候ニ付借地仕候」とあるようにここで陶器を焼成製作し、販売するために土地を借りたことが分かる。明治7.~8年の田畠



信濃國筑摩郡本洗馬村十四番中町耕地より作成

の絵図とこの証文の図とを組み合わせてみると、三溝九門（九左衛門）は畠地から山林にかけて一統に所有しており、その北側の隣地は長興寺の所有地であったことが分かる。こうした土地の所有状況と発掘調査によって得られた遺構の配列状況・出土遺物の状況を総合的に組み合わせると次のような推移が復元できる。

三溝九左衛門は、天保11年に自分の所有地（山林）に1号窯を築き、その下位の山林と畠地の境界付近に工房を建設した。ここでは和兵衛を招致して陶磁器の生産を始めた。しかし、磁器については思わしい結果が得られず間もなく陶器のみに生産をしほった。ここで製品は小売するとともに松本方面にも販売されていた。やがて3年後、本格的に瀬戸商売をするため隣接地を借地し規模の大きな2号窯を築き規模の拡大化を図っていった。この仕事には協力者として祐八や經理を担当した熊谷直隆などがいた。

以上、文書検討から和兵衛窯の諸問題について考えてみた。現時点では時間的制約もあり多くの成果を引き出すことができなかつたが、今後、文書史料と発掘調査結果とを結合し、更に研究を深めていけばよりいっそう豊かな和兵衛窯像を描くことができよう。

## 5. 洗馬焼の創業とその窯場

窯を造るには、そのための資金が必要、またそこの土が焼物に適しているかどうかが大切な条件である。洗馬焼の創業については最近発見された天保11年（1843）の「新製土焼諸人用扣帳」（熊谷英澄文書）に、「九月十五日ヨリ和兵衛ト申職人米リ新製土焼物始候事」とあり、発掘された窯跡の創業は天保11年9月15日とされる。今までこれ以前の文書は見つかっていないので、洗馬焼の創業を一応天保11年と考える。そしてこの窯を『和兵衛窯』と名付けた。

創業を天保11年としても、先にあげたように土を調べなければならぬとすればそれ以前から準備があったのではないか、そしてそれはどのくらい前であったか、興味のあることである。これ以前60年ほど前、菅江真澄は天明3年（1783）5月24日洗馬へ来て、次の年洗馬を発ち7月15日「ないをたのみて、度安里於登志（とおりおとし）見に行とて、相道寺村（池田町）というにきにけり。近きころ美濃の国より來けりとて、陶つくりがやどもありけるをへて、云々」（来目路の橋）と書いているが、もし真澄の洗馬にいたころ洗馬で焼物が行われていたなら、焼物に関心のある真澄が書かないはずがない、和兵衛窯は真澄が一年余り過ごした釜井庵の近くであることを思えば尚更である。このことから真澄のいたころには洗馬には窯場はまだなかつたと言つてもよいと思う。

先にあげた窯造りのための資金・土の調査について、洗馬焼より22年ほど後の創業である赤羽焼（辰野町）の文書によれば

取替為証文之事

一 此度我等瀬戸焼商売仕度候ニ付職場地所貴殿持地

御無心候所 金壱両ニ而御可し被下難有仕合ニ

奉存候 年季之儀ハ拾ケ年ニ相定 右年限相立上

ハ不実意無之様仕候 為後日連印仕一札依而如件

元治二年 赤羽村 五右衛門 印

丑三月 元洗馬村 松助

北小河内村 盛右衛門 印

赤羽村 権八 殿 (小松弥助氏文書)

元治二年（1865）丑三月は赤羽焼創業の年である。松助の印がないのは何故か分からぬが、これでみれば明らかに三人の共同企業である。当時洗馬には窯業が行われており、五右衛門・盛右衛門も默知（現土岐市の内）だけでなく洗馬へも土を持って行って試作してもらったと、藤田調査（大正8・9年頃藤田龍洲氏 赤羽焼の起因及沿革）にあり、「非常ナル好結果ナリシ故、洗馬ニ居リシ職工頭江州ノ産松助ナルモノ洗馬ヲ捨テ、來タリ云々」である。また洗馬の松助の出資も相当なもので明治6年の松助への借用証文には74両と記されている。

洗馬の窯場が天保11年に造られたとしても、窯場を造るということはその費用を得ることにしても技術を得ることにしても簡単でないと思う。赤羽焼の文書のようなものは洗馬ではまだ見つかっていない。準備としていつ頃誰がどのように土を調べ、試し焼きは何処で行ったのか興味のある問題である。

先の赤羽焼の文書に出てくる、元洗馬村松助は長興寺蔵の安政6年（1859）瀬戸屋松助の墨書銘のある臥牛の作者である。中川松助とも言い、信楽宮町の人、奥田信斎とは同郷で旧知の間柄で、松助に誘われて信斎は赤羽の窯に来た、明治初年松助は洗馬から赤羽に移り、信斎は赤羽から洗馬に移り窯業を営んだ。この松助はいつごろ、どういう縁で洗馬に来たのか、洗馬焼の創業との係わりはどうなのか、前記の長興寺蔵の臥牛はどの窯場で焼いたのかなど、松助のことについて調べることが必要である。

#### 洗馬の窯場及び近隣の窯場

相道寺焼（池田町相道寺） 明和4年（1767）庄屋、組頭あて許可願い

天明4年（1784）「相道寺村というにきにけり。近きころ美濃の国より来けりとて、陶つくりがやどもありけるをへて一略一」菅江真澄 来目路の橋

浅間焼 松本城主戸田氏が、御庭焼と称して浅間温泉東方に文政3年（1820）作業場を設けて製造したのがそのおこりと伝えられる。

天保15年（1844） 安曇郡寺所の木村小次郎がこの窯を借りている。大正末 魔窯

明治20年松本官窯に分家した木村家は、窯業を家業として現在も続いている。

洗馬焼 和兵衛窯 天保11年（1840）『新製土焼諸人用扣帳』（熊谷英澄文書）「九月十五日ヨリ和兵衛ト申職人來リ新製土焼物始候事」とある。

天保14年（1843）『瀬戸窯場借地証文之事 三浦九左衛門』（長興寺文書）「右絵図面之通瀬戸商光仕候ニ付」とあり和兵衛窯の試し焼きはどこで行ったか分からぬが和兵衛窯の

1840 天保11	新製土焼諸入用扣帳（洗馬谷直隆文書）
1843 天保14	瀬戸窯場借地証文（洗馬長興寺文書）
1857 安政4	南熊井入道焼創業
1859 安政6	瀬戸屋松助作臥牛（長興寺藏）
1865 元治2・慶應1	赤羽焼創業 元治二年丑三月 商売入用帳（辰野町小松弥助藏）
1867 慶應3	8月 戰場不新（普請）控帳（小松文書）
1868 明治1	このころ奥田信斎 赤羽より洗馬へ
1869 明治2	普請控帳 元洗馬松助より 金五十四両毫一朱 銀三匁二分五厘 錢九貢三十六文
1873 明治6	借用申金子証文 金七十両 赤羽村五右衛門 元洗馬村松助殿 (辰野町小松文書)
1876 明治9	長野県町村誌「洗馬村産出陶器一万五千 当国ハ勿論、甲斐・伊豆・駿河・遠江・ 三河及上野・下野・武藏・越後・越中・飛驒へ輸出入」
1885 明治18	奥田信斎 洗馬失踪
1902 明治35. 12. 15	松本・塙尻間 鉄道開通
1906 39. 6. 11	塙尻・反野間
1909 42. 12. 1	塙尻・奈良井間
1912 大正1	山崎窯廢業
1913 大正2	上条窯廢業
1920 大正9	入道焼廢業

「塙尻市誌4 洗馬焼」(中島章二)

成功によって瀬戸商売仕候ための窯場の借地を長興寺へ願い出たものである。

平成4～6年発掘調査済

上条窯 江戸時代末 京都から來た儀十（当主卯太郎氏の曾祖父にあたる）の叔父酒井仲右衛門が、現在の屋敷に窯を設けて焼いたのが始まりで、儀十は元治2年この叔父の二男として入籍、養子となっている。大正2年頃廃窯

山崎窯 上条繁太が焼く、東漸寺付近、繁太は入道焼の田中五右衛門の実弟で山崎家へ養子にいったが事情があって上条氏を名乗る。大正初廃窯

信斎窯 奥田信斎の窯 東漸寺付近 信斎は同郷信楽の中川松助の招きによって赤羽の窯（辰野町）に來て、先に洗馬に來ていた松助を助けた。明治の始め松助は赤羽に移り、信斎は洗馬に移った。明治十八年廃窯

入道焼 田中五右衛門が浅間焼の木村富蔵から製陶を学び、安政4年（1857）創業 大正9年廃窯  
赤羽焼 元治2年（1865）創業

## 第V章 調査のまとめ

近世末期から大正時代初期にかけて操業された洗馬焼は、上条窯・山崎窯・信斎窯など幾つかの窯を総称したものである。信斎窯を除いて現在まではほとんど研究がなされておらずその実態は不明な点が多い。

こうした状況の中で和兵衛窯は、道路建設に係わる緊急発掘調査を契機とした学術発掘調査によって窯・工房等の施設が発見され、大量の遺物が出土し、洗馬焼としては初めてその実態が明らかとなり、多くの研究を深めるための手がかりが得られることになった。

調査の成果は幾つかあるが以下に簡単にまとめておきたい。

- (1) 江戸時代後期から大正時代まで操業した幾つかある洗馬焼の窯としては最初の発掘例となった。また、関連する文書から洗馬焼の中でも最も早い時期の窯であることが明らかとなり、初期の洗馬焼の実態解明に貴重な資料を提供した。
- (2) 発掘調査によって、登窯2・工房1・土坑6が発見され、近世末期の窯業構造の実態が明らかとなった。これらの構造は、重複関係や文書史料からその時間的前後関係を把握することができ、和兵衛窯の発展の様子を跡付けることができた。
- (3) 登窯は、縦狭間の連房式登窯で、製品の焼成にはエンゴロを用いており、その築窯技術は信楽および瀬戸美濃系である。製品の制作技術は素焼き・本焼きの2度焼がなされており、こうした技法は瀬戸美濃系ではなく、信楽系と考えられる。築窯・製品の制作には信楽系の職人が関わったものと考えられる。
- (4) 遺物には、陶器・磁器・土器・窯道具があり、出土量は40万片に達する。陶器は、施釉・絵付けの前に素焼きをしており、その後本焼きされていることに最も顕著な特徴がある。こうした技法は瀬戸美濃には存在しない。器種は多種多様で、焼物による日常雑器は殆ど焼成されていたことが焼成されていたことが明らかとなった。後の洗馬焼に見られるような大型の壺・甕・徳利など全く認められずこの点も特徴的である。この窯で磁器が焼成されていたことは大きな発見であった。磁器生産は、文書から天保11年には開始されており、県下の磁器窯の中でも早いものである。しかし、土・焼成温度など技術的に劣っていたためか短期間に廃止されている。
- (5) 周辺遺跡の調査例および文書史料の比較検討から、碗・皿などは量的に少ない反面、徳利・擂鉢・行平などは多量であるという和兵衛窯の器種構成と碗・皿が多いという消費地での器種構成の差があることが明確になった。
- (6) 関連する2通の文書史料と発掘調査結果との検討から考古学的調査では限界がある年代の決定、関係した人物、流通範囲など和兵衛窯をめぐるより広範囲な問題究明が可能となった。

以上のような多くの成果が得られたが、今後これらの資料を活用し、研究を深めれば、洗馬焼を中心とした近世末期の地方窯業の実態に迫ることができるものと考える。今後の継続的な研究が切に望まれる。

発掘調査には地元関係者、冬期の厳しい状況下での発掘に参加された多くの方々、大量の出土遺物の整理作業に携わった方々に厚く感謝申し上げたい。とりわけ、発掘調査の段階から整理まで何回にもわたって洗馬の地に足を運ばれ、近世陶磁器には全く無知な我々をご指導くださった瀬戸市埋蔵文化財センターの藤沢良祐氏には衷心より感謝申し上げたい。

### 参考文献

- 1982 安藤 裕「しなのの陶磁器」  
1983 田口 昭二「美濃焼」(考古学ライブラリー)  
1985 平林 彰「松本城二の丸御殿跡発掘調査・史跡公園整備」  
1987 藤沢 良祐「本衆焼の研究(1)」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』)  
1988 藤沢 良祐「本衆焼の変遷(3)」(『』  
1989 古川 貞雄「農村手工業の發展」(『長野県史』通史6)  
1990 赤羽 達弘「赤羽焼」(『辰野町誌歴史編』)  
1991 井汲 隆夫「江戸遺跡検出のやきもの分類」  
1991 三村大八郎「陶芸」(『朝日村誌下巻』)  
1992 井上嘉久男「尾張陶磁」  
1993 田口 昭二「美濃窯の焼物」  
1993 中島 章二「洗馬焼」(『塩尻市誌』4)  
1994 小泉 和子「暮らしの道具」(『岩波講座日本通史』13)  
1994 市川 隆之「千見遺跡」(『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書18』)  
1995 尾崎 行也「安永～寛政期佐久郡農家の家具・農具類」(『信濃』44-5)

⑯

武百五十四文

四十六文

三貫武百廿文

十二

井十七

六百五十八文

武百六十

十四

なら茶

武百四十八文

十二

四十七

茶春

武十

(中欠)

十九

メ四貫五百四十一文

金武歩武朱ト

四十一文

百三十毫文

相渡し申候

極月廿八日 権庄

なら

武百

廿

三十

次出し

なし

六十

瀬戸竈場借地証文之事

(中略)

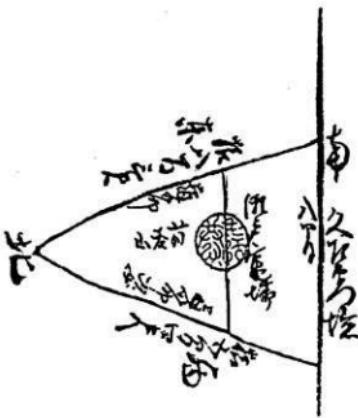
先系 六日 一日 三日

治 簿助 源藏

(ウラ表紙)

熊谷直隆

右繪圖面之通瀬戸商先仕候ニ付借地仕候  
延相達無御座候 然ル起為御年貢年々  
貢年々銀子毫斗ソ 差出し可申候 何等不疑之義等  
差障リニ相成候節者早速取扱可申候  
為後日借地証文仍如件



長興寺様

天保十四癸卯年七月

本人

三溝九左衛門

証人

小野沢村祐八

當時瀬戸竈世話人也

長興寺文書より



一 壱朱ト	一 九百廿一文	一 飯代
一 口朱	一 三朱	一 告外三分
大三十日	六両三朱ト	九百廿一文
武百文	五百六拾三文	和平
内	前々残物	祝儀
老兩	松本什	たひ
武朱	小壳	かし
式朱	同断	か
四匁	百三十三	百
残り色物	五百七	百
水入	八十	百
千七十	百三十三	百
メ	武百二	百
水入	百三十三	百
千七十	武百二	百
メ	百三十三	百
水入	井	百
千七十	りん丸	百
メ	なろ茶	百
水入	かん徳利	百
千七十	メ	百
メ	次出し	百
水入	⑧	百
千七十	メ	百

かん等	外
松本行	⑨
百四十本	かん徳利
式十	次出し
四十七	皿
式百六十	なろ茶
十四	井
十七	かん徳り夫
四ツ	メ四百八十四
二丁半	職人
半	一 ろくろ
一人	一 土をし
三人職人	一 えし
三十二両	一 小ばたらき
十両	一 小はたらき
五十一両式分	一 売人えし

次出し四百上り	日数廿五日
数一万	同五日
なり物	同二日
釜入	同二日
釜出し	同二日
釜焼	同二日
云のすじ	同五日
すやき	同二日
荷つつみ	同三日
休日	同二日
日数メ四十八日	同二日
此代金 拾貳両	同二日
壱匁貳分	同二日
壱匁貳分	同二日
「」貳分	同二日
式分	同二日
メ拾八両	但し三匁つもい
次出し壱万	具
一 売貰五百匁但し一ツ賣分五厘	くすり
此代金廿五両	薪木
差引七両過	土代
外ニ覺	トウ具
金五拾一両式分	
五人給金	



同	一	三拾七貫六百目
十六日	一	三拾三貫八百目
廿日	一	四拾貰武百目
	一	土七駄
	内	武駄たり
十一月廿七日	一	廿八貫四百目
	一	三拾三貫百目
	四拾貰百目	
十九日	一	四拾貰五百目
	三拾四貫	
三拾三貫八百目	一	
三拾七貫六百目	一	
三拾七貫五百匁	一	
十九日	同	

兼 弥 安 太 郎 兼 弥 安 太 郎 兼 弥 安 太 郎 同 人 同 人 同 人

天保十一庚子年

酒

中町

新製

諸入用扣帳

土焼

九月吉日

①

覺

九月十五日 和兵衛ト申

職人參り新製燒物始候事

②

老匁

疊式枚  
板九尺大工式人  
大工老人半六ト板八寸は  
十二枚

一四匁五分

きねふ三本  
炭一表

せうし紙

三拾六文

板一坪  
せうじ一本すやき窯  
式百文忠左衛門  
式百文

百文									
六拾文									
四拾八文									

メ武貫三百と五十文

③

石ほり駄賃

報弥

三百文

一百文

一百文

一百文

同土付

同断

同断

嘉蔵馬

茂太郎

初治郎

石ほり二人

廿五貫五百日

安太郎

同人

同人

同人

同人

同人

同人

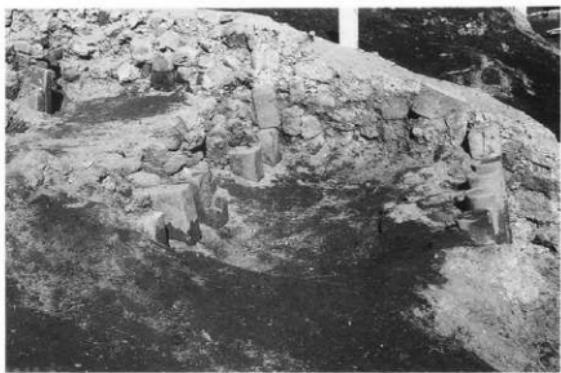
酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒
酒蓋燒									
酒蓋出し									

## 報告書抄録

ふりがな	せばやき わへえかまあと はっくつちょうさほうこくしょ				
書名	洗馬焼 和兵衛窯跡 発掘調査報告書				
副書名					
卷次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	小林康男 小口達志				
編集機関	塩尻市教育委員会				
所在地	〒399-07 長野県塩尻市大門七番町3番3号 TEL 0263-52-0280				
発行年月日	西暦 1996年 3月 20日				

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
わへえかまあと 和兵衛窯跡	長野県塩尻市 大字洗馬元町	20215	36° 06' 09"	137° 54' 51"	1992年12月22日 1993年1月19日 1993年11月12日 1994年3月12日	490	畠地帯総合 土地改良事 業桔梗ヶ原 地区に伴う 事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
和兵衛窯跡	生産遺跡	江戸時代	連房式登窯 2基 工房跡 1軒 土坑 6基	・陶器 ・磁器 ・土器 ・窯道具 など40万点	近世末の地方窯の実態 が遺構・遺物・古文書 によって明らかになった。



1号窯跡第1・2室



1号窯跡燃焼室挿間



1号窯跡(上から)

図 版 23



1号窯跡第6室



2号窯焼室



2号窯跡第4室

2号窯跡第7室



2号窯跡第8室－煙道部(左端)



2号窯跡第8室－煙道部(右端)



図版 25



工房跡



工房跡石積掘り方



工房跡粘土貯め出土標本

1号土坑



2~5号土坑



6号土坑(黑色土部)



図版 27



遺跡保存工事



保存工事終了